

孔子世家疏證

吉 本 道 雅

孔子傳復元の試みには膨大な蓄積があるが*1、實のところ、『史記』孔子世家の記述を恣意的に取捨選擇するものであったといわざるを得ない。これらにおいては、春秋時代の歴史的實態*2 および『史記』の編纂上の特徴*3 に對する體系的な理解が決定的に不十分であったと考える。

春秋時代に關する編年的情報は、『春秋經』および『左傳』によって獲得される。

『春秋經』は魯の年代記の形式を採り、『左傳』の用いる經文は、隱公元年（前 722）から哀公十六年（前 479）の「孔丘卒」までを記述する。

『左傳』は『春秋經』の注釋の形式を採り、隱公元年（前 722）～哀公二十七年（前 468）を編年體で記述する。『左傳』は前 370 年前後の成書と推定される。小倉芳彦は、『左傳』の記述を、(1) 春秋時代の事件を比較的忠實に傳えている實録の部分、(2) 説話の中で展開されている演説調の部分、(3) 段落の末尾に附加された人物評や、『春秋經』の書法を説明した部分、の三層に分ち、『左傳』の原資料の重層性を論じた*4。小倉の議論を参照すれば、『左傳』を用いた研究とは、(1) による春秋時代の實態の解

*1 清朝以前の研究については、錢穆『先秦諸子繫年』（香港大學、1956）參照。清末以降については、康有爲『新學僞經考』（1891）・『孔子改制考』（1897）・章太炎「原儒」（『國故論衡』1910）ついで胡適「說儒」（『中央研究院歷史語言研究所集刊』4-3、1934）以降の儒教研究を包括的に把握する必要があるが、それは先秦史の範疇を超えて、近現代中國思想史の領域に屬する。日本の研究は、さしあたり江連隆『論語と孔子の事典』（大修館書店、1992）の「文獻案内」が網羅している。英語圏の研究については、Michael Nylan, Thomas Wilson, *Lives of Confucius: Civilization's Greatest Sage Through the Ages*, Doubleday, 2010 が現況の一端を傳える。これら孔子ならびに『論語』の研究史については別稿に委ねたい。

*2 本稿に記述する春秋時代の政治史的推移については、吉本『中國先秦史の研究』（京都大學學術出版會、2005）・「『左傳』と鄭」（『中國史學』28、2018）を見よ。

*3 『史記』の編纂上の特徴については、吉本「史記原始（一）西周期・東遷期」（『古史春秋』4、1987）・「史記述春秋經傳小考」（『史林』71-6、1988）・「史記原始－戰國期－」（『立命館文學』547、1996）を見よ。

*4 小倉芳彦『中國古代政治思想研究—『左傳』研究ノート—』（青木書店、1970）。

明、(2) (3) による前 370 年前後の春秋時代に對する歴史認識の解明ということになる。そのような後代性にも関わらず、『左傳』における引用が確認される『論語』や檀弓など『禮記』の最古の諸篇を除けば、『左傳』は春秋時代に最も近く年代附けられ、従って(2) (3) の部分にしても、春秋時代に對する最古の注釋となるのであり、さらに、使用言語の點から、『孟子』や「前 3 世紀の標準文語」を用いる諸子百家の文献より古いことは確實である*5。

『春秋經』および『左傳』、さらに『論語』や『禮記』檀弓*6 は、もとより春秋時代の同時代資料ではないにしても、これらが現時點では春秋時代に關する最も確度の高い情報を提供するものとなる。

『史記』孔子世家については、とりわけ孔子去魯の編年に、十二諸侯年表など孔子世家以外の諸篇との矛盾が少なからず存在するにも関わらず、それが包括的・體系的には説明されていない。これは原資料の多様性と編纂の重層性といった『史記』の特徴が考慮されていないからである。ついで孔子世家の原資料についていえば、まずは(1)『左傳』および『論語』・『禮記』檀弓、やや降って『孟子』*7 など前 4 世紀以前の材料、(2) 前 3 世紀以降に降る材料、に大別され、加えて編年性をもった材料は『左傳』にほぼ限定されている。『左傳』に由来しない孔子世家の編年は『史記』の段階における「解釋」に基づくものがほとんどであり、そのことは、孔子世家と『史記』のその他の部分の矛盾が編年に顯著であることに明示されている。孔子世家の個々の記述の信憑性を場当たりに云々する以前に、孔子世家の原資料・編纂過程に留意しつつ、その記述を體系的に検討せねばならない。

以上のような視點に立ちつつ、本稿では、まず孔子世家の個々の記述の原資料を確認し、あわせて、『左傳』など前 4 世紀以前の材料によって復元された春秋時代の歴史

*5 『左傳』の成書については、吉本「『左傳』と春秋史」(『京都大學文學部研究紀要』54、2015)・「春秋時代の出現」(『中國古代史論叢』10、印刷中)を見よ。先秦文献のおよその成書年代については、吉本「春秋事語考」(『泉屋博古館紀要』6、1990)を見よ。

*6 檀弓については、吉本「檀弓考」(『古代文化』44-5、1992)を見よ。

*7 『孟子』の成書過程については、吉本「孟子章次考」(『金啓琮先生逝世周年紀念文集』、東亞歴史文化研究會、2005)を見よ。渡邊卓『古代中國思想の研究』(創文社、1973)は、『孟子』における孔子像が孟子自身の願望を強く反映したものであることを主張するが、この問題については、ここでは立ち入らない。

的實態の中に孔子世家の記述を位置づけることを試みる。

●襄二十二（前 551）一歳

孔子生魯昌平鄉陬邑 [1]。其先宋人也 [2]、曰孔防叔 [3]。防叔生伯夏、伯夏生叔梁紇 [4]。紇與顔氏女野合而生孔子 [5]、禱於尼丘得孔子。魯襄公二十二年而孔子生 [6]。生而首上圩頂、故因名曰丘云。字仲尼、姓孔氏。丘生而叔梁紇死、葬於防山。防山在魯東、由是孔子疑其父墓處、母諱之也。孔子爲兒嬉戲、常陳俎豆、設禮容 [7]。孔子母死、乃殯五父之衢、蓋其慎也。邾人輓父之母誨孔子父墓、然後往合葬於防焉 [8]。孔子要經、季氏饗士、孔子與往。陽虎絀曰、「季氏饗士、非敢饗子也。」孔子由是退 [9]。

[1] 魯昌平鄉陬邑 『史記』においては、人物の出身地について縣・郷を聯ねる事例が認められる*8。「魯昌平郷」は魯縣昌平郷*9、前漢時代現行の行政單位とみなしてさしつかえない。昌平郷につき、『正義』の引く『括地志』に「昌平山在泗水縣南六十里。孔子生昌平郷、蓋郷取山爲名」とある。陬邑につき、『左傳』襄十「邾人紇」の杜注に「紇、邾邑大夫、仲尼父叔梁紇也。邾邑、魯縣東南莖城是也」とある。西晉時代には陬邑の故地と傳わる城址があり、前漢においても同様に昌平郷管區に陬邑の城址をとどめるのみだったのであろう。

[2] 其先宋人也 孔子祖先の系譜は、『毛詩正義』商頌/那に引く『世本』に見えるが*10、『孔子家語』本姓解*11の世子勝を抜き、睪夷を祁父に作るなど出入りがある。

*8 陳丞相世家「陳丞相平者、陽武戶牖郷人也」・老子韓非列傳「老子者、楚苦縣厲郷曲仁里人也」・白起王翦列傳「王翦者、頻陽東郷人也」。

*9 『漢書』地理志/魯國「故秦薛郡、高后元年爲魯國。屬豫州。戶十一萬八千四十五、口六十七萬七千三百八十一。縣六。魯 伯禽所封。戶五萬二千。有鐵官。…」。

*10 『毛詩正義』商頌/那「世本云、宋潛公生弗甫何、弗甫何生宋父、宋父生正考甫、正考甫生孔父嘉、爲宋司馬華督殺之、而絕其世。其子木金父降爲士。木金父生祁父、祁父生防叔、爲華氏所偏、奔魯、爲防大夫、故曰防叔。防叔生伯夏、伯夏生叔梁紇、叔梁紇生仲尼、則正考甫是孔子七世之祖、故云孔子之先也」。

*11 『孔子家語』本姓解「弗父何生宋父周、周生世子勝、勝生正考甫、考甫生孔父嘉、五世親盡、別爲公族、故後以孔爲氏焉、一曰孔父者、生時所賜號也、是以子孫遂以氏族。孔父生子木金父、金父生睪夷、睪夷生防叔、避華氏之禍而奔魯。方叔生伯夏、伯夏生叔梁紇」。

『世本』	『孔子家語』
弗甫何	弗父何
宋父	宋父周
	世子勝
正考甫	正考甫
孔父嘉	孔父嘉
木金父	木金父
祁父	睪夷
防叔	防叔
伯夏	伯夏
叔梁紇	叔梁紇

孔子世家は、後文で弗父何・正考父・孔父に言及する『左傳』昭七を引き、またここでは防叔・伯夏・叔梁紇を示すだけである。『世本』『孔子家語』に見えるような系譜が孔子世家の段階ですでに利用可能であったことは容易に想像されるが、孔子世家は孔子の系譜をたどることには関心をもたなかったといわざるをえない。

世子勝を含めて弗父何～叔梁紇十世代のおよその年代を推算してみよう。十世代のうち、まず孔父嘉の卒は、『春秋經』桓二（前 710）「二年春王正月戊申、宋督弑其君與夷及其大夫孔父」に見える。また叔梁紇の卒は、『孔子家語』本姓解「孔子三歳而叔梁紇卒」に従えば、襄二十四（前 549）となる。06 木金父～10 叔梁紇の五世代で 161 年、一世代 32.2 年となる。これを用いて孔父嘉・叔梁紇以外の卒年を推算すると次表のようになる。

01 弗父何	(838.8)
02 宋父周	(806.6)
03 世子勝	(774.4)
04 正考父	(742.2)
05 孔父嘉	710
06 木金父	(677.8)
07 祁父	(645.6)
08 防叔	(613.4)
09 伯夏	(581.2)
10 叔梁紇	549

『左傳』昭七に「其祖弗父何以有宋而授厲公。及正考父、佐戴・武・宣」とある。ここに推算した弗父何の卒年前 838 年は、宋厲公の子、釐公（前 858 ～前 831^{*12}）の在位年代に当たり、世子勝の卒年前 774 年から正考父の卒年前 742 年の年代は、宋戴公（前 800 ～前 766）・武公（前 765 ～前 748）・宣公（前 747 ～前 729）の在位年代に重なる。この推算の一定の有效性および傳承される系譜の一定の信憑性を示すものとなる。

[3] 孔防叔 上掲『世本』『孔子家語』は防叔の時に魯に亡命したとする。孔子世家が防叔を「宋人」とするのは、同様の認識に基づくものであろう。叔梁紇は『左傳』襄十（前 563）に初見するが、『春秋經』文八（前 619）「宋人殺其大夫司馬。宋司城來奔」の「來奔」に對し、『左傳』はかなり詳細な説明を施している^{*13}。叔梁紇の祖父である防叔の時代に相當することは偶然ではないかもしれない。

『世本』は防叔が防大夫に任ぜられたため、防叔と稱したとする。亡命者を登用することは『左傳』に頻見し、公邑大夫に任ぜられる事例も認められる^{*14}。邑名+仲叔の稱謂がその邑を管理する官職（公邑大夫・封人）に由來する事例としては、

潁考叔爲潁谷封人。（隱元）

祭封人仲足有寵於莊公、…故祭仲立之。（桓十一）

羣公子奔蕭。公子御說奔亳。南宮牛・猛獲帥師圍亳。冬十月、蕭叔大心及戴・武・宣・穆・莊之族以曹師伐之。（莊十二）

などがあり、防叔が防邑の公邑大夫であったという『世本』の説明に適合的である。もともと邑+叔にさらに氏を冠する稱謂は『左傳』には見えない。『世本』『孔子家語』も「防叔」とのみ記す。「孔防叔」は孔子世家の造語である。

防につき、江永『鄉黨圖考』卷二/聖蹟/先世考は、「魯有東西二防、此當爲東防、在今兗州府費縣東北也」とするが、むしろ孔子父母の墓所たる防山のあたりとすべきであろう。『正義』の引く『括地志』には「防山在兗州曲阜縣東二十五里」とある。孔

*12 春秋王侯の在位年代については吉本「春秋紀年表」（『東亞文史論叢』2006）を見よ。

*13 『左傳』文八「宋襄夫人、襄王之姊也、昭公不禮焉。夫人因戴氏之族、以殺襄公之孫孔叔・公孫鍾離及大司馬公子印、皆昭公之黨也。司馬握節以死、故書以官。司城蕩意諸來奔、效節於府人而出。公以其官逆之、皆復之、亦書以官、皆貴之也」。

*14 『左傳』成二「巫臣…遂奔晉、而因郤至、以臣於晉。晉人使爲邢大夫」・襄三十「羽頡出奔晉、爲任大夫」。

子父母の墓所が叔梁紇が公邑大夫に任ぜられた陬ではなく、防にあったのは、それが叔梁紇の父祖たる防叔・伯夏の墓所であったからであろう。防叔が費縣東北の「防」の公邑大夫に任ぜられ、ついで叔梁紇が曲阜東郊の「防」山に葬られたという想定は偶中に過ぎる。江永が費縣東北の防としたのは、叔梁紇に關わる後掲『左傳』襄十七の記述に登場することに牽引されたものであろう。

[4] 叔梁紇 紇は、『左傳』には、

晉荀偃・士匄請伐偃陽、而封宋向戌焉。荀偃曰、「城小而固、勝之不武、弗勝爲笑。」固請。丙寅、圍之弗克。孟氏之臣秦堇父輦重如役。偃陽人啟門、諸侯之士門焉。縣門發、邾人紇挾之、以出門者。…師歸、孟獻子以秦堇父爲右。生秦丕茲、事仲尼。
(襄十・前 563)

秋、齊侯伐我北鄙、圍桃。高厚圍臧紇于防。師自陽關逆臧孫、至于旅松。邾叔紇・臧疇・臧賈帥甲三百、宵犯齊師、送之而復。(襄十七・前 556)

に邾人紇・邾叔紇として二見する。襄十の孔穎達正義に、

孔子之父名紇、字叔梁。古人名字並言者、皆先字而後名。故史記孔子世家稱爲叔梁紇也。

とあり、梁玉繩『漢書人表考』卷六は「叔梁紇始見史孔子世家」と指摘する。「先字而後名」には、『左傳』僖三十三「百里孟明視」(僖三十二疏「世族譜以百里孟明視爲百里奚之子、則姓百里、名視、字孟明也。古人之言名字者、皆先字後名、而連言之」)に用例がある。

襄十「邾人紇」の「邾人」は、『論語』八佾

子入大廟、每事問。或曰、「孰謂邾人之子知禮乎。入大廟、每事問。」子聞之曰、「是禮也。」

に見える。『論語』の「邾人」を『左傳』襄十の「邾人紇」に附會して、叔梁紇を孔子の父としたとする説があるが*15、下文にも隨時指摘するように、『左傳』において『論語』の引用例が散見することを考慮するならば、むしろ『左傳』襄十の「邾人紇」が『論語』の「邾人之子」を前提とした表現となる。杜預が「言二父以力相尚。子事仲尼、以德相高」と指摘するように、襄十は孔子・秦丕茲の父である邾人紇・秦堇父の活躍を描

*15 H.G. クリール (田島道治譯) 『孔子—その人と傳説—』(岩波書店、1961)。

いたものであり、「鄆人紇」が孔子の父であることは『左傳』の讀者にとって自明の前提であった。襄十を『論語』に附會したことで紇と孔子の父子關係が創作されたのではない。

加えて指摘すべきは、「鄆人紇」の邑+人+名という稱謂である。杜預は「鄆人紇」に「紇、鄆邑大夫」と注し、孔穎達疏は「紇爲鄆邑大夫、公邑大夫、皆以邑名冠之、呼爲某人」とこれを敷衍する。ところが問題となるのは、「鄆人紇」以外に、邑+人+名の事例として杜預が挙げているのが、『左傳』昭二十一「廚人濮」（注「濮、宋廚邑大夫」）しかないということである。宋の廚邑は諸文獻に見えず、しかも、「廚人濮」について、『通志』卷二十八/氏族略四/以官爲氏「厨人氏 周禮厨人因官爲氏。宋有厨人濮。見釋例」は廚を邑名と解していない。要するに、「鄆人紇」は實は『左傳』において孤立した稱謂の形式といわざるをえない。これは「鄆人紇」が『論語』の「鄆人之子」を引用したものであることの明證となる。

叔梁紇を鄆の公邑大夫とすることは、『孔子家語』本姓解「陔大夫」や『論語集解』八佾「孔曰、鄆、孔子父叔梁紇所治邑」に見え、杜預が鄆人紇を「陔邑大夫」とすることは、より直接にはこれらに基づくものであろう。そうした認識のもと、杜預は「邑+人」を公邑大夫の稱謂とするわけだが、『左傳』においては傍證を缺くといわざるをえない。むしろ注目すべきは、襄十七の「鄆叔紇」である。防叔につき述べたように、「邑+叔」こそ公邑大夫の稱謂となる。

鄭環『孔子世家考』は叔梁紇につき「然曰叔、當亦有伯而闕之」と指摘する。紇が防山に葬られたのは、防に孔氏の族墓があったためであろう。『左傳』桓二「大夫有貳宗」（注「適子爲小宗、次子爲貳宗、以相輔貳」）を参照するならば、防の孔氏小宗は紇の兄が嗣ぎ、紇はあるいは鄆邑大夫に任ぜられたことを契機に貳宗を立てたということになろう。

[5] 紇與顔氏女野合而生孔子 「野合」については諸説あるが^{*16}、ここでは立ち入らない。孔子世家が孔子父母の婚姻の特異性を指摘したという事実を確認すればさしあたり十分である。

*16 楊軍・恩子健・徐長青「海昏侯墓衣鏡畫傳“野居而生孔子”考」（『江西師範大學學報（哲學社會科學版）』2018-1）に「野合」に関する諸説が整理されている。

孔子之母を顔氏とすることは、孔子世家に初見するが、一方で、『禮記』檀弓下「二名不偏諱、夫子之母名徵在、言在不稱徵、言徵不稱在」は孔子の母の名を徵在としており、その時点で「顔徵在」の氏名が知られていたことは容易に推測される。

顔氏については、『公羊』昭三十一に「邾顔」が見え^{*17}、『通志』卷二十七/氏族略三/以字爲氏/邾人字は、仲尼弟子列傳に見える顔氏八人は邾顔に出自するとし^{*18}、さらに『路史』後紀八は、この顔氏を「仲尼母族」とする^{*19}。この八人は仲尼弟子列傳に

顔回者、魯人也、字子淵。少孔子三十歲。

顔無繇字路。路者、顔回父、父子嘗各異時事孔子。

顔幸字子柳。少孔子四十六歲。(集解「鄭玄曰魯人。」)

顔高字子驕。

顔祖字襄。(正義「魯人」)

*17 『公羊』昭三十一「冬、黑弓以濫來奔。文何以無邾婁。通濫也。曷爲通濫。賢者子孫、宜有地也。賢者孰謂。謂叔術也。何賢乎叔術。讓國也。其讓國奈何。當邾婁顔之時、邾婁女有爲魯夫人者、則未知其爲武公與。懿公與。孝公幼、顔淫九公子于宮中、因以納賊、則未知其爲魯公子與。邾婁公子與。臧氏之母、養公者也。君幼則宜有養者、大夫之妾、士之妻、則未知臧氏之母者、曷爲者也。養公者必以其子入養。臧氏之母聞有賊、以其子易公、抱公以逃。賊至、湊公寢而弑之。臣有鮑廣父與梁買子者、聞有賊、趨而至。臧氏之母曰、公不死也、在是。吾以吾子易公矣。於是負孝公之周訴天子、天子爲之誅顔而立叔術、反孝公于魯。顔夫人者、媼盈女也、國色也、其言曰、有能爲我殺顔者、吾爲其妻。叔術爲之殺顔者、而以爲妻。有子焉、謂之盱、夏父者、其所爲有於顔者也。盱幼而皆愛之、食必坐二子於其側而食之。有珍怪之食、盱必先取足焉。夏父曰、以來、人未足、而盱有餘。叔術覺焉、曰、嘻。此誠爾國也夫。起而致國于夏父、夏父受而中分之。叔術曰、不可。三分之、叔術曰、不可。四分之、叔術曰、不可。五分之、然後受之。公扈子者、邾婁之父兄也。習乎邾婁之故、其言曰、惡有言人之國賢若此者乎。誅顔之時天子死、叔術起而致國于夏父。當此之時、邾婁人常被兵于周、曰、何故死吾天子。通濫、則文何以無邾婁。天下未有濫也。天下未有濫、則其言以濫來奔何。叔術者、賢大夫也。絕之則爲叔術不欲絕、不絕則世大夫也。大夫之義不得世、故於是推而通之也」。

*18 『通志』卷二十七/氏族略三/以字爲氏/邾人字「顔氏 曹姓。顓帝玄孫陸終第五子曰安、安裔孫挾、周武王時封之於邾、爲魯附庸。邾挾之後至於夷父字顔。公羊謂之顔公、子孫因以爲氏。據圈稱陳留風俗傳及葛洪要字皆如此云。但謂顔爲武公、然邾自顔六世至文公遽除、始有爵諡。武公之號、未必然也。王儉譜云、顔氏出自魯侯伯禽支庶、食采顔邑、因氏焉。眞卿尚書譜云、未知儉何所憑。故當依圈葛二家及舊譜爲定。仲尼弟子達者顔氏八人、四科之首稱顔淵、然惟齊魯多頭氏、豈其近於邾、故顔公之子孫、散在二國與。漢有大司農顔異、濟南人。顔駟、江都人。後漢顔良、爲袁紹將、臨沂人」。

*19 『路史』後紀八「仲尼之門、顔氏之達者八(路・回・僕・會・何・祖・克・辛也。之推云、仲尼母族、故多賢。蓋私言)」。

顔之僕字叔。(集解「鄭玄曰魯人。」)

顔噲字子聲。(集解「鄭玄曰魯人。」)

顔何字冉。(集解「鄭玄曰魯人。」)

と見える。鄭玄説は『隋書』經籍志に著録される「論語孔子弟子目錄一卷 鄭玄撰」を引いたものである。顔高(孔子世家の顔刻)以外は、いずれも「魯人」と注記する。ここで指摘しておきたいのは、仲尼弟子列傳における「魯人」の意味するところである。

仲由字子路、卞人也。少孔子九歳。

曾參、南武城人、字子輿。少孔子四十六歳。

澹臺滅明、武城人、字子羽。少孔子三十九歳。

に認められるように、卞・武城(南武城*20)は魯の疆域に屬するが、それらの出身者は「魯人」とは區別されている。「魯人」とは魯の都城である曲阜に居住する「國人」を指すものとなる。

『論語』郷黨「孔子於郷黨、恂恂如也、似不能言者」の「郷黨」が「國」に下屬する單位であることは、『左傳』に確認される*21。「孔子於郷黨」は、孔子が曲阜に移住して来たことの證左となる。匡亞明は紇の死を契機に顔氏の實家を頼ったものとするが*22、この推測は決してゆえなきものではない。

今一つ指摘しておきたいのは、『左傳』に見える顔氏についてである。

師及齊師戰于炊鼻。…冉豎射陳武子、中手(注「冉豎、季氏臣」)、失弓而罵。以告平子曰、…林雍羞爲顔鳴右、下(注「皆魯人」)。苑何忌取其耳。顔鳴去之。苑子之御曰、「視下。」顧。苑子剋林雍、斷其足、鑿而乘於他車以歸。顔鳴三入齊師、呼曰、「林雍乘。」(昭二十六・前 516)

八年春王正月、公侵齊、門于陽州。士皆坐列、曰、「顔高之弓六鈞(注「顔高、

*20 錢穆『先秦諸子繫年』29 孔子弟子通考は南武城を武城の別稱とする。

*21 『左傳』襄九「九年春、宋災、樂喜爲司城以爲政、使伯氏司里。火所未至、徹小屋、塗大屋、陳畚揭。具綆罐、堪器。量輕重、蓄水潦、積土塗。巡丈城、繕守備、表火道。使華臣具正徒、令隧正納郊保、奔火所。使華閱討右官、官庀其司。向戌討左、亦如之。使樂遄庀刑器、亦如之。使皇郎命校正出馬、工正出車、勞兵、庀武守。使西鉏吾庀府守、令司宮、巷伯儆宮。二師令四郷正敬享、祝宗用馬于四墉、祀盤庚于西門之外」・定十五「吳之入楚也、使召陳懷公。懷公朝國人而問焉、曰、「欲與楚者右、欲與吳者左。陳人從田、無田從黨。」」。

*22 匡亞明『孔子評傳』(南京大學出版社、1990)。

魯人)」。皆取而傳觀之。陽州人出、顔高奪人弱弓、籍丘子鉏擊之、與一人俱斃。偃、且射子鉏、中頰、殪。顔息射人中眉(注「顔息、魯人」、退曰、「我無勇、吾志其目也。」師退、冉猛僞傷足而先(注「猛、魯人)」。其兄會乃呼曰、「猛也殿。」(定八・前 502)

十一年春、齊爲鄆故、國書・高無丕帥師伐我、及清。季孫謂其宰冉求曰、…孟孺子洩帥右師、顔羽御、邴洩爲右(注「二子、孟氏臣)」。冉求帥左師、管周父御、樊遲爲右。(哀十一・前 484)

杜預によれば顔鳴・顔高・顔息は「魯人」、顔羽は「孟氏臣」であり、要するに大夫より低い士身分に屬する*23。『左傳』を通観すれば、士身分の人物が名を記されることは稀である。これらの記述が遺されているのは、一つには、とりわけ昭二十五(前 517)の昭公出奔以後の魯の内外情勢の不安定、それにとまなう社會的流動性の増大といった一般的な状況を描寫するための有効な素材として士身分を主人公とする逸話が選好されたということがあろう。しかし、ここで注目されるのは、これら顔氏の登場する記述の全てに冉氏が登場していることである。冉有は孔子の弟子で季氏の宰、さらに杜預によれば冉豈は「季氏臣」、冉猛は「魯人」で顔氏と同様に士身分である。實のところ、仲尼弟子列傳には、

冉耕字伯牛。(集解「鄭玄曰魯人。」)

冉雍字仲弓。(集解「鄭玄曰魯人。」索隱「家語云、伯牛之宗族、少孔子二十九歲。」)

冉求字子有、少孔子二十九歲。爲季氏宰。(集解「鄭玄曰魯人。」)

冉孺字子魯、少孔子五十歲。(索隱「家語字子魯、魯人。作冉孺。」)

冉季字子產。(集解「鄭玄曰魯人。」)

と實に五人もの冉氏が見える。上掲の『左傳』昭二十六・定八・哀十一の記述の全てに顔氏・冉氏が同時に登場するのは偶然ではありえない。かれらが孔門弟子の宗族だったからではないかと考える。

同じく魯の士に關する記述のいくつかがやはり孔門に關聯することは、この推論を

*23 さらに、『左傳』襄十九「齊侯娶于魯、曰顔懿姬、無子。其姪譚聲姬生光、以爲大子。(注「兄子曰曰孫。顔・譚皆二姬母姓、因以爲號。懿・聲皆諡)」では、齊靈公(前 581～前 554)が魯の顔懿姬を娶ったことが見える。顔懿姬の父は魯侯もしくは魯の公族であり、それと通婚した顔氏は大夫身分であったことが推定される。

傍證する。鄒人紇・秦堯父の登場する上掲襄十はそのもっとも早く年代づけられた事例であり、ついで哀八（前 487）

三月、吳伐我、子洩率、故道險、從武城。初、武城人或有因於吳竟田焉、拘鄆人之漚菴者、曰、「何故使吾水滋。」及吳師至、拘者道之以伐武城、克之。王犯嘗爲之宰、澹臺子羽之父好焉、國人懼（注「王犯、吳大夫、故嘗奔魯爲武城宰、澹臺子羽、武城人、孔子弟子也。其父與王犯相善、國人懼其爲內應」）。…微虎欲宵攻王舍（注「微虎、魯大夫」）、私屬徒七百人三踊於幕庭、卒三百人、有若與焉（注「有若、孔子弟子」）。

には、澹臺滅明の父および有若が見える。

また、崔述は、『春秋經』莊二十二「陳人殺其公子御寇」に對する『左傳』

二十二年春、陳人殺其大子御寇、陳公子完與顓孫奔齊。顓孫自齊來奔。

の顓孫が、仲尼弟子列傳「顓孫師、陳人、字子張」に見える子張の祖先であるとする*24。確かに、陳公子完が齊の陳氏（田氏）の開祖であるのに對し、顓孫はここにしか見えない。『左傳』の讀者にとって子張の祖先が陳人であるとの認識が共有されており、『左傳』の顓孫がそうした認識を説明するために記載されたと考えることは可能である。

仲尼弟子列傳は孔門弟子に關する最古の包括的記述である。「弟子籍、出孔氏古文」とあるように、「孔氏古文」に屬する『弟子籍』が參照されている。一方、『左傳』昭二十

琴張聞宗魯死（注「琴張、孔子弟子、字子開、名牢」）、將往弔之。仲尼曰、「齊豹之盜、而孟縶之賊、女何弔焉。君子不食姦、不受亂、不爲利疚於回、不以回待人、不蓋不義、不犯非禮。」

の琴張は、

牢曰、「子云、吾不試、故藝。」（『論語』子罕）

萬章問曰、「孔子在陳曰、「盍歸乎來。吾黨之士狂簡、進取、不忘其初。」孔子在陳、何思魯之狂士。」孟子曰、「孔子不得中道而與之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有所不爲也。孔子豈不欲中道哉。不可必得、故思其次也。」「敢問何如斯可謂狂矣。」曰、「如琴張・曾皙・牧皮者、孔子之所謂狂矣。」（『孟子』盡心下）

*24 崔述『洙泗考信餘錄』卷三/孔子弟子通考。錢穆『先秦諸子繫年』29 孔子弟子通考。

にも見えるが、仲尼弟子列傳には見えない。琴張はまた、『莊子』内篇/大宗師

子桑戸・孟子反・子琴張、三人相與友、曰、「孰能相與於無相與、相與於無相爲。孰能登天遊霧、撓挑無極。相忘以生、無所終窮。」三人相視而笑、莫逆於心、遂相與友。

にも見えるが、馬敘倫はこの孟子反を牧皮と同一人物とする*25。孟之反は『論語』雍也の孟之反、『左傳』哀十一の孟之側だが、やはり仲尼弟子列傳には見えない。

また襄十の「秦丕茲」について、『孔子家語』七十二弟子解は、「秦商、魯人、字不慈、少孔子四歳。其父董父、與孔子父叔梁紇俱力聞」とし、仲尼弟子列傳「秦商字子丕」の秦商に同定する。

要するに、『左傳』がその記述の前提とする孔門弟子に関する情報の一部が、仲尼弟子列傳以前に缺落しているということである。こうした状況を考慮するならば、『左傳』には、ここに掲げた事例以外にも、孔門關聯の情報が織り込まれている可能性がある。

[6] 魯襄公二十二年而孔子生 魯世家「二十二年（前 551）、孔丘生」・魯表「二十二年孔子生」にも見える。

『公羊』に襄二十一（前 552）「冬十月庚辰朔、…十有一月庚子、孔子生」、『穀梁』に襄二十一「冬十月庚辰朔、…庚子、孔子生」と見えるが、『左傳』の經は「孔子生」を含む一節をもたない。徐彦疏「左氏經無此言、則公羊師從後記之」は公羊家が附記したものとす。ところが、『公羊』については、阮元校勘記が、

考杜氏長麻、十月庚辰 17 小、十一月己酉 46 大、十一月無庚子 37、庚子乃十月二十一日也。齊召南說。

と述べるように、「冬十月庚辰 17 朔」の翌月に「十一月庚子 37」は収まらない。『穀梁』のように「十有一月」をもたない方が「冬十月庚辰朔」に適合するわけだが、その場合、『公羊』の「十有一月」の由來が説明されねばならない。

以下のようなシナリオが可能であろう。まずは公羊家において孔子生日を「襄公二十有一年十月庚子」とする傳承が獲得され、そこで襄二十一の經文の最後に「十月庚子、孔子生」が附記される。『穀梁』は『公羊』を批判的に踏襲して成書したと推定

*25 馬敘倫『莊子義證』卷六/内篇大宗師「牧孟音同明紐、皮反形既相似、聲亦歌元對轉、疑孟子反則牧皮也」。錢穆『先秦諸子繫年』29 孔子弟子通考。

されるが、『穀梁』が「孔子生」の一節をもつことは、この附記が『公羊』について『穀梁』が成書した前3世紀半ばになされたことを推定させる*26。「十月庚子、孔子生」は當初、附記であることがわかるような書式を維持していたはずだが、やがて抄寫の過程で經文と區別がつかなくなる。そこで「冬十月庚辰朔」「十月庚子」で「十月」が重複することが問題となる。『公羊』は、「十月庚子」の「十月」を脱文として「十有一月」に改める。『穀梁』は「十月庚子」の「十月」を經文編纂の際に削除を怠ったものと判断して、これを削除する。

一方、孔子世家が「魯襄公二十二年」とするのは、『春秋經』哀十六（前479）「夏四月己丑、孔丘卒」から孔子の卒年齢「七十三」を遡り、襄二十二としたものである。孔子世家は孔子から孔忠までの卒年齢を記している。孔氏歴代の卒年齢を漏れなく記した資料に基づくものであろう。『公羊』『穀梁』の襄二十一との矛盾は了解していたであろうが、『史記』にはまとまった資料を優先する傾向がある。

襄二十一と襄二十二あるいは七十三と七十四（七十三）、いずれも抄寫の過程で容易に誤りうる。現時点で孔子世家と『公羊』『穀梁』の優劣を論ずることは無意味であろう。なお、以下では孔子世家分析の便宜から、襄二十二出生としておく。

[7] 孔子爲兒嬉戲「俎豆」は『論語』衛靈公「衛靈公問陳於孔子。孔子對曰、「俎豆之事、則嘗聞之矣。軍旅之事、未之學也。」」に見える。「禮容」は『新書』に禮容語の篇名があり、『韓詩外傳』卷四に

傳曰、愛由情出、謂之仁、節愛理宜、謂之義、致愛恭謹、謂之禮、文禮謂之容、禮容之美、自足以爲治。

と見えるが、いずれも前漢に降る。

[8] 孔子母死 『禮記』檀弓上

孔子少孤、不知其墓。殯於五父之衢、人之見之者、皆以爲葬也。其慎也、蓋殯也。
問於鄆曼父之母、然後得合葬於防。

の引用である。上文の「由是孔子疑其父墓處、母諱之也」は「不知其墓」を説明した

*26 『公羊』『穀梁』の成書年代については、吉本「春秋三傳小考」（『東亞文史論叢』2003）を見よ。

ものである*27。

五父之衢につき、『正義』の引く『括地志』に「五父衢在兗州曲阜縣西南二里、魯城內衢道也」とある。孔子母子は紇の死を契機に都城に移住していたものであろう。「衢」は『爾雅』釋宮に「四達、謂之衢」とあり、五父之衢では、「詛」が行われ*28、また『左傳』昭二「七月壬寅、縊。尸諸周氏之衢、加木焉」には罪を問われ自決した鄭の世族駟氏に屬する公孫黒が周氏之衢に尸されている。「國人」一般への公開に用いられたのである。定八「陽虎說甲如公宮。取寶玉大弓以出。舍于五父之衢。寢而爲食」は季桓子謀殺に失敗した陽虎が五父之衢で休息したことを伝える。敗れてなお餘力のあるところを「國人」に示したものであろう。

孔子が五父之衢で聊曼父の母に出會ったことは、孔子が聊から曲阜に移住していたことを重ねて證明する。「不知其墓」にうかがわれる孔子の紇の宗族との斷絶は、上文の「紇與顔氏女野合而生孔子」に示された孔子父母の婚姻の特異性に呼應するものといつてよい。一聯の認識が、檀弓の段階ですでに存在したことを確認しておきたい。

[9] 孔子要經 中原諸侯國では、おおむね春秋前期までに特定の家系が卿位を獨占する世族支配體制が成立していた。僖二十八（前632）の晉霸の成立後、晉が同盟内の平和を強制したため、諸侯國においては邑田の獲得が困難となり、後發家系の成長が抑制された。晉はまた同盟國との関係を安定的に維持するため、世族を支持した。魯では桓公に出自する孟氏・叔孫氏・季氏の三桓が世族化し、とりわけ季文子が宣十八（前591）に東門氏を追放したのち、季氏が優越した地位を占めるようになった。襄五（前568）、季文子が卒し、季武子が立った。季武子は、軍制改編に乗じて「國人」の三桓への從屬を強化した。春秋時代における軍役は「國人」が特權的獨占的に負擔していたが、季武子の軍制改編の記述から、さらに魯の「國人」のより具體的なありかたがうかがわれる。魯の「國人」は、軍役負擔の反對給付として魯の疆域内に「役邑」

*27 『禮記』檀弓上「孔子既得合葬於防、曰、「吾聞之、古也墓而不墳。今丘也、東西南北之人也、不可以弗識也。」於是封之、崇四尺。孔子先反、門人後。雨甚、至。孔子問焉、曰、「爾來何遲也。」曰、「防墓崩。」孔子不應。三、孔子泫然流涕曰、「吾聞之、古不脩墓。」では孔子壯年の狀況が想定されている。

*28 『左傳』襄十一「穆子曰、然則盟諸。乃盟諸僖閔、詛諸五父之衢」・昭五「夫子唯不欲毀也、故盟諸僖閔、詛諸五父之衢」・定六「陽虎又盟公及三桓於周社、盟國人于亳社、詛于五父之衢」。

を與えられ、さらにおそらくは戦時に出征しない場合、その代償として役邑の収益の一部を貢納していた。その徴發が「征」である。「國人」の家は父兄子弟と汎稱される複数の軍役負擔者を含む。「征」の權益は、本來國君に專屬し、「公室」と稱された。

襄十一（前562）、季孫宿は三軍を設置し、三桓がそれぞれ「國人」の1/3を管轄することとした。三桓は自身に委ねられた「國人」について従來の軍役・貢納制を解體再編した。季氏は「國人」が役邑ごと專屬した場合、「征」を免除し、專屬を拒んだ場合は「征」を二倍にするとした。結果的に季氏管轄下の「國人」はみな季氏に屬することとなった。叔孫氏は「國人」の子弟を專屬させ、孟氏は子弟の半數を專屬させた^{*29}。「國人」の4/12が季氏、2/12が叔孫氏、1/12が孟氏に專屬し、5/12が國君に残されたことになる。ついで昭五（前537）には中軍が廢止され、「國人」の5/12に当たる「公室」の2/4が季氏に、残りの1/4ずつが叔孫氏・孟氏に分割された^{*30}。ここに「國人」の26/48が季氏、13/48が叔孫氏、9/48が孟氏に專屬することになった。

春秋時代には、また、世族宗主などが「士」に恩恵を施して自らへの支持を取り付けることがあった^{*31}。季氏についても、昭公亡命に關聯して、『左傳』昭二十五に「隱民多取食焉、爲之徙者眾矣」と見える。ここの「饗士」もこうした慣行が説話化したものであろう。

陽虎は『左傳』では昭二十七（前515）「孟懿子・陽虎伐鄆」（注「陽虎、季氏家臣。伐鄆、欲奪公」）に初見する^{*32}。

この一節については孔子が「要經」すなわち服喪中に季氏の饗に應じたことを、あ

*29 『左傳』襄十一「十一年春、季武子將作三軍、告叔孫穆子曰、「請爲三軍、各征其軍。」穆子曰、「政將及子、子必不能。」武子固請之。穆子曰、「然則盟諸。」乃盟諸僖閔、詛諸五父之衢。正月、作三軍、三分公室而各有其一。三子各毀其乘。季氏使其乘之人、以其役邑入者無征、不入者倍征。孟氏使半爲臣、若子若弟。叔孫氏使盡爲臣、不然不舎」。

*30 『左傳』昭五「五年春王正月、舎中軍、卑公室也。毀中軍于施氏、成諸臧氏。初作中軍、三分公室、而各有其一。季氏盡征之、叔孫氏臣其子弟、孟氏取其半焉。及其舎之也、四分公室、季氏擇二、二子各一、皆盡征之、而貢于公」。

*31 『左傳』文十四「公子商人驟施於國。而多聚士、盡其家、貸於公有司以繼之」・襄二十一「懷子好施、士多歸之」。さらに後述の如く『論語』陽貨・『孟子』滕文公下には陽虎が孔子に豚を贈ったことが見える。

*32 陽虎を季氏の宰とすることは、『公羊』定八「盜竊寶玉大弓。盜者孰謂。謂陽虎也。陽虎者、曷爲者也。季氏之宰也。季氏之宰、則微者也。惡乎得國寶而竊之。…」によやく初見する。『左傳』に明示されないのは、『左傳』の讀者にとって周知のことだったからであろう。

りえぬこととする護教論的な議論があるが^{*33}、むしろ注目したいのは、「孔子與往」の一句である。孔子は士身分に属するものとして季氏に招待されたのである。ところが陽虎があらためて孔子の士身分に疑義を呈したため、孔子は饗への参加を断念したのである。他の文獻に見えない逸話であり、史實性はもとより乏しいが、当時の士身分のありかたを考える上で示唆的である。

春秋時代の兵役は「國人」が特權的に負擔した。「國人」は大夫の下層および士から成る。士は諸侯國の軍事・行政に従事した。ところが、春秋後期には、世族の私邑から大量の兵員が動員されるようになり^{*34}、まずは、「國人」に出自することを要件としない家臣が軍事・行政に携わるものとして士に加わり、ついで軍事・行政に携わる能力を有したものも社會的に士とみなされるようになったものと思われる。『論語』子罕

達巷黨人曰、「大哉孔子。博學而無所成名。」子聞之、謂門弟子曰、「吾何執。執御乎。執射乎。吾執御矣。」

に見えるように、孔子は士としての能力を備え、また紇の死を契機に魯の「國」たる曲阜に移住し、郷黨に属した。「國人」としての社會的實態をすでに備えていたといつてよい。もっとも、『論語』八佾では

子入大廟、毎事問。或曰、「孰謂鄒人之子知禮乎。入大廟、毎事問。」子聞之曰、「是禮也。」

と、とくに「鄒人之子」と稱されている。孔子を揶揄する文脈でもあるが、現實には無効化していたものの、傳統的な基準に照らせば、鄒からの移住者の「國人」としての成員權は完全なものではなかったということであろう。仕官初期の逸話と推定されているが^{*35}、仕官以前にはなおさら「國人」＝士としての身分は疑問の餘地のあるものだったのであろう。

●昭七（前 535）十七歳

孔子年十七、魯大夫孟釐子病且死、誡其嗣懿子曰、「孔丘、聖人之後、滅於宋。其祖弗父何始有宋而嗣讓厲公。及正考父佐戴・武・宣公、三命茲益恭、故鼎銘云、一命而偃、

*33 崔述『洙泗考信錄』卷一／原始。

*34 『左傳』昭五「晉人若喪韓起・楊肸、五卿八大夫輔韓須・楊石、因其十家九縣、長轂九百、其餘四十縣、遺守四千、奮其武怒、以報其大恥」。

*35 『四書集註』八佾「此蓋孔子始仕之時、入而助祭也」。

再命而偃、三命而俯、循牆而走、亦莫敢余侮。饘於是、粥於是、以餬余口。其恭如是。吾聞聖人之後、雖不當世、必有達者。今孔丘年少好禮、其達者歟。吾即沒、若必師之。」及釐子卒、懿子與魯人南宮敬叔往學禮焉 [1]。是歲、季武子卒、平子代立 [2]。孔子貧且賤 [3]。及長、嘗爲季氏史、料量平。嘗爲司職吏而畜蕃息 [4]。由是爲司空。已而去魯、斥乎齊、逐乎宋衛、困於陳蔡之間、於是反魯。孔子長九尺有六寸、人皆謂之長人而異之。魯復善待、由是反魯 [5]。魯南宮敬叔言魯君曰、「請與孔子適周。」魯君與之一乘車・兩馬・一豎子俱、適周問禮、蓋見老子云。辭去、而老子送之曰、「吾聞富貴者送人以財、仁人者送人以言。吾不能富貴、竊仁人之號、送子以言、曰、聰明深察而近於死者、好議人者也。博辯廣大危其身者、發人之惡者也。爲人子者毋以有己、爲人臣者毋以有己。」 [6] 孔子自周反于魯、弟子稍益進焉 [7]。是時也、晉平公淫、六卿擅權、東伐諸侯。楚靈王兵彊、陵轢中國。齊大而近於魯。魯小弱、附於楚則晉怒。附於晉則楚來伐。不備於齊、齊師侵魯 [8]。

[1] 孔子年十七 『左傳』昭七（前 535）

九月、公至自楚。孟僖子病不能相禮、乃講學之、苟能禮者從之。及其將死也、召其大夫、曰、「禮、人之幹也。無禮、無以立。吾聞將有達者曰孔丘、聖人之後也、（注「聖人、殷湯。」）而滅於宋。其祖弗父何以有宋而授厲公。及正考父、佐戴・武・宣、三命茲益共、故其鼎銘云、一命而偃、再命而偃、三命而俯、循牆而走、亦莫余敢侮。饘於是、鬻於是、以餬余口。其共也如是。臧孫紇有言曰、聖人有明德者、若不當世、其後必有達人。（注「聖人之後、有明德而不當大位、謂正考父。」）今其將在孔丘乎。我若獲沒、必屬說與何忌於夫子、使事之、而學禮焉、以定其位。」故孟懿子與南宮敬叔師事仲尼。仲尼曰、「能補過者、君子也。詩曰、君子是則是效。孟僖子可則效已矣。」に據る。『左傳』昭七「三月、公如楚、鄭伯勞于師之梁。孟僖子爲介、不能相儀。及楚、不能答郊勞」は孟僖子の失態を記す。「孟僖子病不能相禮」以下はそれを受けた記述である。さらに「及其將死也」以下は、『春秋經』昭二十四（前 518）「二十四年春王三月丙戌、仲孫矧卒」に見える孟僖子の死の際に当たる。孔子世家がこれを昭七に繋げるのは誤りである*³⁶。

『春秋經』昭十一（前 531）「五月甲申、…仲孫矧會邾子、盟于祿禚」に對する『左傳』

*³⁶ 錢穆『先秦諸子繫年』3 孟懿子南宮敬叔學禮孔子考。

孟僖子會邾莊公、盟于祫祥、脩好、禮也。泉丘人有女、夢以其帷幕孟氏之廟、遂奔僖子、其僚從之。盟于清丘之社、曰、「有子、無相棄也。」僖子使助蘧氏之籬。

反自祫祥、宿于蘧氏、生懿子及南宮敬叔於泉丘人。其僚無子、使字敬叔。

によれば、孟懿子・南宮敬叔の出生は昭十二（前530）、孟僖子が卒した時點で十三歳である。孟懿子は、昭三十二（前510）には諸侯の大夫と會しており*37、『左傳』の文脈では、それまでには「禮」を習得していたことになる。『左傳』は、孟懿子・南宮敬叔の孔子への師事を昭二十四～昭三十二、かれらが十三～二十一歳の間に想定しているようである*38。『左傳』によれば、昭二十四、孔子三十四歳の頃には、すでに世族の間にまで孔子が評判になっていたということになる*39。

さらに『論語』には

孟懿子問孝。子曰、「無違。」樊遲御、子告之曰、「孟孫問孝於我、我對曰、無違。」

樊遲曰、「何謂也。」子曰、「生、事之以禮。死、葬之以禮、祭之以禮。」（爲政）

南宮适問於孔子曰、「羿善射、奭盪舟、俱不得其死然。禹稷躬稼、而有天下。」

夫子不答、南宮适出。子曰、「君子哉若人。尚德哉若人。」（憲問）

に孟懿子・南宮敬叔が見える*40。

*37 『春秋經』昭三十二「冬、仲孫何忌會晉韓不信・齊高張・宋仲幾・衛世叔申・鄭國參・曹人・莒人・薛人・杞人・小邾人城成周」。

*38 『孔子家語』正論解「南容說仲孫何忌既除喪、而昭公在外、未之命也。定公即位、乃命之、辭曰、「先臣有遺命焉、曰、夫禮、人之幹也、非禮則無以立。屬家老使命二臣、必事孔子而學禮、以定其位。」公許之。二子學于孔子。孔子曰、「能補過者、君子也。詩云、君子是則是傲、孟僖子可則傲矣、懲己所病、以誨其嗣、大雅所謂詒厥孫謀、以燕翼子、是類也夫」は孟懿子・南宮敬叔が定公即位ののち孔子に入門して禮を學び、卿・大夫に立ったとするが、『左傳』昭三十二に矛盾する。

*39 孔門には大夫層出身者も散見する。崔述『洙泗考信餘録』卷三/孔門弟子通考/史記著弟子國邑之誤は、仲尼弟子列傳「公冶長、齊人、字子長。（索隱「家語云、魯人、名萇、字子長。」）」の公冶長を『左傳』襄二十九「使公冶問（杜注「問公起居、公冶、季氏屬大夫。」）」の子孫とする。さらに仲尼弟子列傳「高柴字子羔。少孔子三十歳」につき『史記索隱』に「家語、齊人、高氏之別族。長不盈六尺、狀貌甚惡」とあり、齊の世族高氏の分族とする。また『論語』雍也の孟之反（『左傳』哀十一の孟之側）は『左傳』杜注に「之側、孟氏族也、字反」、『論語集解』に「孔曰、魯大夫孟之側」とある。錢穆『先秦諸子繫年』29孔子弟子通考。

*40 仲尼弟子列傳は「南宮括字子容」以下で、南宮敬叔を『論語』公冶長「子謂南容、邦有道、不廢。邦無道、免於刑戮。以其兄之子妻之」・先進「南容三復白圭、孔子以其兄之子妻之」の南容と同一人物とするが、錢穆『先秦諸子繫年』3孟懿子南宮敬叔學禮孔子考が考證するように、別人である。

孟僖子が孔子を知っていたのは、あるいはその祖父である孟獻子の指揮下に叔梁紇が軍功を立てたことに遠因があったのかもしれない*41。加えて孟獻子については、『孟子』萬章下

萬章問曰、「敢問友。」孟子曰、「不挾長、不挾貴、不挾兄弟而友。友也者、友其德也、不可以有挾也。孟獻子、百乘之家也、有友五人焉。樂正裘・牧仲、其三人、則予忘之矣。獻子之與此五人者友也、無獻子之家者也。此五人者、亦有獻子之家、則不與之友矣。」

が身分を越えた「友」を有していたことを伝える。世族宗主は多様な人的結合関係を構築することで権力の維持に腐心したということであろう。

『左傳』昭七に「聖人」が二見し、杜預は前者を湯、後者を正考父とするが、錢綺が指摘するように、ともに正考父を指すものとすべきである*42。降って『漢書』古今人表は、上上～下下の九品を設け、上上・上中・上下・下下をとくに「聖人」「仁人」「智人」「愚人」とする。「聖人」は太昊帝宓戲氏・炎帝神農氏・黃帝軒轅氏・少昊帝金天氏・顓頊帝高陽氏・帝嚳高辛氏・帝堯陶唐氏・帝舜有虞氏の古帝王、帝禹夏后氏・帝湯殷商氏・文王周氏・武王・周公の三代の開祖、そして仲尼のみを列する。儒教國教化以後、「聖人」は孔子の代名詞となるのである。ところが、先秦時代においては「聖」はよほど一般的に用いられており、『左傳』では昭七の正考父のほか、襄二十二

二十二年春、臧武仲如晉。雨、過御叔。御叔在其邑、將飲酒、曰、「焉用聖人。我將飲酒而已。雨行、何以聖爲。」穆叔聞之、曰、「不可使也、而傲使人、國之蠹也。」令倍其賦。

では臧武仲が「聖人」と稱せられている。『左傳』には孔子を「聖人」と稱する事例が無い。『論語』子罕

太宰問於子貢曰、「夫子聖者與。何其多能也。」子貢曰、「固天縱之將聖、又多能也。」子聞之、曰、「太宰知我乎。吾少也賤、故多能鄙事。君子多乎哉。不多也。」

の「聖」は「多能」をいい、『禮記』檀弓上

*41 貝塚茂樹『孔子』(1951。『貝塚茂樹著作集』9、中央公論社、1976)。

*42 錢綺『左傳札記』卷四「下云、臧孫紇有言曰、聖人有明德者、若不當世、其後必有達人。杜云、聖人之後有明德、而不當大位。倒傳文其後二字於有明德之上、紆曲不可通。聖人乃明知之稱、故臧武仲當時亦以爲聖人。何必遠舉商湯。」

子思之母死於衛、柳若謂子思曰、「子、聖人之後也、四方於子乎觀禮、子蓋慎諸。」子思曰、「吾何慎哉。吾聞之、有其禮、無其財、君子弗行也。有其禮、有其財、無其時、君子弗行也。吾何慎哉。」

孔子之喪、有自燕來觀者、舍於子夏氏。子夏曰、「聖人之葬人與。人之葬聖人也。子何觀焉。昔者夫子言之曰、「吾見封之若堂者矣、見若坊者矣、見若覆夏屋者矣、見若斧者矣。」從若斧者焉。馬鬣封之謂也。今一日而三斬板、而已封、尚行夫子之志乎哉。」

の「聖人」も具體的には喪禮に關する博識を指すものに過ぎない。

[2] 季武子卒 『左傳』昭七「十一月、季武子卒」に據る。「季武子卒」は、魯世家「七年、季武子卒」・魯表「七 季武子卒」にも見えるが、「平子代立」相當部分は見えない。孔子世家は季氏の動向により詳細である。

季平子は武子の孫、悼子の子である。『左傳』襄二十三（前 550）に、

季武子無適子、公彌長而愛悼子、欲立之。訪於申豐曰、「彌與紇、吾皆愛之、欲擇才焉而立之。」申豐趨退、歸、盡室將行（注「申豐、季氏屬大夫。」）。他日又訪焉。對曰、「其然、將具敝車而行。」乃止。訪於臧紇、臧紇曰、「飲我酒、吾爲子立之。」季氏飲大夫酒、臧紇爲客。既獻、臧孫命北面重席、新樽絜之。召悼子、降、逆之。大夫皆起。及旅而召公鉏、使與之齒。季孫失色。季氏以公鉏爲馬正、慍而不出。閔子馬見之、曰、「子無然。禍福無門、唯人所召。爲人子者患不孝、不患無所。敬共父命、何常之有。若能孝敬、富倍季氏可也。姦回不軌、禍倍下民可也。」公鉏然之、敬共朝夕、恪居官次。季孫喜、使飲已酒、而以具往、盡舍旃。故公鉏氏富、又出爲公左宰。

とあるように、武子には適子が無かったため、後繼者決定が紛糾した。悼子は經文に見えず、平子が昭十（前 532）に初見する。悼子は武子に先立ち卒したものと考證されている*43。

*43 『左傳正義』昭二十五「武子生悼子、悼子生平子、政在季氏、唯云三世、不數悼子者、悼子未爲卿而卒、不執魯政、故不數也。十二年傳曰、季悼子之卒也、叔孫昭子以再命爲卿。卿必再命乃得、經書名氏。七年三月經書、叔孫婁如齊蒞盟、其年十一月季孫宿卒、是悼子先武子而卒、平子以孫繼祖也」。

一體、世族宗主の繼承は不安定で、この季武子のほか、孟莊子（襄二十三卒）^{*44}・叔孫穆子（昭四卒）^{*45}・叔孫成子（定五卒）^{*46}・季桓子（哀三卒）^{*47}の後継者決定における紛糾が伝えられている。こうした紛糾には當然ながら有力家臣が關與し、さらなる紛争に展開することが往々にして見られた。

[3] 孔子貧且賤 『論語』子罕

*44 『左傳』襄二十三「孟孫惡臧孫、季孫愛之。孟氏之御駟豐點好羯也、曰、「從余言、必爲孟孫。」再三云、羯從之。孟莊子疾、豐點謂公鉏、「苟立羯、請讎臧氏。」公鉏謂季孫曰、「孺子秩、固其所也。若羯立、則季氏信有力於臧氏矣。」弗應。己卯、孟孫卒。公鉏奉羯、立于戶側。季孫至、入哭而出、曰、「秩焉在。」公鉏曰、「羯在此矣。」季孫曰、「孺子長。」公鉏曰、「何長之有。唯其才也。且夫子之命也。」遂立羯、秩奔邾。

*45 『左傳』昭四「初、穆子去叔孫氏、及庚宗、遇婦人、使私爲食而宿焉。問其行、告之故、哭而送之。適齊、娶於國氏、生孟丙・仲壬。…田於丘薳、遂遇疾焉。豎牛欲亂其室而有之、強與孟盟、不可。叔孫爲孟鍾曰、「爾未際、饗大夫以落之。」既具、使豎牛請日。入、弗謁。出、命之日。及賓至、聞鐘聲。牛曰、「孟有北婦人之客。」怒、將往、牛止之。賓出、使拘而殺諸外。牛又強與仲盟、不可。仲與公御菜書觀於公、公與之環、使牛入示之。入、不示。出、命佩之。牛謂叔孫、「見仲而何。」叔孫曰、「何爲。」曰、「不見、既自見矣、公與之環而佩之矣。」遂逐之、奔齊。…十二月癸丑、叔孫不食。乙卯、卒。牛立昭子而相之。」昭五「仲至自齊、季孫欲立之。南遺曰、「叔孫氏厚、則季氏薄。彼實家亂、子勿與知、不亦可乎。」南遺使國人助豎牛以攻諸大庫之庭、司宮射之、中目而死。豎牛取東鄙三十邑以與南遺。昭子即位、朝其家眾、曰、「豎牛禍叔孫氏、使亂大從、殺適立庶。又披其邑、將以赦罪、罪莫大焉。必速殺之。」豎牛懼、奔齊。孟・仲之子殺諸塞關之外、投其首於寧風之棘上。

*46 『春秋經』定五「秋七月壬子、叔孫不敢卒」・『左傳』定十「初、叔孫成子欲立武叔、公若藐固諫、曰、「不可。」成子立之而卒。公南使賊射之、不能殺。公南爲馬正、使公若爲郈宰。武叔既定、使郈馬正侯犯殺公若、弗能。其圉人曰、「吾以劍過朝、公若必曰、誰之劍也。吾稱子以告、必觀之。吾僞固而授之末、則可殺也。」使如之。公若曰、「爾欲吳王我乎。」遂殺公若。侯犯以郈叛、武叔・懿子圍郈、弗克。秋、二子及齊師復圍郈、弗克。叔孫謂郈工師駟赤曰、「郈非唯叔孫氏之憂、社稷之患也。將若之何。」對曰、「臣之業、在揚水卒章之四言矣。」叔孫稽首。駟赤謂侯犯曰、「居齊・魯之際而無事、必不可矣。子盍求事於齊以臨民。不然、將叛。」侯犯從之。齊使至、駟赤與郈人爲之宣言於郈中曰、「侯犯將以郈易于齊、齊人將遷郈民。」眾兇懼。駟赤謂侯犯曰、「眾言異矣。子不如易於齊、與其死也、猶是郈也、而得紓焉、何必此。齊人欲以此偪魯、必倍與子地。且盍多舍甲於子之門以備不虞。」侯犯曰、「諾。」乃多舍甲焉。侯犯請易於齊、齊有司觀郈、將至、駟赤使周走呼曰、「齊師至矣。」郈人大駭、介侯犯之門甲、以圍侯犯、駟赤將射之、侯犯止之、曰、「謀免我。」侯犯請行、許之。駟赤先如宿、侯犯殿、每出一門、郈人閉之。及郭門、止之、曰、「子以叔孫氏之甲出、有司若誅之、群臣懼死。」駟赤曰、「叔孫氏之甲有物、吾未敢以出。」犯謂駟赤曰、「子止而與之數。」駟赤止、而納魯人。侯犯奔齊、齊人乃致郈。

*47 『左傳』哀三「秋、季孫有疾、命正常曰、「無死。南孺子之子、男也、則以告而立之。女也、則肥也可。」季孫卒、康子即位。既葬、康子在朝。南氏生男、正常載以如朝、告曰、「夫子有遺言、命其圉臣曰、「南氏生男、則以告於君與大夫而立之。」今生矣、男也、敢告。」遂奔衛。康子請退、公使共劉視之、則或殺之矣、乃討之。召正常、正常不反」。

大宰問於子貢曰、「夫子聖者與。何其多能也。」子貢曰、「固天縱之將聖、又多能也。」

子聞之、曰、「大宰知我乎。吾少也賤、故多能鄙事。君子多乎哉。不多也。」

を踏まえたものであろう。上文において『左傳』昭七「今其將在孔丘乎」を孔子世家が「今孔丘年少好禮、其達者歟」に作るのは「吾少也賤」の「少」を踏まえたものであろう。「貧且賤」は、『論語』

子曰、「篤信好學、守死善道。危邦不入、亂邦不居。天下有道則見、無道則隱。邦有道、貧且賤焉、恥也。邦無道、富且貴焉、恥也。」(泰伯)

に見え、

子曰、「富與貴是人之所欲也、不以其道得之、不處也。貧與賤是人之所惡也、不以其道得之、不去也。君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是。」(里仁)

には「貧與賤」が見える。

[4] 及長 『孟子』萬章下

孔子嘗爲委吏矣、曰、會計當而已矣。嘗爲乘田矣。曰、牛羊茁壯、長而已矣。に據る。『史記索隱』に「有本作委吏」とある。「季氏史」は「委吏」を誤寫したものであろう。

[5] 由是爲司空 [4] を受けてその後の孔子の經歷を概述したものである*48。後文と重複し、ここに置くのは不用意というべきである。また「斥乎齊」を去魯の後に置くことは、下文と矛盾する。

孔子の異相については、『荀子』非相に「仲尼長」「仲尼之狀、面如蒙俱」とある。

[6] 魯南宮敬叔言魯君曰 孔子が老聃に會見したことは、『禮記』曾子問に四見する*49。いずれも「吾聞諸老聃」を用いるが、「聞諸」は前3世紀の文獻には見えない。

*48 崔適『史記探源』卷六/孔子世家「蕃息下云由是爲司空、係下文由中都宰爲司空之重文。又云已而去魯、斥乎齊、逐乎宋、困於陳蔡之間、於是反魯。異之下云魯復善待由是反魯。皆定公十四年去魯後至反魯之總結、重衍於此也。今刪正」。

*49 『禮記』曾子問「曾子問曰、「古者師行、必以遷廟主行乎。」孔子曰、「天子巡守、以遷廟主行、載于齊車、言必有尊也。今也取七廟之主以行、則失之矣。當七廟、五廟無虛主。虛主者、唯天子崩、諸侯薨與去其國、與祫祭於祖、爲無主耳。吾聞諸老聃曰、天子崩、國君薨、則祝取群廟之主而藏諸祖廟、禮也。卒哭成事而后、主各反其廟。君去其國、大宰取群廟之主以從、禮也。祫祭於祖、則祝迎四廟之主。主、出廟入廟必蹕。老聃云」・「曾子問曰、「葬引至於壙、日有食之、

曾子問は前4世紀後半、『莊子』に先行する作品と見てよい。孔子が老聃に師事したとする傳承は、道家以前に儒家において成立したものとなる。

ついで周で老聃と會見したことは、『莊子』外篇/天道に見える*50。

孔子世家では、昭七～昭二十の間に會見したことになるが、上述の如く南宮敬叔は昭十二出生であり、昭二十でもようやく九歳なのでこの記述は成り立たない。一方、『莊子』外篇/天運「孔子行年五十有一而不聞道、乃南之沛見老聃」では孔子五十一歳、すなわち定九（前501）に繋げるが、ちょうど孔子が大夫に登用された時期に当たり、こちらも難しい。

孔子世家は多様な原資料から選擇した孔子に關する傳承を編綴したものだが、後述の如く、定十三～哀十一の孔子去魯に適周・適齊を収め得ず、そのため、まずは適周を昭七～昭二十の間に置いたのである。

「辭去、…送子以言」の部分は、

曾子將行、晏子送之曰、「君子贈人以軒、不若以言。吾請以言之、以軒乎。」曾子曰、「請以言。」晏子曰、…（『晏子春秋』内篇/雜上）

則有變乎。且不乎。」孔子曰、「昔者吾從老聃助葬於巷黨、及柩、日有食之、老聃曰、丘。止柩、就道右、止哭以聽變。既明反而后行。曰、禮也。反葬、而丘問之曰、夫柩不可以反者也、日有食之、不知其已之遲數、則豈如行哉。老聃曰、諸侯朝天子、見日而行、逮日而舍奠。大夫使、見日而行、逮日而舍。夫柩不早出、不暮宿。見星而行者、唯罪人與奔父母之喪者乎。日有食之、安知其不見星也。且君子行禮、不以人之親戚患。吾聞諸老聃云」・「曾子問曰、「下殤、土周葬于園、遂與機而往、途邇故也。今墓遠、則其葬也如之何。」孔子曰、「吾聞諸老聃曰、昔者史佚有子而死、下殤也。墓遠、召公謂之曰、何以不棺斂於宮中。史佚曰、吾敢乎哉。召公言於周公、周公曰、豈不可。史佚行之。下殤用棺衣棺、自史佚始也」・「子夏問曰、「三年之喪卒哭、金革之事無辟也者、禮與。初有司與。」孔子曰、「夏后氏三年之喪、既殯而致事、殷人既葬而致事。記曰、君子不奪人之親、亦不可奪親也。此之謂乎。」子夏曰、「金革之事無辟也者、非與。」孔子曰、「吾聞諸老聃曰、昔者魯公伯禽有爲爲之也。今以三年之喪、從其利者、吾弗知也。』」。

*50 『莊子』外篇/天道「孔子西藏書於周室。子路謀曰、「由聞周之徵藏史有老聃者、免而歸居、夫子欲藏書、則試往因焉。」孔子曰、「善。」往見老聃、而老聃不許、於是繙十二經以說。老聃中其說、曰、「大謾、願聞其要。」孔子曰、「要在仁義。」老聃曰、「請問、仁義、人之性邪。」孔子曰、「然。君子不仁則不成、不義則不生。仁義、眞人之性也、又將奚爲矣。」老聃曰、「請問、何謂仁義。」孔子曰、「中心物愷、兼愛無私、此仁義之情也。」老聃曰、「意、幾乎後言。夫兼愛、不亦迂乎。無私焉、乃私也。夫子若欲使天下無失其牧乎。則天地固有常矣、日月固有明矣、星辰固有列矣、禽獸固有群矣、樹木固有立矣。夫子亦放德而行、循道而趨、已至矣。又何偈偈乎揭仁義、若擊鼓而求亡子焉。意、夫子亂人之性也。』」。『史記』十二諸侯年表「故西觀周室、論史記舊聞、興於魯而次春秋」は、ここから派生した言説であろう。

曾子行、晏子從於郊、曰、「嬰聞之。君子贈人以言、庶人贈人以財。嬰貧無財、請假於君子、贈吾子以言、…（『荀子』大略）

に似る。

老子韓非列傳には、

老子者、楚苦縣厲鄉曲仁里人也、姓李氏、名耳、字聃、周守藏室之史也。孔子適周、將問禮於老子。老子曰、「子所言者、其人與骨皆已朽矣、獨其言在耳。且君子得其時則駕、不得其時則蓬累而行。吾聞之、良賈深藏若虛、君子盛德容貌若愚。去子之驕氣與多欲、態色與淫志、是皆無益於子之身。吾所以告子、若是而已。」

孔子去、謂弟子曰、「鳥、吾知其能飛。魚、吾知其能游。獸、吾知其能走。走者可以爲罔、游者可以爲綸、飛者可以爲矰。至於龍、吾不能知其乘風雲而上天。吾今日見老子、其猶龍邪。」

とあり、『莊子』

孔子見老聃歸、三日不談。弟子問曰、「夫子見老聃、亦得將何規哉。」孔子曰、「吾乃今於是乎見龍。龍、合而成體、散而成章、乘乎雲氣而養乎陰陽。予口張而不能嚼、予又何規老聃哉。」（外篇／天運）

老萊子之弟子出薪、遇仲尼、反以告、曰、「有人於彼、修上而趨下、末僂而後耳、視若營四海、不知其誰氏之子。」老萊子曰、「是丘也、召而來。」仲尼至。曰、「丘、去汝躬矜與汝容知、斯爲君子矣。」仲尼揖而退、蹙然改容而問曰、「業可得進乎。」老萊子曰、「夫不忍一世之傷而驚萬世之患、抑固窶邪、亡其略弗及邪。惠以歡爲驚、終身之醜、中民之行進焉耳、相引以名、相結以隱。與其譽堯而非桀、不如兩忘而閉其所譽。反無非傷也。動無非邪也。聖人躊躇以興事、以每成功。奈何哉其載焉終矜爾。」（雜篇／外物）

に似た部分をもつ。老子韓非列傳は『莊子』を寓言とするが*51、孔子世家は『莊子』を少なからず参照している。

なお、仲尼弟子列傳

*51 『史記』老子韓非列傳「莊子者、蒙人也、名周。周嘗爲蒙漆園吏、與梁惠王・齊宣王同時。其學無所不闕、然其要本歸於老子之言。故其著書十餘萬言、大抵率寓言也。作漁父・盜跖・胠篋、以詆訛孔子之徒、以明老子之術。畏累虛・亢桑子之屬、皆空語無事實。然善屬書離辭、指事類情、用剽剝儒・墨、雖當世宿學不能自解免也。其言洗洋自恣以適己、故自王公大人不能器之」。

孔子之所嚴事。於周則老子。於衛、蘧伯玉。於齊、晏平仲。於楚、老萊子。於鄭、子產。於魯、孟公綽。數稱臧文仲・柳下惠・銅鞮伯華・介山子然、孔子皆後之、不竝世。

は、老子以下、孔子が私淑した人物を聯ねる。老子については上文に見たとおりであり、蘧伯玉・晏平仲・老萊子・柳下惠・銅鞮伯華・介山子然は、『大戴禮』衛將軍文子

其爲人之淵泉也、多聞而難誕也、不內辭足以沒世。國家有道、其言足以生。國家無道、其默足以容、蓋桐提伯華之行也。外寬而內直、自設於隱括之中、直己而不直於人、以善存、亡汲汲、蓋蘧伯玉之行也。孝子慈幼、允德稟義、約貨去怨、蓋柳下惠之行也。其言曰、君雖不量於臣、臣不可以不量於君、是故君擇臣而使之、臣擇君而事之、有道順君、無道橫命。晏平仲之行也。德恭而行信、終日言不在尤之內、在尤之外、貧而樂也、蓋老萊子之行也。易行以俟天命、君下位而不援其上。觀於四方也、不忘其親。苟思其親、不盡其樂。以不能學爲己終身之憂、蓋介山子推之行也。

に據る。子産については後述する。孟公綽は、『論語』憲問

子路問成人。子曰、「若臧武仲之知、公綽之不欲、卞莊子之勇、冉求之藝、文之以禮樂、亦可以爲成人矣。」

に見える。臧文仲については、『論語』

子曰、「臧文仲居蔡、山節藻梲、何如其知也。」（公冶長）

子曰、「臧文仲其竊位者與。知柳下惠之賢、而不與立也。」（衛靈公）

や『左傳』文二

仲尼曰、「臧文仲、其不仁者三、不知者三。下展禽、廢六關、妾織蒲、三不仁也。作虛器、縱逆祀、祀爰居、三不知也。」

など、孔子の批判的な言辭しか残っていない*52。上掲『論語』憲問に孟公綽と竝ぶ臧武仲の誤りである可能性がある。

[7] 孔子自周反于魯 孔子世家は、孔子が三十歳になる以前に致仕し、專業の教師として弟子をとっていたと考えているようである。

*52 梁玉繩『史記志疑』卷二十八/仲尼弟子列傳第七「案、孔子屢貶文仲、何嘗稱之、不當與柳下惠竝舉」。

[8] 是時也 昭七（前 535）～昭二十（前 522）の間に置かれ、當時の晉・楚・齊と魯との關係を記述したものが、『左傳』、さらには『史記』のほかの部分とも齟齬する。ここで全中國的な政治史的狀況を確認しておこう。

僖二十八（前 632）、晉文公は周王朝により覇者に認證された。ここに晉が覇者として周王朝を推戴し、中原諸侯を同盟下に収める覇者體制が成立した。魯は文十四（前 613）の新城の盟を最後に晉霸を一旦離脱するが、宣十七（前 592）の斷道の盟で晉霸に復歸し、以後晉霸への歸屬を繼續する。晉は秦・楚・齊の中原侵攻から同盟國を防衛したが、鄭の歸趨をめぐる晉・楚の南北對立が、政治史的推移の基軸をなした。襄十一（前 562）に鄭は最終的に晉に降った。晉と結んだ吳の侵攻に苦しんだ楚は、襄二十七（前 546）、晉と講和した。

晉は對楚防衛の代償として、同盟國から軍役・貢納を徵發したが、晉楚講和の結果、同盟の必然性が減殺した。さらに、講和の條件として、晉楚兩國への朝聘を強いられた同盟國においては、晉霸への不満が高まった。

楚では、昭元（前 541）に篡立した靈王が、昭四（前 538）、申に諸侯を會して對吳遠征を敢行し、昭七（前 535）年には陳を、昭十一（前 531）には蔡を滅ぼし、さらに中原進出による全中國的な霸權の構築を圖ったが、昭十三（前 529）、公子比らの反亂によって自決に追い込まれた。

晉では、晉楚講和ののち、『左傳』昭三（前 539）に

叔向曰、「然。雖吾公室、今亦季世也。戎馬不駕、卿無軍行、公乘無人、卒列無長。…」

と見えるように、従前の軍制が急速に解體する。以後の晉の軍事行動は同盟國の保全より、六卿の私的な勢力圏の擴大が優先される。晉霸の機能不全は、昭十一（前 531）の楚靈王の蔡併合を抑止しえなかったことで露呈する。昭十三（前 529）の靈王弑殺ののち、晉は平丘の會を招集して霸權の再確認を圖るが、『左傳』昭十三（前 529）は

子産曰、「晉政多門、貳偷之不暇、何暇討。國不競亦陵、何國之爲。」

と、六卿の利害對立によって晉がすでに統一的施策をなしえなくなっていたことを子産に語らせる。ついで昭十六（前 526）には、

子服昭伯語季平子曰、「晉之公室其將遂卑矣。君幼弱、六卿彊而奢傲、將因是以習、

習實爲常、能無卑乎。」

と、六卿專權が語られている。

孔子世家の記述は、ここに確認した状況と齟齬している。この時期、晉・楚の魯への侵攻は認められず、齊の魯への侵攻も襄二十五年（前 548）「齊崔杼師伐我北鄙」以來發生していない。

十二諸侯年表

是後或力政、彊乘弱、興師不請天子。然挾王室之義、以討伐爲會盟主、政由五伯、諸侯恣行、淫侈不軌、賊臣篡子滋起矣。齊・晉・秦・楚其在成周微甚、封或百里或五十里。晉阻三河、齊負東海、楚介江淮、秦因雍州之固、四海迭興、更爲伯主、文武所褒大封、皆威而服焉。是以孔子明王道、干七十餘君、莫能用、故西觀周室、論史記舊聞、興於魯而次春秋、上記隱、下至哀之獲麟、約其辭文、去其煩重、以制義法、王道備、人事浹。

は、『史記』の春秋期に對する歴史認識を端的に示す。齊・晉・秦・楚などの「五伯」がその他の諸侯國を軍事力で壓迫するものであり、それが孔子出現の歴史的前提となる。孔子世家の記述は、實際の歴史的推移を顧慮することなく、「是時」に屬する材料を用いて、この歴史認識をなぞった不出來な作文であるに過ぎない。

晉の六卿の專權を、晉世家^{*53}・鄭世家^{*54}・魏世家^{*55}・十二諸侯年表^{*56}は、昭十六（前 526）年の晉昭公卒のあとに置いている。これは上掲『左傳』昭十六の記述に呼應する。孔子世家が昭公ではなく、平公を選んでいるのは、何らの事跡が傳えられない昭公に對し、平公には有名な不行跡があり、具體名を擧げるに足るものと判斷されたからであろう。すなわち、「平公淫」は、『左傳』昭元

僑又聞之、内官不及同姓、其生不殖、美先盡矣、則相生疾、君子是以惡之。故志曰、買妾不知其姓、則卜之。違此二者、古之所慎也。男女辨姓、禮之大司也。今君内實有四姬焉、其無乃是也乎。若由是二者、弗可爲也已。四姬有省猶可、無則必生疾矣。に由來し、鄭世家が「若君疾、飲食哀樂女色所生也」と、これを引用することから『史

*53 『史記』晉世家「昭公六年卒。六卿彊、公室卑。子頃公去疾立」。

*54 『史記』鄭世家「四年、晉昭公卒、其六卿彊、公室卑」。

*55 『史記』魏世家「獻子事晉昭公。昭公卒而六卿彊、公室卑」。

*56 『史記』十二諸侯年表 / 晉表「六 公卒。六卿彊、公室卑矣」。

記』の關心の強さも確認される。

楚靈王も、陳・蔡併合といった突出した事件が、「陵轢中國」にふさわしいものとして選ばれたものであろう。

■昭十七（前 525）・二十七歳

『左傳』昭十七（前 525）には、孔子が郷子に學んだことが見えるが^{*57}、孔子世家を含めて『史記』はこれを引かない。五帝本紀の五帝と齟齬するからであろう。

●昭二十（前 522）三十歳

魯昭公之二十年、而孔子蓋年三十矣 [1]。齊景公與晏嬰來適魯、景公問孔子曰、「昔秦穆公國小處僻、其霸何也。」對曰、「秦、國雖小、其志大。處雖僻、行中正。身舉五殺、爵之大夫、起纍繼之中、與語三日、授之以政。以此取之、雖王可也、其霸小矣。」景公說 [2]。

[1] 魯昭公之二十年 『左傳』昭二十には、衛の齊豹の亂に關聯して、琴張が孔子の弟子として登場する^{*58}。『史記』がこれを引かないのは、『史記』の據った「弟子籍」に琴張が見えなかったためであろう。

[2] 齊景公與晏嬰來適魯 齊世家「(景公)二十六年(前 522)、獵魯郊、因入魯、與晏嬰俱問魯禮」・齊表「二十六 獵魯界、因入魯」・魯世家「(昭公)二十年(前 522)、齊景公與晏子狩竟、因入魯問禮」・魯表「二十 齊景公與晏子狩、入魯問禮」も同じ事件を記す。これらには孔子が明示的には登場しない。あるいは『春秋經』に倣って大夫以下の身分は記さないということかも知れない。

この記述は、『左傳』昭二十

十二月、齊侯田于沛、招虞人以弓、不進。公使執之、辭曰、「昔我先君之田也、旃

*57 『左傳』昭十七「秋、郷子來朝、公與之宴。昭子問焉、曰、「少皞氏鳥名官、何故也。」郷子曰、「吾祖也、我知之。昔者黃帝氏以雲紀、故爲雲師而雲名。炎帝氏以火紀、故爲火師而火名。共工氏以水紀、故爲水師而水名。大皞氏以龍紀、故爲龍師而龍名。我高祖少皞摯之立也、鳳鳥適至、故紀於鳥、爲鳥師而鳥名。鳳鳥氏、歷正也。玄鳥氏、司分者也。伯趙氏、司至者也。青鳥氏、司啟者也。丹鳥氏、司閉者也。祝鳩氏、司徒也。鵙鳩氏、司馬也。鳩鳩氏、司空也。爽鳩氏、司寇也。鶡鳩氏、司事也。五鳩、鳩民者也。五雉爲五工正、利器用、正度量、夷民者也。九扈爲九農正、扈民無淫者也。自顓頊以來、不能紀遠、乃紀於近。爲民師而命以民事、則不能故也。」仲尼聞之、見於郷子而學之。既而告人曰、「吾聞之、天子失官、學在四夷、猶信」。

*58 『左傳』昭二十「琴張聞宗魯死、將往弔之。仲尼曰、「齊豹之盜、而孟縶之賊、女何弔焉。君子不食姦、不受亂、不爲利疚於回、不以回待人、不蓋不義、不犯非禮。」。

以招大夫、弓以招士、皮冠以招虞人。臣不見皮冠、故不敢進。」乃舍之。仲尼曰、「守道不如守官。」君子韙之。

の年次および「田」という場面設定、仲尼の評言を換骨奪胎して創作されたものである*59。

五穀大夫百里奚は、『左傳』僖十三に「百里」が見え*60、『史記』秦本紀はこれを引用しつつ「百里」を「百里奚」に作る*61。また『左傳』僖五に「井伯」が見えるが*62、『史記』晉世家はこれを引用しつつ「井伯」を「井伯百里奚」に作る*63。五穀大夫説話は、『孟子』萬章上に初見するが*64、「五穀」の稱謂は、『韓詩外傳』卷六によようやく初見する*65。『史記』では、

五年、晉獻公滅虞・虢、虜虞君與其大夫百里奚、以璧馬賂於虞故也。既虜百里奚、以爲秦繆公夫人媵於秦。百里奚亡秦走宛、楚鄙人執之。繆公聞百里奚賢、欲重贖之、恐楚人不與、乃使人謂楚曰、「吾媵臣百里奚在焉、請以五穀羊皮贖之。」楚人遂許與之。當是時、百里奚年已七十餘。繆公釋其囚、與語國事。謝曰、「臣亡國之臣、

*59 『孟子』萬章下「齊景公田、招虞人以旂、不至、將殺之。志士不忘在溝壑、勇士不忘喪其元。孔子奚取焉。取非其招不往也。」曰、「敢問招虞人何以。」曰、「以皮冠。庶人以旂、士以旂、大夫以旂。以大夫之招招虞人、虞人死不敢往。以士之招招庶人、庶人豈敢往哉。況乎以不賢人之招招賢人乎。欲見賢人而不以其道、猶欲其入而閉之門也。夫義、路也。禮、門也。惟君子能由是路、出入是門也。詩云、周道如砥、其直如矢。君子所履、小人所視」も同じ事件に基づく。

*60 『左傳』僖十三「冬、晉薦饑、使乞糴于秦。秦伯謂子桑、「與諸乎。」對曰、「重施而報、君將何求。重施而不報、其民必攜、攜而討焉、無眾、必敗。」謂百里、「與諸乎。」對曰、「天災流行、國家代有、救災恤鄰、道也。行道、有福。』」。

*61 『史記』秦本紀「(繆公十二年・前648)晉旱、來請粟。丕豹說繆公勿與、因其饑而伐之。繆公問公孫支、支曰、「饑穰更事耳、不可不與。」問百里奚、奚曰、「夷吾得罪於君、其百姓何罪。」於是用百里奚・公孫支言、卒與之粟。以船漕車轉、自雍相望至絳」。

*62 『左傳』僖五「師還、館于虞、遂襲虞、滅之。執虞公及其大夫井伯、以媵秦穆姬、而脩虞祀、且歸其職貢於王」。

*63 『史記』晉世家「還、襲滅虞、虜虞公及其大夫井伯百里奚以媵秦穆姬、而修虞祀。荀息牽襄所遺虞屈產之乘馬奉之獻公、獻公笑曰、「馬則吾馬、齒亦老矣。』」。

*64 『孟子』萬章上「萬章問曰、「或曰、百里奚自鬻於秦養牲者、五羊之皮、食牛、以要秦穆公。信乎。」孟子曰、「否、不然。好事者爲之也。百里奚、虞人也。晉人以垂棘之璧與屈產之乘、假道於虞以伐虢。宮之奇諫、百里奚不諫。知虞公之不可諫而去、之秦、年已七十矣、曾不知以食牛干秦穆公之爲汙也、可謂智乎。不可諫而不諫、可謂不智乎。知虞公之將亡而先去之、不可謂不智也。時舉於秦、知穆公之可與有行也而相之、可謂不智乎。相秦而顯其君於天下、可傳於後世、不賢而能之乎。自鬻以成其君、鄉黨自好者不爲、而謂賢者爲之乎。』」。

*65 『韓詩外傳』卷六「昔者、秦繆公困於穀、疾據五穀大夫・蹇叔・公孫友而小霸」。

何足問。」繆公曰、「虞君不用子、故亡、非子罪也。」固問、語三日、繆公大說、授之國政、號曰五殺大夫。(秦本紀)

趙良曰、「夫五殺大夫、荊之鄙人也。聞秦繆公之賢而願望見、行而無資、自粥於秦客、被褐食牛。期年、繆公知之、舉之牛口之下、而加之百姓之上、秦國莫敢望焉。相秦六七年、而東伐鄭、三置晉國之君、一救荊國之禍。發教封內、而巴人致貢。施德諸侯、而八戎來服。由余聞之、款關請見。五殺大夫之相秦也、勞不坐乘、暑不張蓋、行於國中、不從車乘、不操干戈、功名藏於府庫、德行施於後世。五殺大夫死、秦國男女流涕、童子不歌謠、舂者不相杵。此五殺大夫之德也。」(商君列傳)

に見え、とくに秦本紀の「語三日」「授之國政」は孔子世家とほぼ同じ表現である。孔子世家のこの一節の原資料は、漢代以降に成立し、秦本紀編纂の際にも参照されたものであろう。

ちなみに孔子が百里奚に言及することは、『韓詩外傳』卷七

孔子困於陳蔡之間、即三經之席、七日不食、藜羹不糝、弟子有飢色、讀詩書習禮樂不休。子路進諫曰、「爲善者、天報之以福。爲不善者、天報之以禍。今夫子積德累仁、爲善久矣。意者當遣行乎。奚居之隱也。」孔子曰、「由來。汝小人也、未講於論也。居、吾語汝。子以知者爲無罪乎、則王子比干何爲刳心而死。子以義者爲聽乎、則伍子胥何爲抉目而懸吳東門。子以廉者爲用乎。則伯夷叔齊何爲餓於首陽之山。子以忠者爲用乎、則鮑叔何爲而不用、葉公子高終身不仕、鮑焦抱木而泣、子推登山而燔。故君博學深謀、不遇時者眾矣。豈獨丘哉。賢不肖者材也。遇不遇者時也。今無有時、賢安所用哉。故虞舜耕於歷山之陽、立爲天子、其遇堯也。傅說負土而版築、以爲大夫、其遇武丁也。伊尹故有莘氏僮也、負鼎操俎調五味、而立爲相、其遇湯也。呂望行年五十、賣食棘津、年七十屠於朝歌、九十乃爲天子師、則遇文王也。管夷吾束縛自檻車、以爲仲父、則遇齊桓公也。百里奚自賣五羊之皮、爲秦伯牧牛、舉爲大夫、則遇秦繆公也。虞丘名聞於天下、以爲令尹、讓於孫叔敖、則遇楚莊王也。伍子胥前功多、後戮死、非知有盛衰也、前遇闔閭、後遇夫差也。夫驥罷鹽車、此非無形容也、莫知之也。使驥不得伯樂、安得千里之足。造父亦無千里之手矣。夫蘭菝生於茂林之中、深山之間、不爲人莫見之故不芬。夫學者非爲通也。爲窮而不困、憂而志不衰、先知禍福之終始、而心無惑焉。故聖人隱居深念、

獨聞獨見。夫舜亦賢聖矣、南面而治天下、惟其遇堯也。使舜居桀紂之世、能自免於刑戮之中、則爲善矣、亦何位之有。桀殺關龍逢、紂殺王子比干、當此之時、豈關龍逢無知、而王子比干不慧哉。此皆不遇時也。故君子務學、脩身端行而須其時者也、子無惑焉。」詩曰、「鶴鳴于九皋、聲聞于天。」

にも見える*66。百里奚とともに管夷吾・孫叔敖・伍子胥が見え、齊桓公・秦繆公・楚莊王・吳王闔閭といった覇者が肯定的に扱われている。覇者を肯定する孔子は、『荀子』宥坐

孔子曰、「由。居。吾語女。昔晉公子重耳霸心生於曹、越王句踐霸心生於會稽、齊桓公小白霸心生於莒。故居不隱者思不遠、身不佚者志不廣。女庸安知吾不得之桑落之下。…」

にすでに見えるが*67、『史記』には、孔子世家下文「齊人聞而懼、曰、孔子為政必霸、霸則吾地近焉、我之爲先并矣。盍致地焉」あるいは齊世家「景公害孔丘相魯、懼其霸、故從犁鉏之計」などが、孔子と「霸」を肯定的に關聯附けている。

●昭二十五（前 517）三十五歲

孔子年三十五、而季平子與邠昭伯以鬪雞故得罪魯昭公、昭公率師擊平子、平子與孟氏・叔孫氏三家共攻昭公、昭公師敗、奔於齊、齊處昭公乾侯 [1]。其後頃之、魯亂。孔子適齊 [2]、爲高昭子家臣、欲以通乎景公 [3]。與齊太師語樂 [4]、聞韶音、學之、三月不知肉味、齊人稱之 [5]。景公問政孔子、孔子曰、「君君、臣臣、父父、子子。」景公曰、「善哉。信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾豈得而食諸 [6]。」他日又復問政於孔子、孔子曰、「政在節財 [7]。」景公說、將欲以尼谿田封孔子。晏嬰進曰、「夫儒者滑稽而不可軌法。倨傲自順、不可以爲下。崇喪遂哀、破產厚葬、不可以爲俗。游說乞貸、不可以爲國。自大賢之息、周室既衰、禮樂缺有間。今孔子盛容飾、繁登降之禮、趨詳之節、累世不能殫其學、當年不能究其禮。君欲用之以移齊俗、非所以先細民也。」後景公敬見孔子、不問其禮 [8]。異日、景公止孔子曰、「奉子以季氏、吾不能。以季孟之間待之。」齊大夫欲害孔子、孔子聞之。景公曰、「吾老矣、弗能用也。」孔子遂行、反乎魯 [9]。

*66 本條は、後掲『荀子』宥坐到重なる部分がある。原資料を共有するものと思われる。吉本「窮達以時考」（『中國古代史論叢』2、2005）参照。

*67 渡邊卓『古代中國思想の研究』（創文社、1973）。

[1] 而季平子與郈昭伯以鬪雞故得罪魯昭公 『左傳』昭二十五（前 517）～二十六（前 516）に據る。魯世家に比べると簡略な記述になっている。

『左傳』昭二十五	魯世家
<p>初、季公鳥娶妻於齊鮑文子、生甲（注「公鳥、季公亥之兄、平子庶叔父。」）。公鳥死、季公亥與公思展與公鳥之臣申夜姑相其室（注「公亥即公若也。展、季氏族。」）。及季姒與饗人檀通（注「季姒、公鳥妻、鮑文子女。饗人、食官。」）、而懼、乃使其妾扶己、以示秦遄之妻（注「秦遄、魯大夫。妻、公鳥妹秦姬也。」）、曰、「公若欲使余、余不可而扶余。」又訴於公甫（注「公甫、平子弟。」）、曰、「展與夜姑將要余。」秦姬以告公之（注「公之、亦平子弟。」）、公之與公甫告平子。平子拘展於卞、而執夜姑、將殺之。公若泣而哀之、曰、「殺是、是殺余也。」將爲之請、平子使豎勿內、日中不得請。有司逆命、公之使速殺之。故公若怨平子。</p> <p>季・郈之雞鬪。季氏介其雞、郈氏爲之金距。平子怒、益宮於郈氏、且讓之。故郈昭伯亦怨平子。</p> <p>臧昭伯之從弟會爲讒於臧氏、而逃於季氏。臧氏執旃。平子怒、拘臧氏老。</p> <p>將禘於襄公、萬者二人、其眾萬於季氏*68。臧孫曰、「此之謂不能庸先君之廟。」大夫遂怨平子。公若獻弓於公爲（注「公爲、昭公子務人。」）、且與之出射於外、而謀去季氏。公爲告公果・公賁（注「果・賁皆公爲弟。」）。公果・公賁使侍人僚祖告公。公寢、將以戈擊之、乃走。公曰、「執之。」亦無命也。懼而不出、數月不見、公不怒。又使言、公執戈懼之、乃走。又使言、公曰、「非小人之所及也。」公果自言、</p>	<p>季氏與郈氏鬪雞、季氏芥雞羽、郈氏金距。季平子怒而侵郈氏、郈昭伯亦怒平子。</p> <p>臧昭伯之弟會僞讒臧氏、匿季氏、臧昭伯囚季氏人。季平子怒、囚臧氏老。</p>

*68 『論語』八佾「孔子謂季氏、「八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也。」。なお、呉仁傑『兩漢刊誤補遺』卷六/八佾は「萬者二人」につき「人當作八、傳文誤也」とする。

<p>公以告臧孫、臧孫以難。告郈孫、郈孫以可、勸。告子家懿伯、懿伯曰、「讒人以君徼幸、事若不克、君受其名、不可爲也。舍民數世、以求克事、不可必也。且政在焉、其難圖也。」公退之。辭曰、「臣與聞命矣、言若洩、臣不獲死。」乃館於公宮。</p>	<p>臧·郈氏以難告昭公。</p>
<p>叔孫昭子如闕、公居於長府。</p>	
<p>九月戊戌、伐季氏、殺公之于門、遂入之。平子登臺而請曰、「君不察臣之罪、使有司討臣以干戈、臣請待於沂上以察罪。」弗許。請囚于費、弗許。請以五乘亡、弗許。子家子曰、「君其許之。政自之出久矣、隱民多取食焉、爲之徒者眾矣。日入慝作、弗可知也。眾怒不可蓄也、蓄而弗治、將蕪。蕪畜、民將生心。生心、同求將合。君必悔之。」弗聽。郈孫曰、「必殺之。」</p>	<p>昭公九月戊戌伐季氏、遂入。 平子登臺請曰、「君以讒不察臣罪、誅之、請遷沂上。」弗許。請囚於鄆、弗許。請以五乘亡、弗許。子家駒曰、「君其許之。政自季氏久矣、爲徒者眾、眾將合謀。」弗聽。郈氏曰、「必殺之。」</p>
<p>公使郈孫逆孟懿子。叔孫氏之司馬驪戾言於其眾曰、「若之何。」莫對。又曰、「我、家臣也、不敢知國。凡有季氏與無、於我孰利。」皆曰、「無季氏、是無叔孫氏也。」驪戾曰、「然則救諸。」帥徒以往、陷西北隅以入。公徒釋甲執冰而踞、遂逐之。孟氏使登西北隅、以望季氏。見叔孫氏之旌、以告。孟氏執郈昭伯、殺之于南門之西、遂伐公徒。</p>	<p>叔孫氏之臣戾謂其眾曰、「無季氏與有、孰利。」皆曰、「無季氏是無叔孫氏。」戾曰、「然、救季氏。」遂敗公師。孟懿子聞叔孫氏勝、亦殺郈昭伯。郈昭伯爲公使、故孟氏得之。三家共伐公、</p>
<p>子家子曰、「諸臣僞劫君者、而負罪以出、君止。意如之事君也、不敢不改。」公曰、「余不忍也。」與臧孫如墓謀、遂行。</p>	<p>公遂奔。</p>
<p>己亥、公孫于齊、次于陽州。齊侯將唁公于平陰、公先至于野井。齊侯曰、「寡人之罪也。使有司待于平陰、爲近故也。」書曰、「公孫于齊、次于陽州、齊侯唁公于野井」、禮也。將求於人、則先下之、禮之善物也。齊侯曰、「自莒疆以西、請致千社、以待君命。寡人將帥敝賦以從執事、唯命是聽。君之憂、寡人之憂也。」公喜。子家子曰、「天祿不再。天若胙君、不過周公、以魯足矣。失魯而以千社爲臣、誰與之立。且齊君無信、不如早之晉。」弗從。</p>	<p>己亥、公至于齊。齊景公曰、「請致千社待君。」子家曰、「棄周公之齊、可乎。」乃止。子家曰、「齊景公無信、不如早之晉。」弗從。</p>

さらに「齊處昭公乾侯」相當部分を魯世家は

二十六年春、齊伐魯、取鄆而居昭公焉。…二十八年、昭公如晉、求入。季平子私於晉六卿、六卿受季氏賂、諫晉君、晉君乃止、居昭公乾侯。

に作る。「二十八年」の記述は、『左傳』昭二十八

二十八年春、公如晉、將如乾侯。子家子曰、「有求於人、而即其安、人孰矜之。其造於竟。」弗聽。使請逆於晉。晉人曰、「天禍魯國、君淹恤在外、君亦不使一个辱在寡人、而即安於甥舅、其亦使逆君。」使公復于竟、而後逆之。

に據る。孔子世家「齊處昭公乾侯」の「齊」は「晉」の誤りである。魯世家を参照せず、『左傳』を直接引用し、その際に誤ったものとなろう。

晉楚講和を契機に晉の軍事的規制が弛緩した結果、中原の王朝や諸侯國では世族支配體制のもとで蓄積された矛盾が噴出した。(1) 世族宗主と一般成員、(2) 世族と支配層のそれ以外の部分である大夫および公子・公孫、(3) 世族間、の矛盾である。魯では季平子に反感をもつ季氏分族および大夫層が昭公のもとに結集し、軍事行動による季氏の排除を圖ったが、叔孫氏・孟氏の懐柔に失敗し、かれらが季氏の側に加擔した結果、昭公は敗北し、大夫層の一定部分とともに亡命した。昭三十二（前510）に昭公が亡命先で卒し、翌年定公が即位するまで、實に八年間にわたって國君不在の状態が繼續した。他の諸侯國には見られない事態である。とりわけ大夫層の亡命は、統治機構の大幅な再編をもたらしたものと推測される。陽虎の專權、ついで孔子およびその弟子の登用も、このような魯に特有の状況を前提としたものであった。

[2] 其後頃之 昭二十六（前516）～昭三十二（前510）の間に孔子が齊にあったことを傍證する材料はない。孔子の齊滞在がここに繋けられたのは、後述の如く定十三～哀十一の去魯に適齊を収め得なかったためであり、亡命した昭公が齊の支援を求めたことに附會したものである。

ちなみにこの時期の孔子の事跡として、まずは上述の如く、『左傳』昭七に見える孟懿子・南宮敬叔の孔子への師事が昭二十四～昭三十二の間に想定される。

また『禮記』檀弓下

延陵季子適齊、於其反也、其長子死、葬於贏博之間。孔子曰、「延陵季子、吳之習於禮者也。」往而觀其葬焉。其坎深不至於泉、其斂以時服、既葬而封、廣輪揜坎、

其高可隱也。既封、左袒、右還其封且號者三。曰、「骨肉歸復于土、命也。若魂氣則無不之也、無不之也。」而遂行。孔子曰、「延陵季子之於禮也、其合矣乎。」

の季札の適齊が『左傳』昭二十七

吳子欲因楚喪而伐之、使公子掩餘・公子燭庸帥師圍潛、使延州來季子聘于上國、遂聘于晉、以觀諸侯。

の「聘于上國」の一環であったとすれば、昭二十七に孔子は魯に在ったことになる。

[3] 爲高昭子家臣 高昭子は高張。『春秋經』昭二十九（前 513）に初見し*69、哀六（前 489）に齊景公死後の公位繼承紛争で魯に來奔している*70。昭子の諡號は『左傳』哀五「公疾、使國惠子・高昭子立荼、寘群公子於萊」に見え、『史記』齊世家「秋、景公病、命國惠子・高昭子立少子荼爲太子、逐群公子、遷之萊」はこれを引用する。國氏と並び卿位を世襲した齊の世族の宗主である。世族が自分の家臣を公臣に推薦することは、『論語』憲問

公叔文子之臣大夫僕、與文子同升諸公。子聞之曰、「可以爲文矣。」

に見える。公叔文子は『左傳』襄二十九（前 544）に初見*71、定十三（前 497）卒*72。衛の公叔氏は經文には見えないが、卿もしくは大夫上層に屬する世族である。孔子が齊景公への推薦を求めて高張の家臣となったとすることには、護教論的な疑義があり、さらに昭二十に齊景公が孔子に禮を問うたとする上文の記述とも矛盾する*73。いずれにせよ史實性は乏しいといわざるを得ないが、『論語』が公叔文子を賞賛しているように、世族の臣となること自體は非難さるべきものではなかった。さらに、『孟子』萬章上

彌子之妻與子路之妻、兄弟也。彌子謂子路曰、「孔子主我、衛卿可得也。」子路以告。

孔子曰、「有命。」孔子進以禮、退以義、得之不得曰有命。…是時孔子當阨、主司

*69 『春秋經』昭二十九「二十有九年春、公至自乾侯、居于鄆。齊侯使高張來唁公」。

*70 『春秋經』哀六「夏、齊國夏及高張來奔」。

*71 『左傳』襄二十九「適衛、說蘧瑗・史狗・史鱗・公子荊・公叔發・公子朝、曰、「衛多君子、未有患也。」」。

*72 定十三「初、衛公叔文子朝、而請享靈公。退、見史鱗而告之。史鱗曰、「子必禍矣。子富而君貧、其及子乎。」文子曰、「然。吾不先告子、是吾罪也。君既許我矣、其若之何。」史鱗曰、「無害。子臣、可以免。富而能臣、必免於難。上下同之。戍也驕、其亡乎。富而不驕者鮮、吾唯子之見。驕而不亡者、未之有也。戍必與焉。」及文子卒、衛侯始惡於公叔戍、以其富也。公叔戍又將去夫人之黨、夫人愬之曰、「戍將爲亂。」」。

*73 錢穆『先秦諸子繫年』5 孔子適齊考。

城貞子、爲陳侯周臣。

の如く、有力者を「主」とし、その推薦で公臣となる事例もある。孔子は、衛では彌子を「主」として衛に仕えることを拒否したが、陳では司城貞子を「主」として陳に仕えているのである。類似の事例として、『左傳』には、同盟國の世族が晉の世族を「主」とし、晉侯への工作を求めることが散見する*74。春秋期における私的な人的結合關係の一般的機能に留意せねばならない。

[4] 與齊太師語樂 『論語』八佾「子語魯大師樂。曰、「樂其可知也。始作、翕如也。從之、純如也、皦如也、繹如也、以成。』」。

[5] 聞韶音 『論語』述而「子在齊聞韶、三月不知肉味。曰、「不圖爲樂之至於斯也。』」。

[6] 景公問政孔子 『論語』顏淵「齊景公問政於孔子。孔子對曰、「君君、臣臣、父父、子子。」公曰、「善哉。信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾得而食諸。』」。

[7] 他日又復問政於孔子 『韓非子』難三「葉公子高問政於仲尼、仲尼曰、「政在悅近而來遠。」哀公問政於仲尼、仲尼曰、「政在選賢。」齊景公問政於仲尼、仲尼曰、「政在節財。』」。

[8] 景公說 『晏子春秋』外篇第八に據る。

『墨子』非儒下	『晏子春秋』外篇第八	孔子世家
<p>孔某之齊見景公、景公說、欲封之以尼谿、以告晏子。</p> <p>晏子曰、「不可。夫儒浩居而自順者也、不可以教下。好樂而淫人、不可使親治。立命而怠事、不可使守職。宗喪循哀、不可使慈民。機服勉容、不可使導眾。</p>	<p>仲尼之齊、見景公、景公說之、欲封之以爾稽、以告晏子。</p> <p>晏子對曰、「不可。彼浩裾自順、不可以教下。好樂緩于民、不可使親治。立命而建事、不可守職。厚葬破民貧國、久喪道哀費日、不可使子民。行之難者在內、而傳者無其外、故異于服、勉于容、不可以道眾而馴百姓。</p>	<p>景公說、將欲以尼谿田封孔子。</p> <p>晏嬰進曰、「夫儒者滑稽而不可軌法。倨傲自順、不可以爲下。崇喪遂哀、破產厚葬、不可以爲俗。游說乞貸、不可以爲國。</p>

*74 『左傳』成二「孫桓子還於新築、不入、遂如晉乞師。臧宣叔亦如晉乞師。皆主卻獻子。晉侯許之七百乘」・成十六「卻擘將新軍、且爲公族大夫、以主東諸侯。取貨于宣伯、而訴公于晉侯。晉侯不見公」・昭三「豐氏故主韓氏、伯石之獲州也、韓宣子爲之請之、爲其復取之之故」・定六「昔吾主范氏、今子主趙氏」・哀十七「晉趙鞅使告于衛、曰、「君之在晉也、志父爲主。』」。

<p>孔某盛容脩飾以蠱世、弦歌鼓舞以聚徒、繁登降之禮以示儀、務趨翔之節以觀眾、博學不可使議世、勞思不可以補民、兼壽不能盡其學、當年不能行其禮、積財不能贍其樂、繁飾邪術以營世君、盛爲聲樂以淫遇民、其道不可以期世、其學不可以導眾。</p> <p>今君封之、以利齊俗、非所以導國先眾。」</p> <p>公曰、「善。」</p> <p>於是厚其禮、留其封、敬見而不問其道。</p> <p>孔某乃恚、怒於景公與晏子、乃樹鴟夷子皮於田常之門、告南郭惠子以所欲爲、歸於魯。</p>	<p>自大賢之滅、周室之卑也、威儀加多、而民行滋薄。聲樂繁充、而世德滋衰。</p> <p>今孔丘盛聲樂以侈世、飾弦歌鼓舞以聚徒、繁登降之禮、趨翔之節以觀眾、博學不可以儀世、勞思不可以補民、兼壽不能殫其教、當年不能究其禮、積財不能贍其樂、繁飾邪術以營世君、盛爲聲樂以淫愚其民。其道也、不可以示世。其教也、不可以導民。</p> <p>今欲封之、以移齊國之俗、非所以導眾存民也。」</p> <p>公曰、「善。」</p> <p>於是厚其禮而留其封、敬見不問其道、仲尼迺行。</p>	<p>自大賢之息、周室既衰、禮樂缺有間。</p> <p>今孔子盛容飾、繁登降之禮、趨詳之節、累世不能殫其學、當年不能究其禮。</p> <p>君欲用之以移齊俗、非所以先細民也。」</p> <p>後景公敬見孔子、不問其禮。 … 孔子遂行、反乎魯。</p>
--	--	---

『晏子春秋』外篇第八は『墨子』非儒下に據るが、孔子世家の「自大賢之息、周室既衰、禮樂缺有間」に相當する部分は、『墨子』には見えず、『晏子春秋』は「自大賢之滅、周室之卑也、威儀加多」に作る。孔子世家はこれを承けつつ「威儀加多」を「禮樂缺有間」と正反對に改めている。下文「孔子之時、周室微而禮樂廢、詩書缺」に似る。墨子につき、孟子荀卿列傳「蓋墨翟、宋之大夫、善守禦、爲節用。或曰竝孔子時、或曰在其後」がきわめて簡単にしか觸れていないことにかがわれるように、『史記』は『墨子』を用いていなかった模様である。

[9] 異日 『論語』 微子

齊景公待孔子、曰、「若季氏則吾不能、以季・孟之間待之。」曰、「吾老矣、不能用也。」孔子行。

に據る。

『春秋經』哀二「二年春王二月、季孫斯・叔孫州仇・仲孫何忌帥師伐邾、取瀋東田及沂西田」に認められるように、魯の卿は季氏・叔孫氏・孟氏の順番で序列されていた。上述の三軍改編に認められる三氏の勢力を反映したのものである。齊景公は孔子を叔孫氏に相當する卿に登用しようと提案したが、のちにこれを撤回したというものである。孔子世家は、これを昭二十五～昭三十二の間に繋げるわけだが、伊藤仁齋『論語古義』は

按舊說據史記世家、以此爲魯昭公二十五年之事、此時孔子年三十五、名位未顯、想無景公以季孟待之之理、恐佗日之事。

と、これに疑義を呈する。確かに、「委吏」「乘田」の官歴しかもたない孔子を大夫ならともかく「季孟之間」に位置する卿に登用するという想定にはいかにも無理がある。實のところ、孔子世家の上文「已而去魯、斥乎齊、逐乎宋衛、困於陳蔡之間、於是反魯」や、『晏子春秋』外篇第八

仲尼相魯、景公患之、謂晏子曰、「鄰國有聖人、敵國之憂也。今孔子相魯若何。」晏子對曰、「君其勿憂。彼魯君、弱主也。孔子、聖相也。君不如陰重孔子、設以相齊、孔子彊諫而不聽、必驕魯而有齊、君勿納也。夫絕于魯、無主于齊、孔子困矣。」居期年、孔子去魯之齊、景公不納、故困于陳蔡之間。

は、定十三～哀十一における孔子去魯の最初に適齊を置いている。また、『孟子』萬章下「或謂孔子於衛主癰疽、於齊主侍人瘠環」も孔子去魯について齊を衛に竝べている。齊景公が齊の相への登用を仄めかすことで孔子を瞞着するという『晏子春秋』の記述は、『論語』微子に對する一つの説話的展開たりうる。孔子世家が去魯から適齊を排除したのは、齊の陰謀が去魯の契機となったとする後掲の記述との齟齬を嫌ったものであろうが、今一つ指摘しておかねばならないのは、『莊子』の去魯に關する記述である。

吾再逐於魯、伐樹於宋、削跡於衛、窮於商周、圍於陳蔡之間。(外篇/山木)

夫子再逐於魯、削跡於衛、伐樹於宋、窮於商周、圍於陳蔡。(雜篇/讓王)

則再逐於魯、削跡於衛、窮於齊、圍於陳蔡。(雜篇/盜跖)

丘再逐於魯、削跡於衛、伐樹於宋、圍於陳蔡。(雜篇/漁父)

いずれも「再逐於魯」とあり、孔子が魯から二回追放されたとする。具體的にいか

なる傳承に基づくものか確言できないが*75、孔子世家はあるいはこれを根據に、定十三～哀十一の去魯とは別に、昭二十五～昭三十二に適齊を想定したのかもしれない。

『論語』微子が、本來、定十三～哀十一の孔子去魯の際の逸話であったことの今一つの傍證が、『左傳』成十六

齊聲孟子通僑如、使立於高・國之間。僑如曰、「不可以再罪。」奔衛、亦聞於卿。である。「高國之間」が「季孟之間」を流用した表現であることは明らかである。卿であった叔孫僑如の亡命後の記述であり、『左傳』編纂に際して、『論語』微子が、大夫であった孔子の亡命に關わる記述として理解されていたことが了解される。

●昭三十二（前 510）四十二歳

孔子年四十二、魯昭公卒於乾侯、定公立 [1]。

[1] 魯昭公卒於乾侯 『春秋經』昭三十二「十有二月己未、公薨于乾侯」・定元「夏六月癸亥、公之喪至自乾侯。戊辰、公即位」。

●定五（前 505）四十七歳

定公立五年夏、季平子卒、桓子嗣立。季桓子穿井得土罐、中若羊、問仲尼云、「得狗」。仲尼曰、「以丘所聞、羊也。丘聞之、木石之怪夔・罔闓、水之怪龍・罔象、土之怪墳羊 [1]。」吳伐越、墮會稽、得骨節專車。吳使使問仲尼、「骨何者最大。」仲尼曰、「禹致群神於會稽山、防風氏後至、禹殺而戮之、其節專車、此爲大矣。」吳客曰、「誰爲神。」仲尼曰、「山川之神足以綱紀天下、其守爲神、社稷爲公侯、皆屬於王者。」客曰、「防風何守。」仲尼曰、「汪罔氏之君守封・禺之山、爲釐姓。在虞・夏・商爲汪罔、於周爲長翟、今謂之大人。」客曰、「人長幾何。」仲尼曰、「焦僂氏三尺、短之至也。長者不過十之、數之極也。」於是吳客曰、「善哉聖人。」 [2] 桓子嬖臣曰仲梁懷、與陽虎有隙。陽虎欲逐懷、公山不狃止之 [3]。其秋、懷益驕、陽虎執懷。桓子怒、陽虎因囚桓子、與盟而釋之

*75 『莊子』外篇/天運「今而夫子亦取先王已陳芻狗、聚弟子遊居寢臥其下。故伐樹於宋、削跡於衛、窮於商周、是非其夢邪。圍於陳蔡之間、七日不火食、死生相與鄰、是非其謎邪」は「再逐於魯」に相當する部分をもたない。また、天運・山木・讓王の「窮於商周」につき郭慶藩『莊子集釋』天運は「商是殷地、周是東周、孔子歷聘、曾困於此」、山木は「宋是殷後。孔子在宋及周、遂不被用、故僂窮也」とするが、「商是殷地」は不十分な説明といわざるを得ず、「宋是殷後」では「伐樹於宋」と宋が重複する。盜跖は「窮於齊」に作り、あるいは「商周」は「齊」字が訛變したものかもしれない。ついで讓王に據る『呂氏春秋』慎人「夫子逐於魯、削跡於衛、伐樹於宋、窮於陳蔡」は「再」および「窮於商周」を削除している。

[4]。陽虎由此益輕季氏。季氏亦僭於公室 [5]、陪臣執國政 [6]、是以魯自大夫以下皆僭離於正道。故孔子不仕、退而脩詩書禮樂 [7]、弟子彌眾、至自遠方、莫不受業焉 [8]。

[1] 季桓子穿井得土罐 『國語』魯語下第9章

季桓子穿井、獲如土罐、其中有羊焉。使問之仲尼曰、「吾穿井而獲狗、何也。」對曰、「以丘之所聞、羊也。丘聞之、木石之怪曰夔・蝮蝮、水之怪曰龍・罔象、土之怪曰羆羊。」

に據る。季桓子が見えることから、桓子嗣立の直後に置かれたものである。この時點で、孔子はなお仕官していないが、上述の如く、『左傳』昭七によれば、孟僖子の卒した昭二十四の頃には孔子の學識はすでに評判となっていた。季桓子の諮問はそうした文脈からは逸脱しない。もっとも、孔子の履歷を考慮せずに創作された可能性もある。

[2] 吳伐越 『國語』魯語下第18章

吳伐越、墮會稽、獲骨焉、節專車。吳子使來好聘、且問之仲尼、曰、「無以吾命。」賓發幣於大夫、及仲尼、仲尼爵之。既徹俎而宴、客執骨而問曰、「敢問骨何爲大。」仲尼曰、「丘聞之、昔禹致群神於會稽之山、防風氏後至、禹殺而戮之、其骨節專車。此爲大矣。」客曰、「敢問誰守爲神。」仲尼曰、「山川之靈、足以紀綱天下者、其守爲神。社稷之守者、爲公侯。皆屬於王者。」客曰、「防風何守也。」仲尼曰、「汪芒氏之君也、守封・嵎之山者也、爲漆姓。在虞・夏・商爲汪芒氏、於周爲長狄、今爲大人。」客曰、「人長之極幾何。」仲尼曰、「僬僥氏長三尺、短之至也。長者不過十之、數之極也。」

に據る。

『國語』はおおむね時代順に章を排列する*76。魯語下第10～第17章は公父文伯之母を主題とする一群である。魯語下はまず第9および第18～21章を配列し、ついで季桓子が登場する第9章のあとに、季康子が登場する第10～第17章を挿入したものであろう。第9および第18～21章については、第9章の季桓子は『左傳』定五に初見、第18章「吳伐越墮會稽」は『左傳』哀元、第19章「仲尼在陳」は哀三、第20章「齊閭丘來盟」は哀八、第21章「季康子欲以田賦」は哀十一に見えることからこのように配列したものであろう。

*76 吉本「國語成書考」（『京都大學文學部研究紀要』53、2014）。

ところが、第 18 章が哀元あるいはそれ以降の事件であったとすると、定十三の孔子去魯と矛盾する*77。下線部に相当する部分を孔子世家は省略しているが、孔子が大夫であったことを示している。『國語』は孔子去魯を哀元以降と認識していた可能性がある。また、哀十一に孔子は歸國し、哀十三の黄池の會を最後に呉は中原から撤退するので、哀十一～哀十三の間に繋げることは可能であるが、この場合は魯語下の配列に矛盾する。第 18 章が、孔子の履歴を考慮せずに創作された可能性も否定できない。孔子世家は、孔子を主題とすることから第 18 章を第 9 章に聯續するものと見立て、孔子が大夫であることを示唆する部分を削除した上で、[1] の直後に置いているのである。

[3] 桓子嬖臣曰仲梁懷 『左傳』定五

六月、季平子行東野、還、未至、丙申、卒于房。陽虎將以瑀璠斂、仲梁懷弗與、曰、「改步改玉。」陽虎欲逐之、告公山不狃。不狃曰、「彼爲君也、子何怨焉。」既葬、桓子行東野、及費。子洩爲費宰、逆勞於郊、桓子敬之。勞仲梁懷、仲梁懷弗敬。子洩怒、謂陽虎、「子行之乎。」

に據る。魯世家には見えない。

[4] 其秋 『左傳』定五

乙亥、陽虎囚季桓子及公父文伯、而逐仲梁懷。冬十月丁亥、殺公何藐。己丑、盟桓子于稷門之內。庚寅、大誣。逐公父歆及秦遄、皆奔齊。

に據る。魯世家「陽虎私怒、囚季桓子、與盟、乃捨之」は簡単な記述になっている。

季氏が魯の政權を掌握した結果、家政機構が膨脹し、昭公亡命はそうした趨勢をさらに加速したものと推測される。ついで宰を頂點とする有力家臣が家政機構を掌握するようになる。陽虎は季氏の私兵を動員して*78 季桓子を監禁し、反対派の季氏成員・家臣を殺害・追放したのである。ついで季桓子に「盟」を強いることで家政機構の掌握を正式に認めさせる。『左傳』襄九に、「要盟」を無効とする言説が見えるが*79、これ

*77 『史記評林』に引く鄧以讚が「此當在吳敗越會稽下、緣家語二章相連、誤置此、以此思史公作記、似是割裂古籍後爲篇、然後加刪潤耳」と指摘している。

*78 『左傳』定八「陽虎欲去三桓、以季寤更季氏、以叔孫輒更叔孫氏、己更孟氏。冬十月、順祀先公而祈焉。辛卯、禘于僖公。壬辰、將享季氏于蒲圃而殺之、戒都車曰、「癸巳至。」」は、陽虎が季氏の「都車」すなわち私邑の車兵を動員した事例である。

*79 『左傳』襄九「楚子伐鄆、子駟將及楚平。子孔・子鱗曰、「與大國盟、口血未乾而背之、可乎。」子駟・子展曰、「吾盟固云、唯彊是從、今楚師至、晉不我救、則楚彊矣。盟誓之言、豈敢背之。」

は逆に春秋時代における「盟」の拘束力がより一般的には有効であったことを示している。陽虎の権力は非制度的に獲得されたが、「盟」によってその正当性を追認させたのである。

季氏はすでに魯の政權を掌握していた。季氏の家政機構を掌握した陽虎はさらに、

陽虎又盟公及三桓於周社、盟國人于亳社、詛于五父之衢。(定六)

齊人歸鄆・陽關、陽虎居之以爲政。(定九)

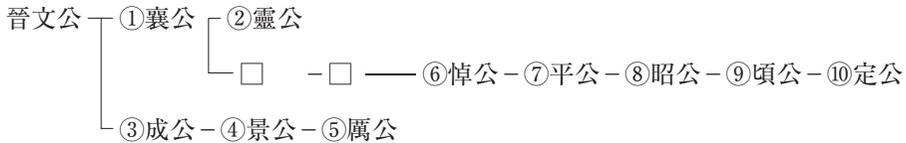
と、定公・三桓および「國人」と盟することで、魯の政權を獲得する。

『論語』季氏

孔子曰、「天下有道、則禮樂征伐自天子出。天下無道、則禮樂征伐自諸侯出。自諸侯出、蓋十世希不失矣。自大夫出、五世希不失矣。陪臣執國命、三世希不失矣。天下有道、則政不在大夫。天下無道、則庶人不議。」

孔子曰、「祿之去公室、五世矣。政逮於大夫、四世矣。故夫三桓之子孫、微矣。」

はこの頃の状況を踏まえた記述であろう。「天下無道、則禮樂征伐自諸侯出」は晉霸を指す。後述の如く、定四（前506）の召陵の會を契機に晉霸は解體に陥ったが、當時の晉定公（前511～前475）は文公ののち十代目である。



『左傳』昭二十五「政在季氏三世矣、魯君喪政四公矣」は『論語』を踏まえたものだが、杜預は四公を「宣・成・襄・昭」、季氏三世を「文子・武子・平子」とする。従って、『論語』の「祿之去公室、五世矣」は宣・成・襄・昭に定公を加えたもの、「政逮於大夫、四世矣」は、季文子・武子・平子に桓子を加えたものとなる。「陪臣執國命、三世希不失矣」は、陽虎の專權が世襲される可能性を述べたものとなる。

『左傳』には王朝・諸侯國世族宗主の家臣が散見するが、陽虎の如き「陪臣執國命」、

且要盟無質、神弗臨也。所臨唯信、信者、言之瑞也、善之主也、是故臨之。明神不鑄要盟、背之、可也。」乃及楚平。」

あるいは後述の三都の如く邑宰が數年にわたって世族宗主に「叛」するといった事例が魯以外には認められないことを特に強調しておきたい。季氏ないし三桓が東門氏追放後は對抗する他の世族をもたず、長期にわたって魯の政權を安定的に維持しえたことが、かれらの家臣の成長を促し、さらに八年にもわたる國君不在が傳統的の身分秩序を決定的に形骸化したものである。そうした魯特有の歴史的経緯のもとに孔子も出現するのである。

魯の政權を奪取した陽虎は、權力を強化するために人材の獲得につとめた。『論語』陽貨

陽貨欲見孔子、孔子不見、歸孔子豚。孔子時其亡也、而往拜之、遇諸塗。謂孔子曰、「來。予與爾言。」曰、「懷其寶而迷其邦、可謂仁乎。」曰、「不可。」「好從事而亟失時、可謂知乎。」曰、「不可。」「日月逝矣、歲不我與。」孔子曰、「諾。吾將仕矣。」

はその一環である。陽虎亡命ののち、孔子がただちに大夫に登用され、子路が陽虎に代わって季氏の宰に任ぜられたように、孔門はすでに人材の寶庫とみなされていた。『論語』

子曰、「片言可以折獄者、其由也與。」（顏淵）

子路・曾皙・冉有・公西華侍坐。子曰、「以吾一日長乎爾、毋吾以也。居則曰、不吾知也。如或知爾、則何以哉。」子路率爾而對曰、「千乘之國、攝乎大國之間、加之以師旅、因之以饑饉。由也爲之、比及三年、可使有勇、且知方也。」夫子哂之。「求。爾何如。」對曰、「方六七十、如五六十、求也爲之、比及三年、可使足民。如其禮樂、以俟君子。」「赤。爾何如。」對曰、「非曰能之、願學焉。宗廟之事、如會同、端章甫、願爲小相焉。」「點。爾何如。」鼓瑟希、鏗爾舍瑟而作。對曰、「異乎三子者之撰。」子曰、「何傷乎。亦各言其志也。」曰、「莫春者、春服既成。冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。」夫子喟然歎曰、「吾與點也。」三子者出、曾皙後。曾皙曰、「夫三子者之言何如。」子曰、「亦各言其志也已矣。」曰、「夫子何哂由也。」曰、「爲國以禮、其言不讓、是故哂之。」「唯求則非邦也與。」「安見方六七十如五六十而非邦也者。」「唯赤則非邦也與。」「宗廟會同、非諸侯而何。赤也爲之小、孰能爲之大。」（先進）

は、孔門の實務能力を具體的に示している。

『周禮』地官/保氏

保氏、掌諫王惡。而養國子以道、乃教之六藝。一曰五禮、二曰六樂、三曰五射、四曰五馭、五曰六書、六曰九數。

は「國子」の教育科目として禮樂射御書數の「六藝」を擧げる。「國子」は「公卿大夫之子弟」（『周禮』地官/師氏・鄭玄注）であり、そも『周禮』は戰國後期に假構された理想的國制を示したものに他ならないが^{*80}、先秦期の爲政者一般に要求される政治的技能に讀み換えることは可能である。

『左傳』成十三は「祀與戎」すなわち祭祀・軍事を「國之大事」とする。「六藝」の禮樂は祭祀に、射御は軍事に、そして書數はそれら「大事」を支える日常的な行政實務に對應する。

孔門もこれら「六藝」を教育したものであろう。「禮樂」は後述するように『論語』に頻見し、射御は『論語』子罕「執御乎。執射乎」という孔子の發言に見え、書數は孔子がつとめた委吏・乘田に必要であった。

『論語』述而に「子曰、「自行束脩以上、吾未嘗無誨焉。」とあるように、孔門はおそらくは低廉な「束脩」によって広く開放されていた。泰伯に「子曰、「三年學、不至於穀、不易得也。」とあるように、三年の在學で仕官しうる技能を習得し得た。

春秋時代後期には、國君や世族宗主のもとに、季氏の家政機構の如き、傳統的な身分制に拘らない官僚機構が創出されつつあった。官吏登用制度が確立していない段階では、孔門のような集團が即戦力となる人材の源泉として歓迎された。このような集團は孔門以外にも存在したはずである。のちの墨家はそうした集團のうち、軍事技術に特化したものである。ほかならぬ陽虎にしても、魯を出奔したのち、齊景公に魯への侵攻を獻策し、ついで趙簡子に事えた。

陽虎以周易筮之、遇泰之需、曰、「宋方吉、不可與也。微子啟、帝乙之元子也。宋・鄭、甥舅也。祉、祿也。若帝乙之元子歸妹而有吉祿、我安得吉焉。」（『左傳』哀九）

陽虎曰、「爲富不仁矣、爲仁不富矣。」（『孟子』滕文公上）

の如く、孔門と同様の教養をもち、

六月乙酉、晉趙鞅納衛大子于戚。宵迷、陽虎曰、「右河而南、必至焉。」（『左傳』

*80 『周禮』については、吉本「周禮小考」（『中國古代史論叢』、2004）を見よ。

哀二)

秋八月、齊人輸范氏粟、鄭子姚・子般送之。士吉射逆之、趙鞅禦之、遇於戚。陽虎曰、「吾車少、以兵車之旆與罕・駟兵車先陳。罕・駟自後隨而從之、彼見吾貌、必有懼心。於是乎會之、必大敗之。」從之。〔『左傳』哀二〕

と戦略にも秀でた人物であった。また、『韓非子』外儲說左下

陽虎去齊走趙、簡主問曰、「吾聞子善樹人。」虎曰、「臣居魯、樹三人、皆爲令尹、及虎抵罪於魯、皆搜索於虎也。臣居齊、薦三人、一人得近王、一人爲縣令、一人爲候吏、及臣得罪、近王者不見臣、縣令者迎臣執縛、候吏者追臣至境上、不及而止。虎不善樹人。」主俛而笑曰、「夫樹橘柚者、食之則甘、嗅之則香。樹枳棘者、成而刺人。故君子慎所樹。」

には、魯・齊でそれぞれ三人を仕官させたことが見える。陽虎は孔門とともに、戦国時代の「遊士」の先驅となったといえよう。もっとも、上掲の「陪臣執國命、三世希不失矣」にうかがわれ、また後述の如く自身の宗族である「陽氏」を擁し、孟氏に代わる世族化を志向したように、陽虎はなお春秋期の政治社會的傳統より離脱する展望を示し得なかった。その點が、臣の側における自由な致仕の可能性を主張し、實踐した孔子との決定的な相違である。

[5] 季氏亦僭於公室 『公羊』昭二十五「季氏爲無道、僭於公室久矣」。

[6] 陪臣執國政 『論語』季氏「陪臣執國命」。

[7] 退而脩詩書禮樂 『論語』述而「子所雅言、詩・書・執禮、皆雅言也」。

[8] 自遠方來 『論語』學而「子曰、「學而時習之、不亦說乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不愠、不亦君子乎。」」。

●定八（前 502）五十歲

定公八年、公山不狃不得意於季氏、因陽虎爲亂、欲廢三桓之適、更立其庶孽陽虎素所善者、遂執季桓子。桓子詐之、得脫 [1]。

[1] 公山不狃不得意於季氏 『左傳』定八

季寤（注「季桓子之弟」）・公鉏極（注「公彌曾孫、桓子族子」）・公山不狃（注「費宰」）皆不得志於季氏、叔孫輒（注「輒、叔孫氏之庶子」）無寵於叔孫氏、叔仲志（注「志、叔仲帶之孫」）不得志於魯、故五人因陽虎。陽虎欲去三桓、以季寤更季氏、

以叔孫輒更叔孫氏、己更孟氏。冬十月、順祀先公而祈焉。辛卯、禘于僖公。壬辰、將享季氏于蒲圃而殺之、戒都車曰、「癸巳至。」成宰公斂處父告孟孫、曰、「季氏戒都車、何故。」孟孫曰、「吾弗聞。」處父曰、「然則亂也、必及於子、先備諸。」與孟孫以壬辰爲期。陽虎前驅、林楚御桓子、虞人以鉞・盾夾之、陽越殿（注「越、陽虎從弟」）、將如蒲圃。桓子昨謂林楚曰、「而先皆季氏之良也、爾以是繼之。」對曰、「臣聞命後。陽虎爲政、魯國服焉、違之徵死、死無益於主。」桓子曰、「何後之有。而能以我適孟氏乎。」對曰、「不敢愛死、懼不免主。」桓子曰、「往也。」孟氏選圉人之壯者三百人、以爲公期築室於門外。林楚怒馬、及衢而騁、陽越射之、不中、築者闔門。有自門間射陽越、殺之。陽虎劫公與武叔、以伐孟氏。公斂處父帥成人自上東門入、與陽氏戰于南門之內、弗勝。又戰于棘下、陽氏敗。陽虎說甲如公宮、取寶玉・大弓以出、舍于五父之衢、寢而爲食。其徒曰、「追其將至。」虎曰、「魯人聞余出、喜於徵死、何暇追余。」從者曰、「嘻。速駕。公斂陽在。」公斂陽請追之、孟孫弗許。陽欲殺桓子、孟孫懼而歸之。子言辨舍爵於季氏之廟而出。陽虎入于謹、陽關以叛。

に據る。魯世家「八年、陽虎欲盡殺三桓適、而更立其所善庶子以代之。載季桓子將殺之、桓子詐而得脫。三桓共攻陽虎、陽虎居陽關」は、「公山不狃不得意於季氏」に相當する部分をもたず、孔子世家は「三桓共攻陽虎、陽虎居陽關」に相當する部分をもたない。

上述の如く、陽虎はまずは季桓子と、ついで定公・三桓・「國人」と「盟」を結ぶことで自身の政權掌握を正當化したが、やはり不安定は免れなかった。定七

齊國夏伐我。陽虎御季桓子、公斂處父御孟懿子、將宵軍齊師。齊師聞之、墮、伏而待之。處父曰、「虎不圖禍、而必死。」苦夷曰、「虎陷二子於難、不待有司、余必殺女。」虎懼、乃還、不敗。

において、孟氏の成宰である公斂處父や季氏の臣である苦夷は、陽虎が季桓子に行なったと同様の直接的な實力行使を示唆することで、陽虎を牽制した。加えて、陽虎の「從弟」たる陽越が見え、陽虎の部下が「陽氏」と汎稱されているように、陽虎も自身の宗族を有していた。季氏・叔孫氏の不平分子と通謀して三桓を打倒し、自ら孟氏に代わろうとしたのは、宗主として陽氏を世族化し、制度的保障を獲得することで政權の安定的維持を試みたものに他ならない。孟氏に代わろうとしたことを根據に陽虎を孟

氏の分族とする説^{*81}があるが、特定の世族が排除されて別の氏がその地位を襲う事例はむしろ頻見する。魯についていえば、宣十八（前591）に莊族東門氏が追放されたのち、成二（前589）に文族叔氏の公孫嬰齊が登場している。

この事件について、『春秋經』に「盜竊寶玉、大弓」とあり、杜預は「盜、謂陽虎也。家臣賤、名氏不見、故曰盜」と注する。陽虎がその出奔に至るまで「家臣」であったと解するわけだが、經文に名氏が見えるのは卿に限られており、大夫でも「名氏不見」である。「名氏不見」は「家臣」であったことを排他的に意味するわけではない。果たして『孟子』滕文公下

陽貨欲見孔子而惡無禮、大夫有賜於士、不得受於其家、則往拜其門。陽貨矚孔子之亡也、而饋孔子蒸豚。孔子亦矚其亡也、而往拜之。

は、上掲の『論語』陽貨を踏まえつつ、陽貨（陽虎）が大夫であったとしている。

また、『左傳』定六

夏、季桓子如晉、獻鄭俘也。陽虎強使孟懿子往報夫人之幣、晉人兼享之。孟孫立于房外、謂范獻子曰、「陽虎若不能居魯、而息肩於晉、所不以爲中軍司馬者、有如先君。」獻子曰、「寡君有官、將使其人。鞅何知焉。」獻子謂簡子曰、「魯人患陽虎矣。孟孫知其讐、以爲必適晉、故強爲之請、以取入焉。」

には、陽虎が晉に亡命することがあれば、中軍司馬に登用されたいとの孟懿子の発言が見える。晉の司馬は大夫の職である^{*82}。一方で、亡命者が任用される場合、本國における身分より一等降すことが「古之制」とされていた^{*83}。この事實は、陽虎がすでに大夫身分を有していたことを示す。同じ定六の秋に、陽虎が定公・三桓・國人と盟をなしたのも、大夫身分の保有を示唆する。陽虎は引き続き季氏の家政を主宰していたが、大夫が「屬大夫」として世族宗主に奉仕することは、『左傳』に頻見するところであ

*81 童書業『春秋左傳研究』（1980。『童書業著作集』1、中華書局、2008）。

*82 『左傳』成二「公會晉師於上鄆。賜三帥先路三命之服。司馬・司空・輿帥・候正・亞旅皆受一命之服」・襄十九「公享晉六卿于蒲圃、賜之三命之服。軍尉・司馬・司空・輿尉・候奄皆受一命之服」。

*83 『左傳』昭七「子皮之族飲酒無度、故馬師氏與子皮氏有惡。齊師還自燕之月、罕朔殺罕魋。罕朔奔晉。韓宣子問其位於子產。子產曰、「君之羈臣、苟得容以逃死、何位之敢擇。卿違、從大夫之位。罪人以其罪降、古之制也。朔於敝邑、亞大夫也。其官、馬師也。獲戾而逃、唯執政所實之。得免其死、爲惠大矣、又敢求位。」宣子爲子產之敏也、使從嬖大夫」。

る*84。

●定九（前 501）五十一歳

定公九年、陽虎不勝、奔于齊 [1]。是時孔子年五十 [2]。公山不狃以費畔季氏、使人召孔子。孔子循道彌久、溫無所試、莫能己用、曰、「蓋周文武起豐鎬而王、今費雖小、儻庶幾乎。」欲往。子路不說、止孔子。孔子曰、「夫召我者豈徒哉。如用我、其爲東周乎。」然亦卒不行 [3]。其後定公以孔子爲中都宰 [4]、一年、四方皆則之。由中都宰爲司空、由司空爲大司寇 [5]。

[1] 陽虎不勝 『左傳』定九

夏、陽虎歸寶玉・大弓。書曰「得」、器用也。凡獲器用曰得、得用焉曰獲。六月、伐陽關。陽虎使焚萊門。師驚、犯之而出奔齊、請師以伐魯、曰、「三加、必取之。」齊侯將許之。鮑文子諫曰、「臣嘗爲隸於施氏矣、魯未可取也。上下猶和、眾庶猶睦、能事大國、而無天菑、若之何取之。陽虎欲勤齊師也、齊師罷、大臣必多死亡、已於是乎奮其詐謀。夫陽虎有寵於季氏、而將殺季孫、以不利魯國、而求容焉。親富不親仁、君焉用之。君富於季氏、而大於魯國、茲陽虎所欲傾覆也。魯免其疾、而君又收之、無乃害乎。」齊侯執陽虎、將東之。陽虎願東、乃囚諸西鄙。盡借邑人之車、鏗其軸、麻約而歸之。載葱靈、寢於其中而逃。追而得之、囚於齊。又以葱靈逃、奔宋、遂奔晉、適趙氏。仲尼曰、「趙氏其世有亂乎。」

に據る*85。魯世家「九年、魯伐陽虎、陽虎奔齊、已而奔晉趙氏」の「已而奔晉趙氏」に相當する部分をもたない。

[2] 是時孔子年五十 「五十」は「五十一」の「一」が轉寫の過程で脱落したものであろう。

[3] 公山不狃以費畔季氏 『論語』陽貨に據る。下線部は孔子世家独自の記述である。

*84 『左傳』昭七「孟僖子病不能相禮、乃講學之、苟能禮者從之。及其將死也、召其大夫」注「僖子屬大夫」。また、昭二十六「成大夫公孫朝謂平子曰、「有都、以衛國也、請我受師。」許之。請納質、弗許、曰、「信女、足矣。」告於齊師曰、「孟氏、魯之敝室也。用成已甚、弗能忍也、請息肩于齊。」では成が孟氏の私邑であることが明示されているが、成の長官は「成大夫」である。

*85 『韓非子』外儲說左下「陽虎議曰、「主賢明則悉心以事之、不肖則飾姦而試之。」逐於魯、疑於齊、走而之趙、趙簡主迎而相之、左右曰、「虎善竊人國政、何故相也。」簡主曰、「陽虎務取之、我務守之。」遂執術而御之、陽虎不敢爲非、以善事簡主、興主之強、幾至於霸也」もこれに據る。

「蓋周文武起豐鎬而王」と周文王・武王の比喩は下文「夫文王在豐、武王在鎬、百里之君卒王天下」にも見える。

『論語』陽貨	孔子世家
公山弗擾以費畔、召、	公山不狃以費畔季氏、使人召孔子。 孔子循道彌久、溫溫無所試、莫能已用、曰、 「蓋周文武起豐鎬而王、今費雖小、儻庶幾 乎。」
子欲往。子路不說、曰、「末之也已、何必 公山氏之之也。」	欲往。子路不說、止孔子。
子曰、「夫召我者而豈徒哉。如有用我者、 吾其爲東周乎。」	孔子曰、「夫召我者豈徒哉。如用我、 其爲東周乎。」然亦卒不行。

公山不狃ら陽虎與黨は陽虎亡命後も引き續き費に據り、孔子を招聘したのである。孔子が大夫に任ぜられたのは、季桓子が陽虎與黨と孔子の提携を恐れたために他ならないが、他方、孔子が標榜した独自の君臣倫理にも一因があろう。『論語』先進

季子然問、「仲由・冉求可謂大臣與。」子曰、「吾以子爲異之間、曾由與求之間。所謂大臣者、以道事君、不可則止。今由與求也、可謂具臣矣。」曰、「然則從之者與。」

子曰、「弑父與君、亦不從也。」

に見えるように、孔子は「道」すなわち客觀的規範に基づく君臣關係を主張し、君主が規範を逸脱した場合、臣は致仕すべきものとした。

人格的關係の隨伴した従來の君臣關係、とりわけ世族宗主と有力家臣の間においては、原理的に全人格的な、したがって無制限の奉仕・信任が要求される。そのため、君主の委託した政務は臣の恣意的な運用によってその權益に容易に轉化する。君臣關係が破綻した場合も、往々にして臣は權益放棄を肯んぜず、君主に對する軍事行動や他國への離反といった事態に立ち至る。客觀的規範に基づく君臣關係においては、君臣雙方の權利義務があらかじめ制限されているので、このような事態は原理的に回避される。君臣關係が破綻した場合、臣は致仕して他國に仕途を求めればよい。孔子とその弟子がこのような君臣關係を主張し得たのは、孔門の「士」としての高度な技術の汎用性、そうした技術を身につけた人材を必要とする當時の政治的趨勢を確信していたからである。

なお、

孔子有見行可之仕、…於季桓子、見行可之仕也。(注「行可、冀可行道也。魯卿季桓子秉國之政、孔子仕之、冀可得因之行道也。」)(『孟子』萬章下)

孔子行乎季孫、三月不違、(注「孔子仕魯、政事行乎季孫、三月之中不見違、過是違之也。不言政行乎定公者、政在季氏之家。」)(『公羊』定十)

は、孔子が季桓子に「仕」えたとする。孔子が公臣たる大夫として司寇の官職を有したと形式的には矛盾するが、魯の國政の實態を反映した傳承といえよう。

[4] 其後定公以孔子爲中都宰 中都は『禮記』檀弓上

夫子制於中都、四寸之棺、五寸之槨、以斯知不欲速朽也。

に見え、鄭玄は、

中都、魯邑名也。孔子嘗爲之宰、爲民作制。孔子由中都宰爲司空、由司空爲司寇。と孔子世家を引いてこれに注する。また『續漢書』郡國志三/東平國に「須昌 故屬東郡。有致密城、古中都」とある。

『左傳』においては、公邑の長官は大夫を稱し、宰は私邑の長官である。檀弓上にも「宰」は見えない。定公が任じたとすれば中都は公邑であり、その長官は中都大夫と稱したはずである。孔子世家の「中都宰」は春秋期の邑宰・邑大夫の別を辨えない表現といわざるを得ない。

[5] 由中都宰爲司空 孔子が「司空」となったことは孔子世家に初見する。上文「由是爲司空。已而去魯」に司寇が無く司空しか見えないことは、「司空」がそもそも「司寇」の誤寫であり、そうした材料を重複して用いている可能性を示唆する。一方で、「司寇」は、

昔者夫子失魯司寇、將之荊。蓋先之以子夏、又申之以冉有。(『禮記』檀弓上)

孔子之爲司寇也、溝而合諸墓。(『左傳』定元)

孔子爲魯司寇、不用、從而祭、燔肉不至、不稅冕而行。(『孟子』告子下)

にすでに見え、より確度の高い傳承といえるが*86、「大」を冠することは孔子世家に初

*86 戰國後期～前漢前期には以下の事例がある。『墨子』非儒下「孔某爲魯司寇、舍公家而奉季孫。季孫相魯君而走、季孫與邑人爭門關、決植」・『荀子』儒效「仲尼將爲司寇、沈猶氏不敢朝飲其羊、公愼氏出其妻、愼潰氏踰境而徙、魯之粥牛馬者不豫賈、脩正以待之也。居於闕黨、闕黨之子弟罔不分、有親者取多、孝弟以化之也」・宥坐「孔子爲魯司寇、有父子訟者、孔子拘之、

見する。たとえば『周禮』では、天地春夏秋冬官の長官たる大宰・大司徒・大宗伯・大司馬・大司寇は卿、次官たる小宰・小司徒・小宗伯・小司馬・小司寇は中大夫である。孔子世家では、下文に「由大司寇行攝相事」とあり、それに先立って大夫身分の司空から卿身分の大司寇への昇進を想定しているようである。「行攝相事」すなわち相邦には卿身分がふさわしいからである。しかし、後述の如く、孔子を「相邦」とすることは、『左傳』の「相」＝「相禮」を意圖的に曲解したものであり、孔子を卿身分とする根據にならない。孔子が一貫して大夫身分であったことについては、閻若璩に考證がある*87。

ここで魯の司寇について少しく立ち入って検討しておこう。そもそも春秋時代の魯については、卿の官職を示す記述がほとんど認められない。すなわち、『左傳』においては、

邾庶其以漆・閻丘來奔、季武子以公姑姊妻之、皆有賜於其從者。於是魯多盜。季孫謂臧武仲曰、「子盍詰盜。」武仲曰、「不可詰也、紇又不能。」季孫曰、「我有四封、而詰其盜、何故不可。子爲司寇、將盜是務去、若之何不能。」（襄二十一・前 552）

三月不別。其父請止、孔子舍之・『呂氏春秋』高義「孔子布衣也、官在魯司寇、萬乘難與比行、三王之佐不顯焉、取舍不苟也夫」・『韓詩外傳』卷八「孔子爲魯司寇、命之曰、「宋公之子弗甫有孫魯孔丘、命爾爲司寇。」孔子曰、「弗甫敦及厥辟、將不堪。」公曰、「不妥。」」・『淮南子』主術訓「孔子之通、智過於萇弘、勇服於孟賁、足躡郊菟、力招城關、能亦多矣。然而勇力不聞、伎巧不知、專行教道、以成素王、事亦鮮矣。春秋二百四十二年、亡國五十二、弑君三十六、采善鉏醜、以成王道、論亦博矣。然而圍於匡、顏色不變、絃歌不輟、臨死亡之地、犯患難之危、據義行理而志不懼、分亦明矣。然爲魯司寇、聽獄必爲斷、作爲春秋、不道鬼神、不敢專己。夫聖人之智、固已多矣、其所守者有約、故舉而必榮」・秦族訓「孔子爲魯司寇、道不拾遺、市買不豫買、田漁皆讓長、而斑白不戴負、非法之所能致也」・『春秋繁露』五行相生「北方者水、執法、司寇也、司寇尚禮、君臣有位、長幼有序、朝廷有爵、鄉黨以齒、升降揖讓、般伏拜謁、折旋中矩、立則罄折、拱則抱鼓、執衡而藏、至清廉平、賂遺不受、請謁不聽、據法聽訟、無有所阿、孔子是也。爲魯司寇、斷獄屯屯、與眾共之、不敢自專、是死者不恨、生者不怨、百工維時以成器械、器械既成、以給司農」・五行相勝「孔子爲魯司寇、據義行法、季孫自消、墮費郈城、兵甲有差」。

*87 閻若璩『四書釋地續』爲魯司寇「孔子爲魯司寇。司寇、魯官、名在司徒・司馬・司空三桓世爲之三卿之下、侯國本無大稱、史記世家作大司寇非也。然司寇、魯有以初命之大夫爲者、孔子是、韓詩外傳猶載孔子爲魯司寇命辭曰、宋公之子弗甫何孫魯孔某、命爾爲司寇、無大字、有以再命之卿爲之者、臧孫紇是、襄二十一年、季孫謂武仲曰、子爲司寇、及後二年出奔邾也、書於經、以爲卿故、若孔子雖與聞國政、實止大夫而非卿、故經沒而不見、不然齊人來歸鄆龜陰田、聖人未嘗以己功而諱之、豈有孔某出奔、載諸策書、修春秋時、竟削之哉、蓋原非魯卿、孔子生平、官爵宜昭、揭萬世餘、故質言之如此」。

夫子受命於朝而聘于王、王思舊勳而賜之路、復命而致之君。君不敢逆王命而復賜之、使三官書之。吾子爲司徒、實書名。夫子爲司馬、與工正書服。孟孫爲司空、以書勳。今死而弗以、同弃君命也。書在公府而弗以、是廢三官也。若命服、生弗敢服、死又不以、將焉用之。(昭四・前 538)

將戰、吳子呼叔孫、曰、「而事何也。」對曰、「從司馬。」(哀十一・前 484)

と、魯卿の官職を明示する記述はわずかにこの三例のみである。

官僚制を、統治機構の成員が、明示的な職階・職掌を伴った官職に基づいて日常的に政務を処理する制度と規定するならば、春秋時代の王朝・諸侯國の統治機構は、とりわけその最上級部分については、必ずしも官僚制的には編成されていない。晉の卿に至っては「將中軍」とその權能が記されるだけで、官職をもたないことが普通である。加えて、卿については、官職を帶する場合にしても、職掌に關聯した活動が記述されることはほとんどなく、その權能は、分業的ではなく政務一般に及ぶのであり、要するに卿としての身分に由來することが一般的である。こうした状況もあって、三桓の司徒・司馬・司空を明示する記述は、昭四・哀十一の二例しかないのである。

襄二十一には臧武仲が司寇であったことが見えるが、さらに宣十八(前 591)

冬、公薨。季文子言於朝曰、「使我殺適立庶、以失大援者、仲也夫。」臧宣叔怒曰、「當其時、不能治也、後之人何罪。子欲去之、許請去之。」遂逐東門氏。

に對し、杜預は「時爲司寇、主行刑」と注している。この東門氏追放ののち、魯では三桓および臧氏・叔氏が『春秋經』に見え、したがって卿であったが、三桓が政權を獨占し、臧氏・叔氏との間には懸隔があった。杜預に従えば、魯の司寇は卿である臧宣叔・臧武仲が務めていたことになるが、一方で、文十八(前 609)

莒紀公生太子僕、又生季佗、愛季佗而黜僕、且多行無禮於國。僕因國人以弑紀公、以其寶玉來奔、納諸宣公。公命與之邑、曰、「今日必授。」季文子使司寇出諸竟、曰、「今日必達。」

には單に「司寇」とあるだけでその具體名は見えず、大夫身分のものが務めていたことがうかがわれる。要するに、魯の司寇は、その擔任者の身分が卿・大夫の間で可動的だったということになる。

襄二十三(前 550)には臧武仲が亡命し、臧氏は卿位を失う。降って定九(前 501)

に至り孔子が司寇に任ぜられるわけだが、孔子の身分については、『論語』郷黨

孔子於郷黨、恂恂如也、似不能言者。其在宗廟・朝廷、便便言、唯謹爾。朝、與下大夫言、侃侃如也。與上大夫言、誾誾如也。

を最も基本的な材料として確認しておきたい。『論語集解』の引く孔安國注は、「侃侃如也」「誾誾如也」にそれぞれ「侃侃、和樂之貌」「誾誾、中正之貌」と注し、邢昺疏は、「朝、與下大夫言、侃侃如也。與上大夫言、誾誾如也」者、侃侃、和樂之貌。誾誾、中正之貌。下大夫稍卑、故與之言、可以和樂。上大夫、卿也、爵位既尊、故與之言、常執中正、不敢和樂也。

と敷衍する。『論語』の上大夫・下大夫は、『左傳』の卿・大夫に相當する。下大夫に「侃侃如」で、上大夫に「誾誾如」であったことは、孔子が下大夫に屬することを明示する。

『論語』にはさらに、

顔淵死、顔路請子之車以爲之槨。子曰、「才不才、亦各言其子也。鯉也死、有棺而無槨。吾不徒行以爲之槨。以吾從大夫之後、不可徒行也。」（先進）

陳成子弑簡公。孔子沐浴而朝、告於哀公曰、「陳恆弑其君、請討之。」公曰、「告夫三子。」孔子曰、「以吾從大夫之後、不敢不告也。君曰「告夫三子」者。」之三子告、不可。孔子曰、「以吾從大夫之後、不敢不告也。」（憲問）

と「吾從大夫之後」という表現が見える。『論語集解』の引く孔安國注は、「孔子時爲大夫、言從大夫之後、不可以徒行、謙辭也」と注する。一方、『左傳』哀十四（前481）

甲午、齊陳恆弑其君壬于舒州。孔丘三日齊、而請伐齊三、公曰、「魯爲齊弱久矣、子之伐之、將若之何。」對曰、「陳恆弑其君、民之不與者半。以魯之眾加齊之半、可克也。」公曰、「子告季孫。」孔子辭、退而告人曰、「吾以從大夫之後也、故不敢不言。」

は、『論語』憲問に據るが、「吾以從大夫之後也」に對し杜預は「嘗爲大夫而去、故言後」と注する。これは孔子世家の後文「然魯終不能用孔子、孔子亦不求仕」に呼應するものだが当たらない。上博楚簡

季桓子使仲弓爲宰。仲弓以告孔子曰、季氏…使雍也從於宰夫之後。（仲弓*88）

*88 李朝遠「中弓」（『上海博物館藏戰國楚竹書』3、上海古籍出版社、2003）。

季康子問於孔子曰、肥、從有司之後、(季康子問於孔子^{*89})

において仲弓・季康子はそれぞれ現役の「宰夫」「有司」であるからである。『論語』の「吾從大夫之後」は、孔子がその晩年まで大夫身分を保持したことを示している。

なお、『論語』雍也

子華使於齊、冉子爲其母請粟。子曰、「與之釜。」請益。曰、「與之庾。」冉子與之粟五秉。子曰、「赤之適齊也、乘肥馬、衣輕裘。吾聞之也、君子周急不繼富。」^{*90}

原思爲之宰、與之粟九百、辭。子曰、「毋以與爾鄰里鄉黨乎。」^{*91}

は、大夫身分によって司寇などの官職に就いた孔子が、原思を「宰」とするなど弟子を自身の家臣に用いたことを伝える。穀物による俸給・手當に關するおそらく最古の材料である。

仲尼弟子列傳「冉求字子有、少孔子二十九歲」によれば、冉有は昭二十(前522)生、定九に二十二歳である。仲尼弟子列傳に「公西赤字子華。少孔子四十二歳」とあるが、金鶚^{*92}の考證に據れば、「四十二」は「三十二」の誤、昭二十三(前519)生、定九には十九歳である。原憲については、『史記索隱』仲尼弟子列傳に「鄭玄云魯人。家語云、「宋人。少孔子三十六歳」とあるが、これも金鶚の考證に據れば、「三十六」は「二十六」の誤、昭十七(前525)生、定九には二十五歳である。

●定十(前500)五十二歳

定公十年春、及齊平。夏、齊大夫黎鉏言於景公曰、「魯用孔丘、其勢危齊。」乃使使告魯爲好會、會於夾谷 [1]。魯定公且以乘車好往 [2]。孔子攝相事 [3]、曰、「臣聞有文事者必有武備、有武事者必有文備。古者諸侯出疆、必具官以從。請具左右司馬。」定公曰、

*89 濮茅左「季庚子問於孔子」(『上海博物館藏戰國楚竹書』5、上海古籍出版社、2005)・侯乃鋒「上博(五)幾個固定詞語和句式補說」(簡帛網2006.03.20)。

*90 「釜」は『左傳』昭三「齊舊四量、豆、區、釜、鍾。四升爲豆、各自其四、以登於釜。釜十則鍾」に據れば64升、「庾」は『考工記』陶人「庾、實二穀、厚半寸、脣寸。…豆、實三而成穀、崇尺」によれば6豆=24升。「秉」は『儀禮』聘禮記「十斗曰斛、十六斗曰籩、十籩曰秉」によれば1600升=16斛。「五秉」は80斛(劉寶楠『論語正義』)。

*91 「九百」は900斛(劉寶楠『論語正義』)。ちなみに『左傳』昭二十六「申豐從女賈、以幣、錦二兩、縛一如瑱、適齊師、謂子猶之人高齋、「能貨子猶、爲高氏後、粟五千庾。』」の5000庾は1200斛。惠族高氏は卿であったが、高彊が出奔し廢絶した(『左傳』昭十)。

*92 金鶚『求古錄禮說』九/孔子弟子考。また錢穆『先秦諸子繫年』29孔子弟子通考。

「諾。」具左右司馬 [4]。會齊侯夾谷、爲壇位、土階三等、以會遇之禮相見、揖讓而登。獻酬之禮畢、齊有司趨而進曰、「請奏四方之樂。」景公曰、「諾。」於是旌旄羽祓矛戟劍撥鼓噪而至。孔子趨而進、歷階而登、不盡一等、舉袂而言曰、「吾兩君爲好會、夷狄之樂何爲於此。請命有司。」有司卻之、不去、則左右視晏子與景公。景公心忤、麾而去之。有頃、齊有司趨而進曰、「請奏宮中之樂。」景公曰、「諾。」優倡侏儒爲戲而前。孔子趨而進、歷階而登、不盡一等、曰、「匹夫而營惑諸侯者罪當誅。請命有司。」有司加法焉、手足異處。景公懼而動、知義不若、歸而大恐、告其群臣曰、「魯以君子之道輔其君、而子獨以夷狄之道教寡人、使得罪於魯君、爲之奈何。」有司進對曰、「君子有過則謝以質、小人有過則謝以文。君若悼之、則謝以質。」於是齊侯乃歸所侵魯之郟・汶陽・龜陰之田以謝過 [5]。

[1] 定公十年春 『春秋經』 定十「十年春王三月、及齊平。夏、公會齊侯于夾谷。」

『論語』 鄉黨

君召使擯（集解「鄭曰、君召使擯者、有賓客使迎之。」）、色勃如也、足躩如也。揖所與立、左右手。衣前後、襜如也。趨進、翼如也。賓退、必復命曰、「賓不顧矣。」執圭、鞠躬如也、如不勝（集解「包曰、爲君使、聘問鄰國、執持君之圭。鞠躬者、敬慎之至。」）。上如揖、下如授。勃如戰色、足縮縮、如有循。享禮、有容色。私覲、愉愉如也。

には、孔子の迎賓・出使が見える。龔元玠は、「及齊平」の際のものとする^{*93}。上掲『論語』 雍也「子華使於齊」も一聯の事件かもしれない。

黎鉏を『左傳』は犁彌に作る。定九「公賞東郭書、辭、曰、「彼、賓旅也。」乃賞犁彌。」の「賓旅」を杜注は「言彼與我若賓主相讓旅俱進退」とするが、陸燾『左傳附注』卷三「案犁彌與東郭書讓登、猶不相識、盖是異國之人、新爲齊臣者、故書謂之賓旅、猶后子日子干爲羈矣」に従うべきであろう。齊は外國人であった犁彌を大夫に登用しているものであり、魯の孔子登用と同様に、春秋後期の社會的流動性の激化を示すものとなる。

[2] 魯定公且以乘車好往 「乘車」は『公羊』 僖二十一に見え、「兵車」の對語であ

*93 龔元玠『論語客難』 君召使擯執圭二節

る*94。

[3] 孔子攝相事 「攝相事」は後文「由大司寇行攝相事」にも見え、魯世家は「行相事」・秦本紀は「行魯相事」に作り、齊世家・吳世家・晉世家・楚世家・魏世家・伍子胥列傳は「相魯」に作る。この「相」は「相邦」の意味だが、『左傳』定十「十年春、及齊平。夏、公會齊侯于祝其、實夾谷。孔丘相」は「孔丘相」に作り、杜預が「相會儀也」と注するように、「相」は「相禮」の意味である。これを「相邦」とすることは、『荀子』宥坐「孔子爲魯攝相、朝七日而誅少正卯。」に初見する*95。

[4] 臣聞有文事者必有武備 「有文事者必有武備」は『穀梁』定十「因是以見雖有文事、必有武備。孔子於頰谷之會見之矣」に見える。「古者諸侯出疆、必具官以從。請具左右司馬」は『春秋繁露』王道「古者諸侯出疆、必具左右、備一師、以備不虞」を踏まえたものであろう。

[5] 會齊侯夾谷 『穀梁』定十に據りつつ潤色したものである。

『穀梁』定十	孔子世家
頰谷之會、孔子相焉。兩君就壇、兩相相揖、	會齊侯夾谷、爲壇位、土階三等、以會遇之禮相見、揖讓而登。獻酬之禮畢、齊有司趨而進曰、「請奏四方之樂。」景公曰、「諾。」
齊人鼓譟而起、欲以執魯君。孔子歷階而上、不盡一等、而視歸乎齊侯、曰、「兩君合好、夷狄之民、何爲來爲。」命司馬止之。	於是旂旄羽袂矛戟劍撥鼓噪而至。孔子趨而進、歷階而登、不盡一等、舉袂而言曰、「吾兩君爲好會、夷狄之樂何爲於此。請命有司。」有司卻之、不去、則左右視晏子與景公。
齊侯逡巡而謝曰、「寡人之過也。」退而屬其二三大夫曰、「夫人率其君與之行古人之道、二三子獨率我而入夷狄之俗、何爲。」罷會、齊人	景公心忤、麾而去之。
	有頃、齊有司趨而進曰、「請奏宮中之樂。」景公曰、「諾。」

*94 『公羊』僖二十一「楚人使宜申來獻捷。此楚子也、其稱人何。貶。曷爲貶。爲執宋公貶。曷爲爲執宋公貶。宋公與楚子期以乘車之會、公子目夷諫曰、「楚、夷國也、疆而無義、請君以兵車之會往。」宋公曰、「不可。吾與之約以乘車之會、自我爲之、自我墮之、曰不可。」終以乘車之會往、楚人果伏兵車、執宋公以伐宋」。

*95 錢穆『先秦諸子繫年』14 孔子行攝相事誅魯大夫亂政者少正卯辨。

<p>使優施舞於魯君之幕下。孔子曰、「笑君者罪當死。」使司馬行法焉、首足異門而出。</p>	<p>優倡侏儒爲戲而前。孔子趨而進、歷階而登、不盡一等、曰、「匹夫而營惑諸侯者罪當誅。請命有司。」有司加法焉、手足異處。景公懼而動、知義不若、歸而大恐、告其群臣曰、「魯以君子之道輔其君、而子獨以夷狄之道教寡人、使得罪於魯君、爲之柰何。」有司進對曰、「君子有過則謝以質、小人有過則謝以文。君若悼之、則謝以質。」</p>
<p>齊人來歸鄆・讎・龜陰之田者、蓋爲此也。</p>	<p>於是齊侯乃歸所侵魯之鄆・汶陽・龜陰之田以謝過。</p>

『穀梁』は『左傳』定十

夏、公會齊侯於祝其、實夾谷。孔丘相、犁彌言於齊侯曰、「孔丘知禮而無勇、若使萊人以兵劫魯侯、必得志焉。」齊侯從之。孔丘以公退、曰、「士兵之。兩君合好、而裔夷之俘以兵亂之、非齊君所以命諸侯也。裔不謀夏、夷不亂華、俘不干盟、兵不偪好。於神爲不祥、於德爲愆義、於人爲失禮、君必不然。」齊侯聞之、遽辟之。將盟、齊人加於載書曰、「齊師出竟而不以甲車三百乘從我者、有如此盟。」孔丘使茲無還揖對、曰、「而不反我汶陽之田、吾以共命者、亦如之。」齊侯將享公、孔丘謂梁丘據曰、「齊・魯之故、吾子何不聞焉。事既成矣、而又享之、是勤執事也。且犧・象不出門、嘉樂不野合。饗而既具、是棄禮也。若其不具、用秕稗也。用秕稗、君辱。棄禮、名惡。子盍圖之。夫享、所以昭德也。不昭、不如其已也。」乃不果享。…齊人來歸鄆・讎・龜陰之田。

に據る。

『左傳』は、(1) 萊人の乱入・(2) 盟の締結・(3) 饗宴の拒絶の三つの場面から成る。(1) で齊は魯君を「劫」する。武力的な威嚇によって齊が「得志」する盟を強要しようとしたものである。ところが、『穀梁』は(2)を省き、(1)の「劫」を「執」に改める。『春秋經』僖五「晉人執虞公」に認められるように、國君の「執」は滅國を示唆する。一方で、『穀梁』は不用意にも「萊人」を「齊人」に改めているので、「夷狄之民」が意味不明となる。范甯注「兩君合會、以結親好、而齊人欲執魯君、此無禮之甚、故謂之夷狄之民」は弥縫的というよりない。ついで(3)については、おそらくは『左傳』の「君辱」に示唆を受け、「笑君者罪當死」を含む「使優施舞於魯君之幕下」の一節を

創作している。

孔子世家は、『穀梁』の(1)(3)の前にそれぞれ「四方之樂」「宮中之樂」を含む一節を挿入し、(3)に(1)の「孔子歷階而上、不盡一等」を加えて(1)(3)の形式を揃え、齊侯の「二三大夫」に対する叱責を(1)のあとから(3)のあとに移動して(1)(3)雙方に關わるものに變更している。(1)では「四方之樂」を加え「夷狄之民」を「夷狄之樂」に改めることで、『穀梁』の不具合を調整しているのである。一方で、(1)「欲以執魯君」を不用意に省いているので、齊の狼藉の目的がわからなくなっている。

孔子世家に先立つ部分について、齊世家

四十八年、與魯定公好會夾谷。犁鉏曰、「(a) 孔丘知禮而怯、請令萊人爲樂、因執魯君、可得志。」(b) 景公害孔丘相魯、懼其霸、故從犁鉏之計。(c) 方會、進萊樂、孔子歷階上、使有司執萊人斬之、以禮讓景公。景公慚、乃歸魯侵地以謝、而罷去。是歲、晏嬰卒。

の(a)は『左傳』と構文を同じくするものの、「執魯君」は『穀梁』に據り、「爲樂」および(c)の「萊樂」は孔子世家「四方之樂」の先驅である。(b)は孔子世家「齊大夫黎鉏言於景公曰、魯用孔丘、其勢危齊」と趣向を同じくする。(c)「孔子歷階上、使有司執萊人斬之」は『穀梁』の(1)(3)をまとめたような記述になっている。魯世家

十年、定公與齊景公會於夾谷、孔子行相事。齊欲襲魯君、孔子以禮歷階、誅齊淫樂、齊侯懼、乃止、歸魯侵地而謝過。

も同様に「孔子以禮歷階」は『穀梁』に據り、「淫樂」は孔子世家「四方之樂」の先驅となっている。

なお、『新語』辨惑

魯定公之時、與齊侯會於夾谷、孔子行相事。兩君升壇、兩相處下、兩相欲揖、君臣之禮、濟濟備焉。齊人鼓譟而起、欲執魯公。孔子歷階而上、不盡一等而立、謂齊侯曰、「兩君合好、以禮相率、以樂相化。臣聞嘉樂不野合、犧象之薦不下堂。夷狄之民何求爲。」命司馬請止之。定公曰、「諾。」齊侯逡巡而避席曰、「寡人之過。」退而自責大夫。罷會。齊人使優旃舞於魯公之幕下、傲戲、欲候魯君之際、以執定公。孔子歎曰、「君辱臣當死。」使司馬行法斬焉、首足異門而出。於是齊人懼然而恐、君臣易操、不安其故行、乃歸魯四邑之侵地、

は基本的に『穀梁』に據るが、下線部には『左傳』を參用している。

夾谷の會への晏嬰の出席は孔子世家にしか見えない。これは現行本に無い『晏子春秋』佚文に據るものらしい。一體、『公羊』は『春秋經』定十「夏、公會齊侯于頰谷」には傳を施さず、「齊人來歸運・謹・龜陰田」に「齊人曷爲來歸運・謹・龜陰田。孔子行乎季孫、三月不違、齊人爲是來歸之」とあるのみである。齊地で制作されたため、孔子が齊の非道を正す夾谷の會に言及することが憚られたのであろう。ここで注目されるのが何休の注

頰谷之會、齊侯作侏儒之樂、欲以執定公。孔子曰、「匹夫而熒惑於諸侯者誅」、於是誅侏儒、首足異處、齊侯大懼、曲節從教、得意故致也。

齊侯自頰谷會歸、謂晏子曰、「寡人或過於魯侯、如之何。」晏子曰、「君子謝過以質、小人謝過以文。齊嘗侵魯四邑、請皆還之。」歸濟西田不言來、此其言來者、已絕、魯不應復得、故從外來常文、與齊人來歸衛寶同、夫子雖欲不受、定公貪而受之、此違之驗。

であり、徐彥疏に「云頰谷之會至曲節從教、家語及晏子春秋文也」「注齊侯自頰谷至還之。○解云、皆晏子春秋及家語・孔子世家之文」とある。何休注は『晏子春秋』に由來し、下線部は孔子世家と表現が重なる。孔子世家が『晏子春秋』より引用したものであろう。したがって、晏嬰の出席も同じく『晏子春秋』に見えたものであったと思われる。

齊世家は夾谷の會の記述のあとに、「是歲、晏嬰卒」を置く。晏嬰は『左傳』では襄十七（前 556）～昭二十六（前 516）に見える。錢穆は『晏子春秋』外篇に「晏子沒、十有七年、景公飲諸大夫酒」とあり、齊景公は五十八年（哀五・前 490）卒なので、晏嬰は景公四十二年（定四・前 506）以前に卒していたとする^{*96}。齊世家も景公四十八年（定十・前 500）の前では『左傳』昭二十六を引用した「三十二年、彗星見。景公坐柏寢、嘆曰、「堂堂、誰有此乎。」群臣皆泣、晏子笑、公怒。…」が晏嬰が登場する最後であり、『左傳』に昭二十六以降、晏子が登場しないことは了解していたものと思われる。しかしながら、夾谷の會への晏嬰の出席を記す『晏子春秋』の記述に留意し、齊景公四十八年に晏嬰卒を置いたものであろう。

また、『春秋經』定十「夏、公會齊侯于夾谷」が『左傳』に見える「盟」を記さない

*96 錢穆『先秦諸子繫年』5〔附〕晏嬰卒年考。

ことにつき、杜預は「須齊歸汶陽田、乃當共齊命。於是孔子以公退、賤者終其事。要盟不潔、故略不書」と説明する。果たして『春秋經』定十二（前498）「冬十月癸亥、公會齊侯盟于黃。（注「無傳。結叛晉。」）」に「盟」が見え、ここで晉霸からの離脱が確定しているのである。

ここで當時の全中國的な政治史における齊魯講和の意味を確認しておく。

襄二十七（前546）の晉楚講和ののち、晉の従前の軍制は急速に解體した。昭十一（前531）の楚靈王の蔡併合を阻止し得なかったように、晉霸はすでに機能不全に陥っていた。定四（前506）、楚の壓迫を被った蔡の請援を受けて、晉は召陵に同盟國を會し、皐鼬に盟したが、結局、楚に對する軍事行動を中止してしまう。

この結果、同盟諸國の晉からの離反が相次いだ。定六（前504）、鄭が許を併合した。これは霸者體制における同盟内平和を侵犯するものであり、鄭の同盟離脱を意味する*97。定七（前503）には齊鄭・齊衛同盟が、定六（前502）には衛鄭同盟が成立する。宋も、定六（前504）にその使者樂祁犁を晉が抑留したことで、關係が事實上斷絶してしまい、定十四（前496）年には齊と會するに至っている。

魯は當初晉霸に残留し、定六（前504）には鄭に出兵、定七（前503）～定八（前502）には齊と交戦し、定八（前502）には衛に出兵したが、定十（前500）、齊との講和に轉じ、ついで定十一（前499）には鄭と盟し、定十二（前498）に齊と盟することで晉霸からの離脱が確定している。

齊は晉霸から離脱した中原諸國と同盟を結び、霸權の奪取を圖った。定九（前501）には衛とともに夷儀を攻め、晉と開戦した。齊が晉に侵攻する場合、魯が晉の側に參戦して腹背に敵を受けることは避けねばならない。齊においても魯との講和が必要だったのである。

齊魯講和の結果、齊は魯に「汶陽之田」と汎稱される「鄆・讙・龜陰之田」を返還しているが、このうち、讙は、『左傳正義』が指摘するように、定八「陽虎入于讙・陽關以叛」に見え、これらの田は陽虎が齊に亡命した際に帶同したものである。この事

*97 『春秋經』定六「六年春王正月癸亥、鄭游速帥師滅許、以許男斯歸」・『左傳』「六年春、鄭滅許、因楚敗也」。その後、『春秋經』哀元「楚子・陳侯・隨侯・許男圍蔡」・哀十三「夏、許男成卒。…葬許元公」によれば、許は再建されている。楚の援助によるものであろう。

實に示唆されるように、魯が晉霸を離脱して齊との講和に踏み切った決定的な動機となったのは、前年における陽虎の齊への亡命である。上掲『左傳』定九には陽虎が齊景公に魯への出兵を勧めたことが見える。齊との講和は陽虎の逆襲を防遏するためのものでもあった。

孔子が「相禮」を務めたことについて、全祖望は、孔子が卿であった證據とする*98。魯侯の朝の場合、經文は「公如×」とのみ記し、隨行者は『左傳』に記される。全祖望が指摘するように、三桓がほとんどだが、その一方で、『左傳』に隨行者が見えない事例や、さらに傳が無い事例もあるので、三桓の隨行が必須であったことは確認できない。逆に、昭十二の如晉では公子慤の隨行が見えるが、三桓は見えず、哀十二の會吳では、子服景伯の隨行が見えるが、やはり三桓は見えず、加えて、

大宰嚭召季康子、康子使子貢辭。大宰嚭曰、「國君道長、而大夫不出門、此何禮也。」と、季康子が隨行しなかったことを呉が問責している。また、哀二十四～哀二十五の如越でも、哀二十五「六月、公至自越。季康子・孟武伯逆於五梧」にうかがわれるように、三桓は隨行していない。

公子慤や子服景伯は經文に記されない以上、卿（上大夫）ではなく大夫（下大夫）であり、孔子もまた大夫身分で「相禮」をつとめたものとなる。

さらに臆測を逞しくすれば、三桓が夾谷の會に隨行せず、「相禮」を孔子に委ねたのは、三桓が傳統的に晉と親密であり、晉霸離脱を意味する齊との講和に出席することが憚られたためであろう。

●定十二（前498）五十四歳

定公十三年 [1] 夏、孔子言於定公曰、「臣無藏甲、大夫毋百雉之城。」使仲由爲季氏宰、將墮三都。於是叔孫氏先墮郕。季氏將墮費、公山不狃・叔孫輒率費人襲魯。公與三子入于季氏之宮、登武子之臺。費人攻之、弗克、入及公側。孔子命申句須・樂頎下伐之、

*98 全祖望『全謝山先生經史問答』卷六 / 論語問答「至於夾谷之相、則正孔子爲卿之證。春秋所重者莫如相、凡得相其君而行者、非卿不出、是以十二公之中、自僖而下、其相君者皆三家。文公三年如晉、則叔孫莊叔相、十三年如晉、則季文子相、成公四年如晉、亦季文子相、九年會於蒲、亦季文子相、十年朝王、則孟獻子相、襄公四年朝晉、亦孟獻子相、十年會鄭、則季武子相、二十八年如楚、則叔孫穆子相、昭公七年如楚、則孟僖子相、哀十七年會於蒙、則孟武伯相、皆卿也。魯之卿、非公室不得任、而是時以陽虎諸人之亂、孔子遂由庶姓當國、夾谷之會、三家方拱手以聽、孔子儼然得充其選」。

費人北。國人追之、敗諸姑蔑。二子奔齊、遂墮費。將墮成、公斂處父謂孟孫曰、「墮成、齊人必至于北門。且成、孟氏之保障、無成是無孟氏也。我將弗墮。」十二月、公圍成、弗克 [2]。

[1] 定公十三年 『春秋經』 定十二

夏、…叔孫州仇帥師墮郕。…季孫斯・仲孫何忌帥師墮費。…冬十月癸亥、公會齊侯盟于黃。…公至自黃。十有二月、公圍成。公至自圍成。

に對する『左傳』

十二年夏、…仲由爲季氏宰、將墮三都、於是叔孫氏墮郕。季氏將墮費、公山不狃・叔孫輒帥費人以襲魯。公與三子入于季氏之宮、登武子之臺。費人攻之、弗克。入及公側、仲尼命申句須・樂頎下、伐之、費人北。國人追之、敗諸姑蔑。二子奔齊、遂墮費。將墮成、公斂處父謂孟孫、「墮成、齊人必至于北門。且成、孟氏之保障也。無成、是無孟氏也。子僞不知、我將不墜。」冬十二月、公圍成、弗克。

に據るが、「孔子言於定公曰、「臣無藏甲、大夫毋百雉之城。」」は、『公羊』定十二「孔子行乎季孫、三月不違、曰、「家不藏甲、邑無百雉之城。」」に據る。

孔子世家は「定公十三年」に作り、ついで「定公十四年」に孔子去魯を繋げるが、いずれも「定公十二年」の誤りである。まずは編集の最初の段階で、

定公十二年夏、孔子言於定公曰、…

定公十二年、由大司寇行攝相事、…

の如く、原資料の異なる二つの記述に同じく「定公十二年」の年次が附されていた。ところが、轉寫の過程でまずは上の「定公十二年」を「定公十三年」に誤り、それに牽引されて下の「十二年」が「十四年」に改められ、さらに「孔子年五十六」が加えられたものであろう。「定公十四年」以下の孔子の治績に關する記述は、本來的には、定九～定十二の間に置かれるべきものである。

果たして『史記』の他の部分では、孔子世家「定公十三年」「定公十四年」の記述を
(定公)十二年、使仲由毀三桓城、收其甲兵。孟氏不肯墮城、伐之、不克而止。季桓子受齊女樂、孔子去。(魯世家)

十二 齊來歸女樂、季桓子受之、孔子行。(魯表)

(景公)五十 遺魯女樂。(齊表)

と、正しく定十二に繋げている。

ちなみに、『公羊』定十二の何休注

邠、叔孫氏所食邑。費、季氏所食邑。二大夫宰吏數叛、患之、以問孔子、孔子曰、「陪臣執國命、采長數叛者、坐邑有城池之固、家有甲兵之藏故也。」季氏說其言而墮之。故君子時然後言、人不厭其言、書者、善定公任大聖、復古制、弱臣勢也。不書去甲者、舉墮城爲重。

は、孔子の發言を季桓子に對するものと解する。孔子世家が定公に對するものと解するのは、まずは定公が成を親征していることを根據とするものであろう。

また、「百雉」は、

故制國不過千乘、都城不過百雉、家富不過百乘。以此坊民、諸侯猶有畔者。（『禮記』坊記）

祭仲曰、都城過百雉、國之害也。（『左傳』隱元）

にすでに見える。

[2] 墮三都 魯世家「十二年、使仲由毀三桓城、收其甲兵。孟氏不肯墮城、伐之、不克而止」にも見える。「三都」は季氏の費・叔孫氏の邠・孟氏の成である。「墮成、齊人必至于北門。且成、孟氏之保障也」とあるように、三桓の「保障」であり、魯の對齊防衛の據點であった。三桓は「三都」に邑宰を派遣したが、世族宗主と家臣の主従關係は人格的關係に支えられていたため、勢い不安定であった。

すでに昭十二（前 530）～昭十四（前 528）に南蒯が費を以て叛したことがあったが*99、この時點では、定十（前 500）に侯犯による邠の叛が平定されたばかりであ

*99 『左傳』昭十二「季平子立、而不禮於南蒯。南蒯謂子仲、「吾出季氏、而歸其室於公、子更其位、我以費爲公臣。」子仲許之。南蒯語叔仲穆子、且告之故。…故叔仲小・南蒯・公子慙謀季氏。慙告公、而遂從公如晉。南蒯懼不克、以費叛如齊。子仲還、及衛、聞亂、逃介而先。及郊、聞費叛、遂奔齊」・昭十三「費人叛南氏」・昭十四「南蒯之將叛也、盟費人。司徒老祁・慮癸僞廢疾、使請於南蒯曰、「臣願受盟而疾興、若以君靈不死、請待閒而盟。」許之。二子因民之欲叛也、請朝眾而盟。遂劫南蒯曰、「群臣不忘其君、畏子以及今、三年聽命矣。子若弗圖、費人不忍其君、將不能畏子矣。子何所不逞欲。請送子。」請期五日。遂奔齊。侍飲酒於景公。公曰、「叛夫。」對曰、「臣欲張公室也。」子韓皙曰、「家臣而欲張公室、罪莫大焉。」司徒老祁・慮癸來歸費、齊侯使鮑文子致之」。ちなみに『左傳』襄七「南遺爲費宰。叔仲昭伯爲隧正、欲善季氏、而求媚於南遺。謂遺、「請城費、吾多與而役。」故季氏城費」には南蒯の父・南遺が費宰であったことが見える。南遺・南蒯は費宰を世襲していたのである。

り*100、さらに陽虎與黨の公山不狝らが定八（前 502）以來、費に據っていた。ここで「墮三都」が企圖されたのは、何より費の陽虎與黨の排除を志向したものだが、費を墮するのみでは季氏ばかりが「保障」を失うことになるので、あわせて郕・成をも墮することになったものであろう。三都は對齊防衛の據點であったので、逆にこれらが叛した場合は、齊の少なくとも消極的な支持を期待できた。一聯の三都の叛で齊への歸屬を圖る、あるいは叛の失敗後、齊に亡命するといった状況はそのことを傍證する。定十に齊魯講和が成立したことは、三都の齊への期待を最小限に減殺することとなった。

まずは叔孫武叔が郕を墮した。費人を率いて來寇した公山不狝・叔孫輒を撃退したのち、季桓子・孟懿子が費を墮した。『論語』

季氏使閔子騫爲費宰。閔子騫曰、「善爲我辭焉。如有復我者、則吾必在汶上矣。」

（雍也）

子路使子羔爲費宰*101。子曰、「賊夫人之子。」子路曰、「有民人焉、有社稷焉。何

*100 『左傳』定十「初、叔孫成子欲立武叔、公若藐固諫、曰、「不可。」成子立之而卒。公南使賊射之、不能殺。公南爲馬正、使公若爲郕宰。武叔既定、使郕馬正侯犯殺公若、弗能。其圉人曰、「吾以劍過朝、公若必曰、誰之劍也。吾稱子以告、必觀之。吾僞固而授之末、則可殺也。」使如之。公若曰、「爾欲吳王我乎。」遂殺公若。侯犯以郕叛、武叔・懿子圍郕、弗克。秋、二子及齊師復圍郕、弗克。叔孫謂郕工師駟赤曰、「郕非唯叔孫氏之憂、社稷之患也。將若之何。」對曰、「臣之業、在揚水卒章之四言矣。」叔孫稽首。駟赤謂侯犯曰、「居齊・魯之際而無事、必不可矣。子盍求事於齊以臨民。不然、將叛。」侯犯從之。齊使至、駟赤與郕人爲之宣言於郕中曰、「侯犯將以郕易于齊、齊人將遷郕民。」眾兇懼。駟赤謂侯犯曰、「眾言異矣。子不如易于齊、與其死也、猶是郕也、而得紓焉、何必此。齊人欲以此偪魯、必倍與子地。且盍多舍甲於子之門以備不虞。」侯犯曰、「諾。」乃多舍甲焉。侯犯請易于齊、齊有司觀郕、將至、駟赤使周走呼曰、「齊師至矣。」郕人大駭、介侯犯之門甲、以圍侯犯、駟赤將射之、侯犯止之、曰、「謀免我。」侯犯請行、許之。駟赤先如宿、侯犯殿、每出一門、郕人閉之。及郭門、止之、曰、「子以叔孫氏之甲出、有司若誅之、群臣懼死。」駟赤曰、「叔孫氏之甲有物、吾未敢以出。」犯謂駟赤曰、「子止而與之數。」駟赤止、而納魯人。侯犯奔齊、齊人乃致郕。

*101 仲尼弟子列傳は「子路使子羔爲費宰」を「子路使子羔爲費郕宰」に作る。『韓非子』外儲說右上「季孫相魯、子路爲郕令。魯以五月起眾爲長溝、當此之爲、子路以其私秩粟爲漿飯、要作溝者於五父之衢而餐之。孔子聞之、使子貢往覆其飯、擊毀其器、曰、「魯君有民、子奚爲乃餐之。」子路佛然怒、攘肱而入請曰、「夫子疾由之爲仁義乎。所學於夫子者仁義也、仁義者、與天下共其所有而同其利者也。今以由之秩粟而餐民、不可何也。」孔子曰、「由之野也。吾以女知之、女徒未及也、女故如是之不知禮也。女之餐之、爲愛之也。夫禮、天子愛天下、諸侯愛境內、大夫愛官職、士愛其家、過其所愛曰侵。今魯君有民而子擅愛之、是子侵也、不亦誣乎。」言未卒、而季孫使者至、讓曰、「肥也起民而使之、先生使弟子令徒役而餐之、將奪肥之民耶。」孔子駕而去魯。以孔子之賢、而季孫非魯君也、以人臣之資、假人主之術、蚤禁於未形、而子路不得行其

必讀書、然後爲學。」子曰、「是故惡夫佞者。」（先進）

は公山不狃が亡命したのち、孔子の弟子が費宰に任ぜられたことを伝える。仲尼弟子列傳「仲由字子路、卞人也。少孔子九歳」「閔損字子騫。少孔子十五歳」「高柴字子羔。少孔子三十歳」によれば、子路は四十五歳、閔子騫は三十九歳^{*102}、子羔は二十四歳である。

費宰のほか、以下の事例は、孔子が魯定公に仕えた定九～定十二の間に比定される。まず『論語』子路に

仲弓爲季氏宰、問政。子曰、「先有司、赦小過、舉賢才。」曰、「焉知賢才而舉之。」曰、「舉爾所知。爾所不知、人其舍諸。」

とあり、上掲上博楚簡『仲弓』は「季桓子使仲弓爲宰」に作る。『史記索隱』仲尼弟子列傳「家語云、伯牛之宗族、少孔子二十九歳」によれば仲弓は定十二には二十五歳である。子路に加えて季氏の宰に任ぜられたのであり、季氏に複数の宰があったことがわかる。

また、『呂氏春秋』察賢に

宓子賤治單父、彈鳴琴、身不下堂而單父治。巫馬期以星出、以星入、日夜不居、以身親之、而單父亦治。巫馬期間其故於宓子。宓子曰、「我之謂任人、子之謂任力。任力者故勞、任人者故逸。」宓子則君子矣、逸四肢、全耳目、平心氣、而百官以治義矣、任其數而已矣。巫馬期則不然、弊生事精、勞手足、煩教詔、雖治猶未至也。とある。仲尼弟子列傳「宓不齊字子賤。少孔子三十歳」「巫馬施字子旗。少孔子三十歳」によれば、宓子賤・巫馬施ともに定十二には二十四歳である。仲尼弟子列傳には同じく宓子賤の單父統治について、

子賤爲單父宰、反命於孔子、曰、「此國有賢不齊者五人、教不齊所以治者。」孔子曰、「惜哉不齊所治者小、所治者大則庶幾矣。」

とあり、『韓詩外傳』卷八

私恵、而害不得生、況人主乎」では、子路が郟令をつとめたとある。季康子（季孫肥）・孔子去魯など誤りが目立つが、孔門が郟宰をもつとめたことが傳承されていた模様である。

*102 『論語』先進「魯人爲長府。閔子騫曰、「仍舊貫、如之何。何必改作。」子曰、「夫人不言、言必有中。」」の「長府」は『左傳』昭二十五に見える。時に閔子騫は二十歳であり、すでに孔子の門下にあったものであろう。

子賤治單父、其民附。孔子曰、「告丘之所以治之者。」對曰、「不齊時發倉廩、振困窮、補不足。」孔子曰、「是小人附耳、未也。」對曰、「賞有能、招賢才、退不肖。」孔子曰、「是士附耳、未也。」對曰、「所父事者三人、所兄事者五人、所友者十有二人、所師者一人。」孔子曰、「所父事者三人、足以教孝矣。所兄事者五人、足以教弟矣。所友者十有二人、足以祛壅蔽矣。所師者一人、足以慮無失策、舉無敗功矣。昔者堯舜清微其身、以聽觀天下、務來賢人。夫舉賢者、百福之宗也、而神明之主也。惜乎不齊之所爲者小也。爲之大功、乃與堯舜參矣。」詩曰、「愷悌君子、民之父母。」子賤其似之矣。

に據る。

このように、費・郈を墮した時点で、孔子は司寇として魯定公に仕え、子路・仲弓は季桓子の家宰を、子羔・宓子賤・巫馬施などが邑宰をつとめていた。さらに注目されるのは、孔子が仲弓に「舉賢才」と教示していることである。孔子はのちに武城宰となった子游に「女得人焉爾乎」（『論語』雍也）と問うている。孔門子弟に推舉されたものもまた孔門の與黨となろう。このように孔門が魯の統治機構に浸透しつつあった。かれらは仕官していても同時に「孔丘之徒」（『論語』微子）であり、後掲の冉有に對する孔子の詰問にうかがえるように、孔子は師弟關係という私的な人的結合關係を通じて、仕官した弟子に自らの意向を強いることが可能であった。『論語』の記述から孔子の政治的理想を復元し、墮三都に成功したのちの推移を想像することは可能だが、ここでは立ち入らない。

ところが、成を墮することは結局失敗した。費・郈はすでに叛しており、成もまた叛する潜在的可能性を有していた。實際に、哀十四（前481）～哀十五（前480）には成宰・公孫宿（公孫成）が叛している*103。しかしながら、この時点で成を墮する根據は、

*103 『左傳』哀十四「初、孟孺子洩將圉馬於成、成宰公孫宿不受、曰、「孟孫爲成之病、不圉馬焉。」孺子怒、襲成、從者不得入、乃反。成有司使、孺子鞭之。秋八月辛丑、孟懿子卒、成人奔喪、弗內。袒免、哭于衢、聽共、弗許。懼、不歸。」哀十五「十五年春、成叛于齊。武伯伐成、不克、遂城輪。…冬、及齊平。子服景伯如齊、子贛爲介、見公孫成、曰、「人皆臣人、而有背人之心、況齊人雖爲子役、其有不貳乎。子、周公之孫也、多饗大利、猶思不義。利不可得、而喪宗國、將焉用之。」成曰、「善哉。吾不早聞命。」陳成子館客、曰、「寡君使恆告曰、寡人願事君如事衛君。」景伯揖子贛而進之、對曰、「寡君之願也。昔晉人伐衛、齊爲衛故、伐晉冠氏、喪車五百。因與衛地、自濟以西、漒・媚・杏以南、書社五百。吳人加敝邑以亂、齊因其病、取謹

相對的に乏しかったといわざるを得ない。何より成宰・公斂處父は陽虎の亂の平定に功績があった。公斂處父はあらかじめ孟懿子と通謀し、定公みずから成を圍んだが、成を墮することはできなかった。かくして「墮三都」は失敗に終わったのである。

この結果、「墮三都」を提起した子路に対する批判が高まった。『論語』憲問

公伯寮愬子路於季孫。子服景伯以告、曰、「夫子固有惑志於公伯寮、吾力猶能肆諸市朝。」子曰、「道之將行也與。命也。道之將廢也與。命也。公伯寮其如命何。」

は、朱熹が論ずるようにこの時の逸話であろう*104。

定公十四年、孔子年五十六、由大司寇行攝相事、有喜色。門人曰、「聞君子禍至不懼、福至不喜。」孔子曰、「有是言也。不曰樂其以責下人乎。」於是誅魯大夫亂政者少正卯 [3]。與聞國政三月 [4]、粥羔豚者弗飾賈 [5]。男女行者別於塗 [6]。塗不拾遺。四方之客至乎邑者不求有司、皆予之以歸 [7]。齊人聞而懼、曰、「孔子爲政必霸、霸則吾地近焉、我之爲先并矣。盍致地焉。」黎鉏曰、「請先嘗沮之。沮之而不可則致地、庸遲乎。」於是選齊國中女子好者八十人、皆衣文衣而舞康樂、文馬三十駟、遺魯君。陳女樂文馬於魯城南高門外、季桓子微服往觀再三、將受、乃語魯君爲周道游、往觀終日、怠於政事。子路曰、「夫子可以行矣。」孔子曰、「魯今且郊、如致膳乎大夫、則吾猶可以止。」桓子卒受齊女樂、三日不聽政。郊、又不致膳俎於大夫。孔子遂行 [8]、宿乎屯。而師已送、曰、「夫子則非罪。」孔子曰、「吾歌可夫。」歌曰、「彼婦之口、可以出走。彼婦之調、可以死敗。蓋優哉游哉、維以卒歲。」師已反、桓子曰、「孔子亦何言。」師已以實告。桓子喟然歎曰、「夫子罪我以群婢故也夫。」 [9]

[3] 由大司寇行攝相事 「由大司寇行攝相事、…於是誅魯大夫亂政者少正卯」は、『荀子』宥坐

孔子爲魯攝相、朝七日而誅少正卯。門人進問曰、「夫少正卯魯之聞人也、夫子爲政而始誅之、得無失乎。」孔子曰、「居、吾語女其故。人有惡者五、而盜竊不與焉。一曰、心達而險。二曰、行辟而堅。三曰、言偽而辯。四曰、記醜而博。五曰、順非而澤。此五者有一於人、則不得免於君子之誅、而少正卯兼有之。故居處足以聚

與聞。寡君是以寒心。若得視衛君之事君也、則固所願也。」成子病之、乃歸成。公孫宿以其兵甲入于嬴。

*104 『四書或問』卷十九 / 論語 / 憲問第十四「此墮三都、出藏甲之時也」。

徒成群、言談足飾邪營眾、強足以反是獨立、此小人之桀雄也、不可不誅也。是以湯誅尹諧、文王誅潘止、周公誅管叔、太公誅華仕、管仲誅付里乙、子產誅鄧析史付、此七子者、皆異世同心、不可不誅也。詩曰、憂心悄悄、慍於群小。小人成群、斯足憂也。」

に據る。少正卯を「大夫」とするのは、あるいは、『左傳』襄二十二「鄭人使少正公孫僑」に子產の官職として「少正」が見えるからかもしれない。

下線部「有喜色、…」は孔子世家独自の記述である。

[4] 與聞國政三月 「三月」は上掲『公羊』定十・定十二「孔子行乎季孫、三月不違」にも見える。

[5] 粥羔豚者弗飾賈 『荀子』儒效「仲尼將爲司寇、沈猶氏不敢朝飲其羊、公慎氏出其妻、慎潰氏踰境而徙、魯之粥牛馬者不豫賈、脩正以待之也。居於闕黨、闕黨之子弟罔不分、有親者取多、孝弟以化之也」。

[6] 男女行者別於塗 『呂氏春秋』樂成「孔子始用於魯。魯人驚誦之曰、「靡裘而鞞、投之無戾。鞞而靡裘、投之無郵。」用三年、男子行乎塗右、女子行乎塗左、財物之遺者、民莫之舉。大智之用、固難踰也」。

[7] 塗不拾遺 『韓非子』內儲說下「仲尼爲政於魯、道不拾遺」。下線部は孔子世家独自の記述である*105。

[8] 齊人聞而懼 『左傳』は定十二の「墮三都」ののち、後述の如く哀三に孔子が陳にあり、哀十一に衛から魯に歸國したことを記すのみである。孔子世家の去魯期間の年次は『左傳』に見えないものは全て『史記』に初見するものばかりである。孔子世家以外の部分に見える年次は相互には矛盾しないが、孔子世家とは矛盾するものが少なからずある。

*105 渡邊卓『古代中國思想の研究』（創文社、1973）が指摘するように、『淮南子』覽冥訓「昔者、黃帝治天下、而力牧・太山稽輔之、以治日月之行律、治陰陽之氣、節四時之度、正律曆之數、別男女、異雌雄、明上下、等貴賤、使強不掩弱、眾不暴寡、人民保命而不夭、歲時孰而不凶、百官正而無私、上下調而無尤、法令明而不闇、輔佐公而不阿、田者不侵畔、漁者不爭隈、道不拾遺、市不豫賈、城郭不關、邑無盜賊、鄙旅之人相讓以財、狗彘吐菽粟於路而無忿爭之心、於是日月精明、星辰不失其行、風雨時節、五穀登孰、虎狼不妄噬、鸞鳥不妄搏、鳳皇翔於庭、麒麟游於郊、青龍進駕、飛黃伏皐、諸北・僂耳之國莫不獻其貢職」に似る。

		孔子世家以外	孔子世家
497	定十三	衛 〈①一年〉	衛 〈①一年〉
496	定十四	鄭 陳 〈①三年〉	曹 宋 鄭 陳 〈①三年〉
495	定十五		
494	哀元		
493	哀二	蔡 (衛) 〈②一年〉	衛 〈②一年〉 陳 (②三年)
492	哀三	宋 (陳) (②八年)	
491	哀四		蔡 (三年)
490	哀五		
489	哀六		楚 衛 (③六年)
488	哀七		
487	哀八		
486	哀九		
485	哀十	衛 (③二年)	
484	哀十一	魯	魯

この事實は、まずは孔子世家以外の部分が編纂される際に用いられた孔子去魯の年代觀が、孔子世家編纂に當たって變更されたことを示す。年代觀の變更は、それらが本來具體的な史料の根據をもたず、『史記』の「解釋」によって決定されたものであることを示唆し、變更されなかった年次もより一般的には『史記』の創作である可能性が大きい。こうした見通しのもと、以下では孔子去魯の年代觀が創作された過程を考證し、ついで、ここに提示された孔子去魯が、『左傳』の記述する同時代の状況に適合するか否かということを検討することとする。

孔子去魯の原因に関するより古い記述としては、

齊人歸女樂、季桓子受之。三日不朝、孔子行。(『論語』微子)

孔子爲魯司寇、不用、從而祭、燔肉不至、不稅冕而行。不知者以爲爲肉也。其知者以爲爲無禮也。乃孔子則欲以微罪行、不欲爲苟去。君子之所爲、眾人固不識也。

(『孟子』告子下)

などがあり、女樂は、魯世家「季桓子受齊女樂、孔子去」・魯表「十二 齊來歸女樂、季桓子受之、孔子行」・齊表「五十 遺魯女樂」にも見える。

孔子世家は去魯の原因として「女樂」「燔肉不至」を用い、さらに「女樂」の前提として孔子の治績に關する記述をその前に置くのでわかりにくくなっているが、去魯を定十二に繋げることに示唆されるように、「墮三都」の失敗をより本質的な原因と認めていることは確實である。すなわち、「墮三都」の失敗によって季桓子との關係が悪化し、季桓子の「女樂」への耽溺、「燔肉不至」によって去魯に至ったという認識である。『左傳』『論語』『孟子』といった前4世紀以前の材料に基づき、もっとも確度の高いシナリオとってよい。

孔子世家には、「女樂」「燔肉不至」について、『論語』『孟子』に見えない記述が加わっている。女樂については、『韓非子』内儲説下に、

仲尼爲政於魯、道不拾遺、齊景公患之、梨且謂景公曰、「去仲尼猶吹毛耳。君何不迎之以重祿高位、遺哀公女樂以驕榮其意。哀公新樂之、必怠於政、仲尼必諫、諫必輕絶於魯。」景公曰、「善。」乃令梨且以女樂二八遺哀公、哀公樂之、果怠於政、仲尼諫、不聽、去而之楚。

とある。定公を哀公に誤ってはいるが、孔子世家は、このように前3世紀以降に潤色された材料を用いたものである。「郊」は、封禪書「三年一郊。秦以冬十月爲歲首、故常以十月上宿郊見」では、顛頊曆十月、周曆十二月に行われる。下文「維以卒歲」にうかがわれるように、孔子世家は、去魯を定公十二年の年末に繋げていたことになる。孔子は哀十一（前484）に歸國するが、後文に「孔子之去魯凡十四歲而反乎魯」とあり、去魯を定十三（前497）から数えている*106。

[9] 宿乎屯 孔子世家独自の記述である。師己は『左傳』昭二十五

「有鸛鶴來巢」、書所無也。師己曰、「異哉。吾聞文、成之世、童謠有之、曰、鸛之鶴之、公出辱之。鸛鶴之羽、公在外野、往饋之馬。鸛鶴踈踈、公在乾侯、微褻與襦。鸛鶴之巢、遠哉遙遙、稠父喪勞、宋父以驕。鸛鶴鸛鶴、往歌來哭。童謠有是。今鸛鶴來巢、其將及乎。」

*106 錢穆『先秦諸子繫年』15孔子去魯適衛考。

およびこれを引く魯世家「二十五年春、鳩鵲來巢。師己曰、「文成之世童謠曰、鳩鵲來巢、公在乾侯。鳩鵲入處、公在外野」に見える。

「桓子喟然歎曰」は、下文「季桓子病、輦而見魯城、喟然歎曰」に、「夫子罪我以群婢故也夫」は下文「以吾獲罪於孔子」に呼應する。

『左傳』に見える大夫の出國は、政争に敗れた結果の追放あるいは逃亡であることが一般的だが、孔子の去魯は自發的な退去として記述されている。「吾黨之小子」（『論語』公冶長）と稱される孔門が一貫して魯にとどまっていたことや、孔子が折々に歸國を志向しえたことは、孔子が魯定公や季桓子に罪を得て追放され、あるいは逃亡したものであることを明示する。『莊子』雜篇／讓王「殺夫子者無罪、藉夫子者無禁」は實態にそぐわない。まずは、墮三都の失敗、子路への批判によって季桓子との関係が悪化し、次いで季桓子の失政の結果、かねて標榜していた「所謂大臣者、以道事君、不可則止」を實踐し、他國への仕官を試みたものに他ならない。

●定十三（前 497）五十五歳

孔子遂適衛 [1]、主於子路妻兄顔濁鄒家 [2]。衛靈公問孔子、「居魯得祿幾何。」對曰、「奉粟六萬。」衛人亦致粟六萬 [3]。居頃之、或譖孔子於衛靈公。靈公使公孫余假一出一入。孔子恐獲罪焉、居十月、去衛。將適陳、過匡、顔刻爲僕、以其策指之曰、「昔吾入此、由彼缺也。」匡人聞之、以爲魯之陽虎。陽虎嘗暴匡人、匡人於是遂止孔子。孔子狀類陽虎、拘焉五日 [4]、顔淵後、子曰、「吾以汝爲死矣。」顔淵曰、「子在、回何敢死。」 [5] 匡人拘孔子益急、弟子懼。孔子曰、「文王既沒、文不在茲乎。天之將喪斯文也、後死者不得與于斯文也。天之未喪斯文也、匡人其如予何。」 [6] 孔子使從者爲甯武子臣於衛、然後得去。去即過蒲。月餘、反乎衛、主蘧伯玉家 [7]。靈公夫人有南子者、使人謂孔子曰、「四方之君子不辱欲與寡君爲兄弟者、必見寡小君。寡小君願見。」孔子辭謝、不得已而見之。夫人在絳帷中。孔子入門、北面稽首。夫人自帷中再拜、環珮玉聲璆然。孔子曰、「吾鄉爲弗見、見之禮答焉。」子路不說。孔子矢之曰、「予所不者、天厭之。天厭之。」 [8] 居衛月餘、靈公與夫人同車、宦者雍渠參乘、出、使孔子爲次乘、招搖市過之 [9]。孔子曰、「吾未見好德如好色者也。」 [10] 於是醜之、去衛、過曹 [11]。是歲、魯定公卒 [12]。

[1] 孔子遂適衛 孔子去魯は、『孟子』萬章上

孔子不悅於魯衛、遭宋桓司馬將要而殺之、微服而過宋。是時孔子當阨、主司城貞子、爲陳侯周臣。

の魯→衛→宋→陳に基本的な枠組みを求めたものである。

上述の如く、他ならぬ孔子世家の上文「已而去魯、斥乎齊、逐乎宋衛、困於陳蔡之間、於是反魯」は適齊を去魯の最初に置いている。また、

昔者夫子失魯司寇、將之荊、蓋先之以子夏、又申之以冉有、以斯知不欲速貧也。
（『禮記』檀弓上）

仲尼爲政於魯、道不拾遺、齊景公患之、梨且謂景公曰、「去仲尼猶吹毛耳。君何不迎之以重祿高位、遺哀公女樂以驕榮其意。哀公新樂之、必怠於政、仲尼必諫、諫必輕絕於魯。」景公曰、「善。」乃令梨且以女樂二八遺哀公、哀公樂之、果怠於政、仲尼諫、不聽、去而之楚。（『韓非子』內儲說下）

は、孔子が魯を去ってただちに楚に向かったとする。去魯の推移が孔子世家とは全く異なるものであった可能性ももとより否定できない。

[2] 主於子路妻兄顔濁鄒家 『孟子』萬章上

於衛主顔讎由。彌子之妻與子路之妻、兄弟也。彌子謂子路曰、「孔子主我、衛卿可得也。」子路以告、孔子曰、「有命。」孔子進以禮、退以義、得之不得曰「有命」。

（注「顔讎由、衛賢大夫、孔子以爲主。彌子、彌子瑕也、因子路欲爲孔子主、孔子知彌子幸於靈、不以正道、故不納之、而歸於命也。孔子進以禮、退以義、必曰有天命也。」）

に據る。顔濁鄒は、下文「如顔濁鄒之徒、頗受業者甚眾」にも見えるが、『左傳』哀二十四「知伯親禽顔庚（注「顔庚、齊大夫顔涿聚。」）」には齊人として見え、顔讎由とは別人である*107。

顔濁鄒は、『呂氏春秋』尊師「顔涿聚、梁父之大盜也。學於孔子」・『淮南子』汜論訓「夫顔喙聚、梁父之大盜也、而爲齊忠臣」にも見え、『呂氏春秋』では孔子に學ぶとあり、そのため顔讎由と混同したものであろう。

[3] 衛靈公問孔子 衛世家「三十八年、孔子來、祿之如魯。後有隙、孔子去。後復來」・衛表「三十八 孔子來、祿之如魯」にも見えるが、他の文獻には見えない。「粟六萬」

*107 梁玉繩『史記志疑』卷二十五 / 孔子世家第十七。

は『史記索隱』「若六萬石似太多、當是六萬斗、亦與漢之秩祿不同」によれば6000斛となる。宰であった原憲の俸祿を900斛とする上掲『論語』雍也の記述と整合する。

[4] 過匡 顔刻につき、仲尼弟子列傳「顔高字子驕」を『孔子家語』七十二弟子解は顔刻、魯人、字子驕、少孔子五十歳。孔子適衛、子驕爲僕、衛靈公與夫人南子同車出、而令宦者雍梁參乘、使孔子爲次乘、遊過市、孔子恥之。顔刻曰、「夫子何恥之。」孔子曰、「詩云、觀爾新婚、以慰我心。」

に作る。上述の如く、顔高は『左傳』定八（前502）に對齊戰への從軍が見える。「少孔子五十歳」であれば、定九（前501）生、定十三には五歳であり、孔子亡命に隨從しえない。「五十」は『家語』轉寫の過程で誤寫されたものであろう。

過匡については、『莊子』外篇 / 秋水

孔子游於匡、宋人圍之數匝、而弦歌不輟。子路入見、曰、「何夫子之娛也。」孔子曰、「來、吾語女。我諱窮久矣、而不免、命也。求通久矣、而不得、時也。當堯、舜而天下無窮人、非知得也。當桀、紂而天下無通人、非知失也、時勢適然。夫水行不避蛟龍者、漁父之勇也。陸行不避兕虎者、獵夫之勇也。白刃交於前、視死若生者、烈士之勇也。知窮之有命、知通之有時、臨大難而不懼者、聖人之勇也。由處矣。吾命有所制矣。」無幾何、將甲者進、辭曰、「以爲陽虎也、故圍之。今非也、請辭而退。」

に重なる部分がある。

また「拘焉五日」「匡人拘孔子益急」と「拘」が二見するのは、『荀子』賦・堯問「孔子拘匡」に據るものであろう。

匡は『春秋經』僖十五に初見し、衛→陳を結ぶ直線にほど近い*108。その後、衛・鄭の間で争奪されている*109。「陽虎嘗暴匡人」は、『左傳』定六（前504）

二月、公侵鄭、取匡、爲晉討鄭之伐胥靡也。往不假道於衛。及還、陽虎使季、孟

*108 『春秋經』僖十五「三月、公會齊侯・宋公・陳侯・衛侯・鄭伯・許男・曹伯盟于牡丘、遂次于匡。（注「匡、衛地。在陳留長垣縣西南」）。

*109 『左傳』文元「衛成公不朝、使孔達侵鄭、伐縣・訾及匡」・文八「春、晉侯使解揚歸匡、戚之田于衛、且復致公婿池之封、自申至于虎牢之竟」。文元の匡につき杜預は「匡、在潁川新汲縣東北」と注するが、程發軔『春秋左氏傳地名圖考』（廣文書局、1967）が指摘するように、僖十五の匡に當たる。

自南門入、出自東門、舍於豚澤。衛侯怒、使彌子瑕追之。

を踏まえたものであろう*110。『莊子』が宋の邑とするのは、桓魋の難と混同したものである*111。

[5] 顔淵後 『論語』先進「子畏於匡、顔淵後。子曰、「吾以女爲死矣。」曰、「子在、回何敢死。」」。

[6] 文王既沒 『論語』子罕「子畏於匡。曰、「文王既沒、文不在茲乎。天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也、匡人其如予何。」」。

[7] 孔子使從者爲甯武子臣於衛 甯武子は『論語』公冶長

子曰、「甯武子邦有道則知、邦無道則愚。其知可及也、其愚不可及也。」

に見えるものの、『左傳』僖二十八（前632）に初見する人物であり、「孔子使從者爲甯武子臣」は誤りといわざるを得ない。『左傳』哀四（前491）「秋七月、齊陳乞・弦施・衛甯跪救范氏」には甯跪が見える。甯氏に屬する別の人物が甯武子として誤傳されたものであろう。

「去即過蒲」の「過蒲」は、下文哀二「過蒲、會公叔氏以蒲畔、蒲人止孔子」にも見える。蒲は『春秋經』桓三に初見し、匡からほど近い*112。公叔氏については、『左傳』定十四に公叔戌の追放が見える*113。孔子世家はあるいは當初、「過蒲、會公叔氏以蒲畔、蒲人止孔子」をこの年次に繋げていたが、定十三のうちには孔子がすでに衛を去っているところから不適當と見なし、哀二に移した。ところが「過蒲」のみ消し忘れ、ついでこれが本來「過蒲、會公叔氏以蒲畔、蒲人止孔子」の一節であったことが失念され、「過蒲」だけでは落ち着かぬことから「去即」が附加された、といった推移があったものかもしれない。

*110 程發軔『春秋左氏傳地名圖考』は文元杜注「匡、在潁川新汲縣東北」の匡とするが、魯軍が往復とも衛を經由しており、僖十五の匡に當たることは明らかである。

*111 錢穆『先秦諸子繫年』17孔子畏匡乃過蒲一事之誤傳與陽虎無涉辨。

*112 『春秋經』桓三「夏、齊侯・衛侯胥命于蒲（注「蒲、衛地。在陳留長垣縣西南。」）」。

*113 『左傳』定十三「初、衛公叔文子朝、而請享靈公。退、見史鱣而告之。史鱣曰、「子必禍矣。子富而君貧、其及子乎。」文子曰、「然。吾不先告子、是吾罪也。君既許我矣、其若之何。」史鱣曰、「無害。子臣、可以免。富而能臣、必免於難。上下同之。戍也驕、其亡乎。富而不驕者鮮、吾唯子之見。驕而不亡者、未之有也。戍必與焉。」及文子卒、衛侯始惡於公叔戌、以其富也。公叔戌又將去夫人之黨、夫人愬之曰、「戍將爲亂。」定十四「十四年春、衛侯逐公叔戌與其黨、故趙陽奔宋、戌來奔」。

「反乎衛、主蘧伯玉家」は、下文哀二「而反乎衛、入主蘧伯玉家」にもほぼ同じ表現が見える。同じ原資料が複数回用いられていることを示唆する。孔子が衛において蘧伯玉家に滞在したことは、『論語』憲問

蘧伯玉使人於孔子。孔子與之坐而問焉、曰、「夫子何爲。」對曰、「夫子欲寡其過而未能也。」使者出。子曰、「使乎。使乎。」

に見える蘧伯玉と孔子の直接の交渉に適合的だが、その一方で蘧伯玉は、『左傳』襄十四（前 559）にすでに見え*114、定十三の六十二年前、哀二の六十六年前である。『論語』『左傳』のいずれかに誤傳がある可能性がないではない*115。

[8] 子路不説 『論語』雍也「子見南子、子路不説。夫子矢之曰、「予所否者、天厭之。天厭之。」」。

[9] 靈公與夫人同車 「雍渠」を『孟子』萬章上「或謂孔子於衛主癰疽、於齊主侍人瘠環、有諸乎」は、「癰疽」に作る。

[10] 吾未見好德如好色者也 『論語』子罕「子曰、「吾未見好德如好色者也。」」。

[11] 過曹 「過曹」は他の文獻に見えない。衛→陳の移動につき、匡を通る直線ルートを避けたことをとくに提示したものであろう。

[12] 魯定公卒 『春秋經』定十五「壬申、公薨于高寢」。この年が定十五であったとするものだが、上述の誤って改めた「定公十四年」を承けるものである。「居十月」・「月餘、反乎衛」・「居衛月餘」ではほぼ一年であり、定公十三年の一年間を満たす。「十月」「月餘」「月餘」といった月単位の期間を記述するような孔子關聯の材料が獲得できたとは思えない。ここで想起されるのが、『論語』子路「子曰、「苟有用我者。期月而已可也、三年有成。」」および『孟子』萬章下「兆足以行矣、而不行、而後去、是以未嘗有所終三年淹也」である。『論語』邢昺疏は「期月」を一年と解する*116。孔子去魯については、特定國への滞在が一年もしくは三年であることが頻見する。おそらくは年次の創作に

*114 『左傳』襄十四「文子曰、「君忌我矣。弗先、必死。」并祭於戚而入、見蘧伯玉、曰、「君之暴虐、子所知也。大懼社稷之傾覆、將若之何。」對曰、「君制其國、臣敢奸之。雖奸之、庸如愈乎。」遂行、從近闕出」。

*115 錢穆『先秦諸子繫年』16 蘧瑗史鱗考。

*116 『論語正義』子路「子曰、「苟有用我者、期月而已可也、三年有成。○正義曰、此章孔子自言爲政之道也。苟、誠也。期月、周月也、謂周一年之十二月也。孔子言誠有用我於政事者、期月而可以行其政教、必滿三年乃有成功也」。

當たって、『論語』子路の「期月」「三年」ないしは『孟子』萬章下の「三年」が一つの基準として用いられたものであろう。

ここでは、第一回適衛を一年と定めた上で、編年記的な形式を整えるため、「月餘、反乎衛」・「居衛月餘」に「月餘」を割り當て、その残りの「十月」を「居十月」に割り當てたものとする。

●定十四（前 496）五十六歳

孔子去曹適宋、與弟子習禮大樹下。宋司馬桓魋欲殺孔子、拔其樹。孔子去。弟子曰、「可以速矣。」[1] 孔子曰、「天生德於予、桓魋其如予何。」[2] 孔子適鄭、與弟子相失、孔子獨立郭東門。鄭人或謂子貢曰、「東門有人、其類似堯、其項類皋陶、其肩類子產、然自要以下不及禹三寸。曩曩若喪家之狗。」子貢以實告孔子。孔子欣然笑曰、「形狀、末也。而謂似喪家之狗、然哉。然哉。」[3] 孔子遂至陳、主於司城貞子家 [4]。

[1] 孔子去曹適宋 過宋は衛から陳への移動の途中に置かれる。これは上掲『孟子』萬章上

孔子不悅於魯衛、遭宋桓司馬將要而殺之、微服而過宋。是時孔子當阨、主司城貞子、爲陳侯周臣。

に據る。

宋世家「(景公) 二十五年、孔子過宋、宋司馬桓魋惡之、欲殺孔子、孔子微服去。」

宋表「二十五 孔子過宋、桓魋惡之。」

は第二回の衛→陳の年次である宋景公二十五年（哀三）に過宋を繋げるが、孔子世家はこれを第一回の衛→陳の年次である定十四に移している。その結果、適鄭を後續することが容易になる。宋における遭難が、衛→陳の途中に鄭に迂回した理由となるからである。

孔子世家はさらに『孟子』の「微服而過宋」を用いず、『莊子』外篇/天運

今而夫子亦取先王已陳芻狗、聚弟子遊居寢臥其下。故伐樹於宋、削跡於衛、窮於商周、是非其夢邪。圍於陳蔡之間、七日不火食、死生相與鄰、是非其謎邪。

に初見する「拔其樹」を採用する。總じて孔子世家では劇的な場面を伴う説話を多く採用している。

[2] 天生德於予 『論語』述而「子曰、「天生德於予、桓魋其如予何。」」。

桓魋は宋の世族桓族向氏に屬し、『左傳』では向魋と記される。宋景公の向魋への寵が原因で宋では定十～定十一に母弟辰らの反亂が発生している*117。のち哀十四に景公に叛し、齊に亡命する*118。『論語』顔淵

司馬牛問仁。子曰、「仁者其言也詘。」（注「孔曰、詘、難也。牛、宋人、弟子司馬犁。」）曰、「其言也詘、斯謂之仁已乎。」子曰、「爲之難、言之得無詘乎。」

司馬牛問君子。子曰、「君子不憂不懼。」曰、「不憂不懼、斯謂之君子已乎。」子曰、「不疚、夫何憂何懼。」

司馬牛憂曰、「人皆有兄弟、我獨亡。」子夏曰、「商聞之矣、死生有命、富貴在天。君子敬而無失、與人恭而有禮。四海之内、皆兄弟也。君子何患乎無兄弟也。」

の司馬牛を、孔安國は『左傳』哀十四

司馬牛致其邑與珪焉而適齊。向魋出於衛地、公文氏攻之、求夏后氏之璜焉。與之他玉而奔齊。陳成子使爲次卿、司馬牛又致其邑焉、而適吳、吳人惡之、而反。趙簡子召之、陳成子亦召之、卒於魯郭門之外、阮氏葬諸丘輿。

に見える向魋の弟・司馬牛と同一人物とし、これを踏まえて向魋の孔子襲撃の原因を

*117 『左傳』定十「宋公子地嬖遽富獵、十一分其室、而以其五與之。公子地有白馬四、公嬖向魋、魋欲之。公取而朱其尾・鬣以與之。地怒、使其徒扶魋而奪之。魋懼、將走、公閉門而泣之、目盡腫。母弟辰曰、「子分室以與獵也、而獨卑魋、亦有頗焉。子爲君禮、不過出竟、君必止子。」公子地奔陳、公弗止。辰爲之請、弗聽。辰曰、「是我廷吾兄也。吾以國人出、君誰與處。」冬、母弟辰暨仲佗・石彊出奔陳・定十一「十一年春、宋公母弟辰暨仲佗・石彊・公子地入于蕭以叛。秋、樂大心從之、大爲宋患、寵向魋故也」。

*118 『左傳』哀十四「宋桓魋之寵害於公、公使夫人驟請享焉、而將討之。未及、魋先謀公、請以壘易薄、公曰、「不可。薄、宗邑也。」乃益壘七邑、而請享公焉。以日中爲期、家備盡往。公知之、告皇野曰、「余長魋也、今將禍余、請即救。」司馬子仲曰、「有臣不順、神之所惡也、而況人乎。敢不承命。不得左師不可、請以君命召之。」左師每食、擊鐘。聞鐘聲、公曰、「夫子將食。」既食、又奏。公曰、「可矣。」以乘車往、曰、「迹人來告曰、逢澤有介麋焉。公曰、雖魋未來、得左師、吾與之田、若何。君憚告子、野曰、嘗私焉。君欲速、故以乘車逆子。」與之乘、至、公告之故、拜、不能起。司馬曰、「君與之言。」公曰、「所難子者、上有天、下有先君。」對曰、「魋之不共、宋之禍也、敢不唯命是聽。」司馬請瑞焉、以命其徒攻桓氏。其父兄故臣曰、「不可。」其新臣曰、「從吾君之命。」遂攻之。子頎聘而告桓司馬。司馬欲入、子車止之、曰、「不能事君、而又伐國、民不與也、祇取死焉。」向魋遂入于曹以叛。六月、使左師巢伐之、欲質大夫以入焉。不能、亦入于曹、取質。魋曰、「不可。既不能事君、又得罪于民、將若之何。」乃舍之。民遂叛之。向魋奔衛。向巢來奔、宋公使止之、曰、「寡人與子有言矣、不可以絕向氏之祀。」辭曰、「臣之罪大、盡滅桓氏可也。若以先臣之故、而使有後、君之惠也。若臣、則不可以入矣。』」

司馬牛の孔子入門に關聯附ける説があるが*119、同一人物説にすでに疑義が呈されている*120。その一方で、哀十四の司馬牛に關する記述は、『左傳』に一回しか登場しない人物としては葬處を記すなど異例に詳細である。同一人物説に基づくものかもしれない。

桓魋の孔子襲撃の原因については明文がないが、あるいは定九に陽虎が齊から宋を経て晉に亡命した一件に關わるものかもしれない。匡の圍について、上文は孔子を陽虎と誤認したためとする。陽虎が宋人に怨みをかい、孔子がやはり陽虎に誤認されるといったことがあったのかもしれない。

[3] 孔子適鄭 孔子世家は、適陳の前に適鄭を置く。鄭世家

聲公五年、鄭相子産卒、鄭人皆哭泣、悲之如亡親戚。子産者、鄭成公少子也。爲人仁愛人、事君忠厚。孔子嘗過鄭、與子産如兄弟云。及聞子産死、孔子爲泣曰、「古之遺愛也。」

および鄭表「五 子産卒」は鄭聲公五年（定十四）に子産卒を繋げ、鄭世家はさらに子産・孔子の交際を述べる。實のところ、子産の死は、『左傳』昭二十（前 522）

鄭子産有疾、…疾數月而卒。…及子産卒、仲尼聞之、出涕曰、「古之遺愛也。」

に見え、子産が同年に卒したことを伝える。鄭世家「及聞子産死、孔子爲泣曰、「古之遺愛也。」」はこれを引用するものだが、「孔子嘗過鄭、與子産如兄弟云」という独自の材料を尊重し、一方で、定十四に孔子が衛から陳に移動したという認識があり、その場合、鄭の疆域を通過するので、そのことに附會してこの年次に「孔子嘗過鄭」を含む子産卒の記述を繋げたものである。

「孔子獨立郭東門」以下は、『韓詩外傳』卷九

孔子出衛之東門、逆姑布子卿、曰、「二三子引車避、有人將來、必相我者也、志之。」姑布子卿亦曰、「二三子引車避、有聖人將來。」孔子下步、姑布子卿迎而視之五十步、從而望之五十步。顧子貢曰、「是何爲者也。」子貢曰、「賜之師也、所謂魯孔丘也。」姑布子卿曰、「是魯孔丘歟。吾固聞之。」子貢曰、「賜之師何如。」姑布子卿曰、「得

*119 鄭環『孔子世家考』「司馬牛師事夫子、而魋乃欲殺其弟之師。蓋牛多言而躁、必屢述夫子之言以規其兄、而夫子又嘗有死不如速朽之言、魋所由必欲要而殺之也」。鄭環は、『禮記』檀弓上「昔者夫子居於宋、見桓司馬自爲石槨、三年而不成。夫子曰、「若是其靡也、死不如速朽之愈也。」死之欲速朽、爲桓司馬言之也」をも踏まえている。

*120 楊伯峻『論語譯注』（古籍出版社、1958）。

堯之顛、舜之目、禹之頸、皋陶之喙。從前視之、盎盎乎似有土者。從後視之、高肩弱脊、循循固得之轉廣一尺四寸、此惟不及四聖者也。」子貢吁然。姑布子卿曰、「子何患焉。汗面而不惡、蔑喙而不藉、遠而望之、羸乎若喪家之狗、子何患焉。子何患焉。」子貢以告孔子。孔子無所辭、獨辭喪家之狗耳、曰、「丘何敢乎。」子貢曰、「汗面而不惡、蔑喙而不藉、賜以知之矣。不知喪家狗、何足辭也。」子曰、「賜、汝獨不見夫喪家之狗歟。既斂而椁、布席而祭、顧望無人。意欲施之、上無明王、下無賢士方伯、王道衰、政教失、強陵弱、眾暴寡、百姓縱心、莫之綱紀。是人固以丘爲欲當之者也。丘何敢乎。」

に重なる。こちらは「衛之東門」に作るが、孔子世家は「鄭之東門」に作るものを獲得していたのであろう。

孔子世家は鄭世家・鄭表の子産卒の記述を用いず、「喪家之狗」の説話を用いる。過宋の記述と同様に、孔子世家は劇的な場面を選好している。

[4] 孔子遂至陳 『孟子』萬章上「是時孔子當阨、主司城貞子、爲陳侯周臣」に據る。趙岐は司城貞子を「宋卿」とするが、「過宋」の後に見えるので、陳人とする孔子世家に従うべきである*121。陳の司城氏は『左傳』に見えない。陳侯周は、陳湣公（前501～前478）に当たり、陳世家「陳乃立懷公之子越、是爲湣公」は諱を越とする。あるいは『孟子』が獨自資料を獲得していたものであろう。

陳世家「湣公六年、孔子適陳。吳王夫差伐陳、取三邑而去」・陳表「六 孔子來」も孔子適陳を同じ年次に繋げている。「吳王夫差伐陳、取三邑而去」については、「吳上當有八年二字」とする陳仁錫『史記考』の説に従うべきであろう。そもそも定十四は、吳王闔廬が檣李の戦で越に敗れて戦傷死したその當年であり*122、「吳王夫差伐陳」はあ

*121 邢昺疏「蓋司城者、今以宋六卿考之、則司城在司寇之上、右師・左師・司馬・司徒之下、其位則六卿之中也。古有司空之官、無司城之名、特宋有之者、按左傳魯桓公六年、宋以武公廢司空。杜預曰、武公名司空、遂變爲司城也」が指摘するように、「司城」を宋に固有の官名と判断したためであろうが、『左傳』哀八には曹の司城彊が見える。

*122 『左傳』定十四「吳伐越、越子句踐禦之、陳于檣李。句踐患吳之整也、使死士再禽焉、不動。使罪人三行、屬劍於頸、而辭曰、「二君有治、臣奸旗鼓。不敏於君之行前、不敢逃刑、敢歸死。」遂自剄也。師屬之目、越子因而伐之、大敗之。靈姑浮以戈擊闔廬、闔廬傷將指、取其一履。還、卒於陘、去檣李七里。夫差使人立於庭、苟出入、必謂己曰、「夫差。而忘越王之殺而父乎。」則對曰、「唯、不敢忘。」三年乃報越」。

りそうにない。果たして、陳表は潛公八年（哀元・前494）に「八 吳伐我」を置き、また孔子世家は、孔子適陳のあとに、

歲餘、吳王夫差伐陳、取三邑而去。趙鞅伐朝歌。楚圍蔡、蔡遷于吳。吳敗越王句踐會稽。

を置く。「趙鞅伐朝歌」以下は全て『左傳』哀元に見える。この場合、「吳王夫差伐陳」は『左傳』哀元「秋八月、吳侵陳」に相當するが、梁玉繩が指摘するように、「取三邑而去」に相當する記述は『左傳』には見えない*123。

なお、『左傳』定十五

十五年春、邾隱公來朝。子貢觀焉。邾子執玉高、其容仰。公受玉卑、其容俯。子貢曰、「以禮觀之、二君者、皆有死亡焉。夫禮、死生存亡之體也。將左右周旋、進退俯仰、於是乎取之。朝祀喪戎、於是乎觀之。今正月相朝、而皆不度、心已亡矣。嘉事不體、何以能久。高仰、驕也。卑俯、替也。驕近亂、替近疾。君爲主、其先亡乎。」…夏五月壬申、公薨。仲尼曰、「賜不幸言而中*124、是使賜多言者也。」

は、子貢が魯において邾隱公の來朝に立ち會ったことを伝える。朝廷の儀禮が一般に公開されていたはずはなく、『孔子家語』辨物注「子貢時爲魯大夫也」に従うべきであろう。定九～定十二の間に子貢もまた大夫に任用されたものであろう。『論語』八佾「子貢欲去告朔之餼羊。子曰、「賜也、爾愛其羊、我愛其禮。」」は、國家の典禮に關わる提案を處士がなしうるはずもなく、子貢の大夫在任中の發言となろう。仲尼弟子列傳「端木賜、衛人、字子貢。少孔子三十一歲」によれば、子貢は昭二十二（前520）生、定十二に二十三歳である。『論語』には衛出公（前492～前480）の時、子貢が衛にあったことが見え*125、これは孔子に隨從した際の記述となる。孔子が定十三に魯を退去し

*123 梁玉繩『史記志疑』卷十九/陳杞世家第六。

*124 「賜不幸言而中」は、『論語』先進「子曰、「回也其庶乎。屢空。賜不受命、而貨殖焉、億則屢中。」」に基づく。

*125 『論語』述而「冉有曰、「夫子爲衛君乎。（注「鄭曰、爲猶助也。衛君者、謂輒也。衛靈公逐太子蒯聵、公薨而立孫輒。後晉趙鞅納蒯聵於戚、城衛石曼姑帥師圍之、故問其意助輒不乎。」）」子貢曰、「諾。吾將問之。」入、曰、「伯夷、叔齊何人也。」曰、「古之賢人也。」曰、「怨乎。」曰、「求仁而得仁、又何怨。」出、曰、「夫子不爲也。」」・子張「衛公孫朝問於子貢曰、「仲尼焉學。」子貢曰、「文・武之道、未墜於地、在人。賢者識其大者、不賢者識其小者、莫不有文、武之道焉。夫子焉不學。而亦何常師之有。」」。

たのちも、子貢はなお魯に止まり、ついで致仕して孔子の遊歴に従ったものとなる。孔子去魯の間も、孔門は魯に残留し、あるいは孔子と往復していたことを示唆する。

●哀元（前 494）五十八歳

歳餘、吳王夫差伐陳、取三邑而去。趙鞅伐朝歌。楚圍蔡、蔡遷于吳。吳敗越王句踐會稽 [1]。有隼集于陳廷而死、楛矢貫之、石碣、矢長尺有咫。陳湣公使使問仲尼。仲尼曰、「隼來遠矣、此肅慎之矢也。昔武王克商、通道九夷百蠻、使各以其方賄來貢、使無忘職業。於是肅慎貢楛矢石碣、長尺有咫。先王欲昭其令德、以肅慎矢分大姬、配虞胡公而封諸陳。分同姓以珍玉、展親。分異姓以遠職、使無忘服。故分陳以肅慎矢。」試求之故府、果得之 [2]。孔子居陳三歳、會晉楚爭疆、更伐陳、及吳侵陳、陳常被寇 [3]。孔子曰、「歸與歸與。吾黨之小子狂簡 [4]、進取不忘其初 [5]。」於是孔子去陳 [6]。

[1] 歳餘 「吳王夫差伐陳」以下は、『左傳』哀元

元年春、楚子圍蔡、報柏舉也。…蔡於是乎請遷于吳。吳王夫差敗越于夫椒、報構李也。遂入越。越子以甲楯五千保于會稽、使大夫種因吳大宰嚭以行成。…秋八月、吳侵陳、修舊怨也。…冬十一月、晉趙鞅伐朝歌。

に據る。その「歳餘」以前であるので、上文の「孔子遂至陳」が定十四に屬することがあらためて確認される。

[2] 有隼集于陳廷而死 『國語』魯語下第 19 章

仲尼在陳、有隼集于陳侯之庭而死、楛矢貫之、石碣其長尺有咫。陳惠公使人以車如仲尼之館問之。仲尼曰、「隼之來也遠矣。此肅慎氏之矢也。昔武王克商、通道于九夷・百蠻、使各以其方賄來貢、使無忘職業。於是肅慎氏貢楛矢・石碣、其長尺有咫。先王欲昭其令德之致遠也、以示後人、使永監焉、故銘其楛曰肅慎氏之貢矢、以分大姬、配虞胡公而封諸陳。古者、分同姓以珍玉、展親也。分異姓以遠方之職貢、使無忘服也。故分陳以肅慎氏之貢。君若使有司求諸故府、其可得也。」使求、得之金櫝、如之。

に據る。『國語』は陳湣公（前 501～前 478）を惠公（前 533～前 506）に誤っている。「愍」（湣）を「惠」に誤寫したものであろう。

[3] 孔子居陳三歳 「三歳」は定十四～哀元を数えたものである。上文の「孔子遂至陳」が定公十四年に屬することを重ねて確認させる。こののち、第二回適陳が哀二～

哀四の三年、ついで哀四～哀六に「遷于蔡三歲」と見える。衛世家・衛表が第二回適陳を哀三～哀十の八年とし、蔡世家・蔡表が適蔡を哀二のごく短期間に設定しているように、これらの年数はおおむね『史記』の創作である。上述の如く『論語』子路・『孟子』萬章下を踏まえ、特定國への滞在期間を「一年」もしくは「三年」と想定したものであろう。

「會晉楚爭彊、更伐陳」は哀公元年前後の状況に適合しない。晉ではそもそも范中行の亂（定十三～哀五）が進行中であって、「伐陳」を行いうる状況にない。楚は、定四（前506）、呉王闔廬（前514～前496）の侵攻で都城の郢が陥落し、呉の内紛と秦の救援で呉が撤退したことでようやく亡國を免れた。『春秋經』定十四（前496）「二月辛巳、楚公子結・陳公孫佗人帥師滅頓、以頓子牂歸」・定十五（前495）「二月辛丑、楚子滅胡、以胡子豹歸」・哀元（前494）「楚子・陳侯・隨侯・許男圍蔡」に見えるように、十年を閲してようやく勢力を回復したが、定四に呉を使嗾して楚に侵攻した蔡には敵對的であり、逆に呉の側に參戰しなかった陳には友好を維持しており、「伐陳」は認められない。「會晉楚爭彊、更伐陳、及吳侵陳、陳常被寇」は、孔子が陳を退去した理由を作文したものである。

[4] 歸與歸與 『論語』公冶長「子在陳曰、「歸與。歸與。吾黨之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之。」」

[5] 進取不忘其初 『孟子』盡心下「孔子在陳曰、「盍歸乎來。吾黨之士狂簡、進取、不忘其初。」」

[6] 於是孔子去陳 蔡世家

（昭侯）二十六年、孔子如蔡。楚昭王伐蔡、蔡恐、告急於吳。吳爲蔡遠、約遷以自近、易以相救。昭侯私許、不與大夫計。吳人來救蔡、因遷蔡于州來。

は、『左傳』

元年春、楚子圍蔡、…蔡於是乎請遷于吳。（哀元）

吳洩庸如蔡納聘、而稍納師。師畢入、眾知之。蔡侯告大夫、殺公子駟以說、哭而遷墓。冬、蔡遷于州來。（哀二）

に基づき、二年分の事件を昭侯二十六年（哀二）の一年にまとめ、この年次に孔子適蔡を繋げる。孔子世家と同様に、定十四～哀元の三年間、陳にあったとするものである。

孔子適蔡は『論語』先進「子曰、從我於陳蔡者、皆不及門也」・『孟子』盡心下「孟子曰、「君子之厄於陳蔡之間、無上下之交也」に示唆されるが、一方で孔子の蔡人との交渉は伝えられない。このことを説明すべく、蔡世家は州來への遷徙という混亂のあった哀二に孔子適蔡を繋げたものであろう。ついで、宋表「二十五 孔子過宋、桓魋惡之」・宋世家「二十五年、孔子過宋、宋司馬桓魋惡之、欲殺孔子、孔子微服去」は哀三に孔子過宋を繋げる。『孟子』萬章上

孔子不悅於魯衛、遭宋桓司馬將要而殺之、微服而過宋。是時孔子當阨、主司城貞子、爲陳侯周臣。

の引用からうかがわれるように、衛世家・陳世家および十二諸侯年表には見えないが、過宋は衛→陳の途中となる。また蔡との往還は孔子世家「孔子自陳遷于蔡」に見えるように、陳を經由せねばならない。したがって、孔子世家以前の段階では、哀二～哀三に、陳→蔡→陳→衛→宋→陳という移動が想定されていたことになる。

このようなめまぐるしい移動に無理を感じるようになったためか、孔子世家は過宋を定十四に、適蔡を哀四に改め、哀二に陳→衛→陳の移動を繋けている。

●哀二（前 493）五十九歳

過蒲、會公叔氏以蒲畔、蒲人止孔子。弟子有公良孺者、以私車五乘從孔子。其爲人長賢、有勇力、謂曰、「吾昔從夫子遇難於匡、今又遇難於此、命也已。吾與夫子再罹難、寧鬪而死。」鬪甚疾。蒲人懼、謂孔子曰、「苟毋適衛、吾出子。」與之盟、出孔子東門 [1]。孔子遂適衛。子貢曰、「盟可負邪。」孔子曰、「要盟也、神不聽。」衛靈公聞孔子來、喜、郊迎。問曰、「蒲可伐乎。」對曰、「可。」靈公曰、「吾大夫以爲不可。今蒲、衛之所以待晉楚也、以衛伐之、無乃不可乎。」孔子曰、「其男子有死之志、婦人有保西河之志。吾所伐者不過四五人。」靈公曰、「善。」然不伐蒲。靈公老、怠於政、不用孔子 [2]。孔子喟然歎曰、「苟有用我者、期月而已、三年有成。」 [3] 孔子行。佛肸爲中牟宰。趙簡子攻范、中行、伐中牟。佛肸畔、使人召孔子。孔子欲往。子路曰、「由聞諸夫子、其身親爲不善者、君子不入也。今佛肸親以中牟畔、子欲往、如之何。」孔子曰、「有是言也。不曰堅乎、磨而不磷。不曰白乎、涅而不淄。我豈匏瓜也哉、焉能繫而不食。」 [4] 孔子擊磬。有荷蕢而過門者、曰、「有心哉、擊磬乎。硜硜乎、莫己知也夫而已矣。」 [5] 孔子學鼓琴師襄子、十日不進。師襄子曰、「可以益矣。」孔子曰、「丘已習其曲矣、未得其

數也。」有閒、曰、「已習其數、可以益矣。」孔子曰、「丘未得其志也。」有閒、曰、「已習其志、可以益矣。」孔子曰、「丘未得其爲人也。」有閒、(曰)有所穆然深思焉、有所怡然高望而遠志焉。曰、「丘得其爲人、黯然而黑、幾然而長、眼如望羊、如王四國、非文王其誰能爲此也。」師襄子辟席再拜、曰、「師蓋云文王操也。」[6] 孔子既不得用於衛、將西見趙簡子。至於河而聞竇鳴犢、舜華之死也、臨河而歎曰、「美哉水、洋洋乎。丘之不濟此、命也夫。」子貢趨而進曰、「敢問何謂也。」孔子曰、「竇鳴犢、舜華、晉國之賢大夫也。趙簡子未得志之時、須此兩人而后從政。及其已得志、殺之乃從政。丘聞之也、刳胎殺夭則麒麟不至郊、竭澤涸漁則蛟龍不合陰陽、覆巢毀卵則鳳皇不翔。何則。君子諱傷其類也。夫鳥獸之於不義也尚知辟之、而況乎丘哉。」乃還息乎陬鄉、作爲陬操以哀之。而反乎衛、入主蘧伯玉家 [7]。他日、靈公問兵陳。孔子曰、「俎豆之事則嘗聞之、軍旅之事未之學也。」明日、與孔子語、見蜚鴈、仰視之、色不在孔子。孔子遂行 [8]、復如陳 [9]。夏、衛靈公卒、立孫輒、是爲衛出公。六月、趙鞅內太子蒯聩于戚。陽虎使太子綏、八人衰絰、僞自衛迎者、哭而入、遂居焉。冬、蔡遷于州來 [10]。

[1] 過蒲 他の文獻には見えない。上述の如く『左傳』定十三～定十四に公叔戌の失脚・亡命が見える。公良孺は仲尼弟子列傳に「公良孺字子正」と見える。「要盟也、神不聽」につき、鄭世家は『左傳』襄九「且要盟無質、神弗臨也」を含む一節を用いており、この表現を引用したものであろう。

[2] 孔子遂適衛 第二回の適衛である。孔子世家は、定十三・哀二・哀六～哀十一の三回の適衛を記す。『孟子』萬章下

孔子有見行可之仕、有際可之仕、有公養之仕也。於季桓子、見行可之仕也。於衛靈公、際可之仕也。於衛孝公、公養之仕也。

に孔子が衛靈公・衛孝公（出公）に仕えたことが見え、また、衛靈公について、下掲『論語』衛靈公「明日遂行」に加えて、

或譖孔子於衛靈公。靈公使公孫余假一出一入。孔子恐獲罪焉、居十月、去衛。

居衛月餘、靈公與夫人同車、宦者雍渠參乘、出、使孔子爲次乘、招搖市過之。孔子曰、「吾未見好德如好色者也。」於是醜之、去衛、

靈公老、怠於政、不用孔子。孔子喟然歎曰、「苟有用我者、期月而已、三年有成。」孔子行。

の如く、複数の去衛が傳承されていたことを、複数回の適衛の根據としたものであろう。

[3] 苟有用我者 『論語』 子路「子曰、「苟有用我者。期月而已可也、三年有成。」。「喟然歎曰」は孔子世家の段階で補われたものである。『論語』 子罕「顔淵喟然歎曰」・先進「夫子喟然歎曰」に見える。

[4] 佛肸爲中牟宰 『論語』 陽貨

佛肸召、子欲往。子路曰、「昔者由也聞諸夫子曰、親於其身爲不善者、君子不入也。佛肸以中牟畔、子之往也、如之何。」子曰、「然。有是言也。不曰堅乎、磨而不磷。不曰白乎、涅而不緇。吾豈匏瓜也哉。焉能繫而不食。」

に據るが、『論語』には佛肸の畔が趙簡子に對するものであったとは見えない。『左傳』 哀五「夏、趙鞅伐衛、范氏之故也、遂圍中牟」や、『韓詩外傳』 卷六

昔者趙簡子薨而未葬、中牟畔之、既葬五日、襄子興師而攻之、圍未匝、而城自壞者十丈、襄子擊金而退之。軍吏諫曰、「君誅中牟之罪而城自壞者、是天助也、君曷爲而退之。」襄子曰、「吾聞之於叔向曰、君子不乘人於利、不厄人於險。使脩其城然後攻之。」中牟聞其義而請降、曰、「善哉。襄子之謂也。」詩曰、「王猷允塞、徐方既來。」

を參照したものであろう。

趙鞅に關聯して、當時の状況を整理しておこう。定四の召陵の會を契機に晉霸が解體に向かったことは上述の如くである。衛は定七（前 503）に齊と同盟し、定八（前 502）には晉霸を離脱する。定九（前 501）には齊・衛が晉の夷儀を攻め、定十（前 500）、晉は衛を包圍してこれに報復する。定十三（前 497）、齊・衛がふたたび晉を攻めた。邯鄲にあった「衛貢五百家」の晉陽への移管をめぐって、趙鞅は分族の邯鄲午を殺害した。邯鄲午の舅であった中行寅およびその姻戚の范吉射が趙鞅を攻撃し、趙鞅は晉陽に逃亡する。ついで知躒・韓不信・魏曼多が中行寅・范吉射を攻撃し、かれらは朝歌に逃亡する。趙鞅が歸還し、ここに趙・知・韓・魏と范・中行の内戦が開始された。定十五（前 495）、齊は魯・衛と牽に、宋と洮に會して范・中行への支援を謀り、哀元（前 494）には齊・衛が晉に出兵した。

佛肸の孔子招聘は、中牟から近い衛に孔子が滞在した時期に想定されている。孔子世家は定十三・哀二・哀六～哀十一に孔子が衛にあったとするが、定十三は、その年

末に范中行の亂が開始したばかりの年次であり、哀六にはすでに亂は平定されている。佛肸および下文の趙簡子の一節を繋げうるのは哀二しかなかったということになる。

中牟は、『左傳』定九（前501）には、晉に屬していたことが見えるが^{*126}、上掲の如く、哀五（前490）には衛に屬している。佛肸の叛を哀二に繋げることは、佛肸が結局、衛に歸屬したという推測を重ねるならば、この推移に適合的ではある。

[5] 孔子擊磬 『論語』憲問「子擊磬於衛。有荷蕢而過孔氏之門者、曰、「有心哉。擊磬乎。」既而曰、「鄙哉。硜硜乎。莫己知也、斯已而已矣。深則厲、淺則揭。」子曰、「果哉。末之難矣。』」。

[6] 孔子學鼓琴師襄子 『韓詩外傳』卷五「孔子學鼓琴於師襄子而不進。師襄子曰、「夫子可以進矣。」孔子曰、「丘已得其曲矣、未得其數也。」有間、曰、「夫子可以進矣。」曰、「丘已得其數矣、未得其意也。」有間、復曰、「夫子可以進矣。」曰、「丘已得其人矣、未得其類也。」有間、曰、「邈然遠望、洋洋乎。翼翼乎、必作此樂也。黯然而黑、幾然而長、以王天下、以朝諸侯者、其惟文王乎。」師襄子避席再拜曰、「善。師以爲文王之操也。」故孔子持文王之聲、知文王之爲人。師襄子曰、「敢問何以知其文王之操也。」孔子曰、「然。夫仁者好韋、和者好粉、智者好彈、有慤慤之意者好麗。丘是以知文王之操也。」傳曰、聞其末而達其本者、聖也。」。

[7] 孔子既不得用於衛 『說苑』權謀「趙簡子曰、「晉有澤鳴・犢犢、魯有孔丘、吾殺此三人、則天下可圖也。」於是乃召澤鳴・犢犢、任之以政而殺之。使人聘孔子於魯。孔子至河、臨水而觀曰、「美哉水。洋洋乎。丘之不濟於此、命也夫。」子路趨進曰、「敢問奚謂也。」孔子曰、「夫澤鳴・犢犢、晉國之賢大夫也。趙簡子之未得志也、與之同聞見、及其得志也、殺之而後從政、故丘聞之、刳胎焚夭、則麒麟不至。乾澤而漁、蛟龍不遊。覆巢毀卵、則鳳凰不翔。丘聞之、君子重傷其類者也。」。

[8] 靈公問兵陳 『論語』衛靈公

衛靈公問陳於孔子。孔子對曰、「俎豆之事、則嘗聞之矣。軍旅之事、未之學也。」明日遂行。

*126 『左傳』定九「晉車千乘在中牟、衛侯將如五氏、卜過之、龜焦。衛侯曰、「可也。衛車當其半、寡人當其半、敵矣。」乃過中牟。中牟人欲伐之、衛褚師圍亡在中牟、曰、「衛雖小、其君在焉、未可勝也。齊師克城而驕、其帥又賤、遇、必敗之。不如從齊。」乃伐齊師、敗之。」

に據る。哀二の衛への滞在も、一年間のうちに収まっている。『論語』子路「苟有用我者、期月而已可也」を適用したものであろう。

[9] 復如陳 第二回の適陳である。孔子世家は、定十四～哀元・哀二～哀四の二回の適陳を記す。孔子在陳に關する、

子在陳曰、「歸與。歸與。吾黨之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之。」（『論語』公冶長）

孔子在陳曰、「盍歸乎來。吾黨之士狂簡、進取、不忘其初。」（『孟子』盡心下）を同じ事件の異傳ではなく、別の事件と見立てて二回の適陳の根據としたものであろう。孔子世家以外でも、陳世家「潛公六年、孔子適陳。吳王夫差伐陳、取三邑而去」・陳表「六 孔子來」・蔡世家「二十六年、孔子如蔡。楚昭王伐蔡、蔡恐、告急於吳。吳爲蔡遠、約遷以自近、易以相救。昭侯私許、不與大夫計。吳人來救蔡、因遷蔡于州來」は定十四（陳潛公六年）～哀二（蔡昭侯二十六年）の適陳を示し、ついで宋表「二十五 孔子過宋、桓魋惡之」・宋世家「二十五年、孔子過宋、宋司馬桓魋惡之、欲殺孔子、孔子微服去」が、『孟子』萬章上

孔子不悅於魯衛、遭宋桓司馬將要而殺之、微服而過宋。是時孔子當阬、主司城貞子、爲陳侯周臣。

を用いていることから、哀三（宋景公二十五年）に衛→陳の移動が想定されていることがわかる。

[10] 衛靈公卒 『左傳』哀二

夏、衛靈公卒。夫人曰、「命公子郢爲太子、君命也。」對曰、「郢異於他子、且君沒於吾手、若有之、郢必聞之。且亡人之子輒在。」乃立輒。六月乙酉、晉趙鞅納衛太子于戚。宵迷、陽虎曰、「右河而南、必至焉。」使太子統、八人衰絰、僞自衛逆者。告於門、哭而入、遂居之。…冬、蔡遷于州來。

に據る。仲尼弟子列傳にも、

初、衛靈公有寵姬曰南子。靈公太子黃躓得過南子、懼誅出奔。及靈公卒而夫人欲立公子郢。郢不肯、曰、「亡人太子之子輒在。」於是衛立輒爲君、是爲出公。

と見える。

衛の太子蒯躓は、嫡母である南子の殺害に失敗し、定十四（前 496）に亡命した。上

述の如く、すでに定九（前 501）以降、衛は齊とともに晉にしばしば出兵していた。趙鞅は蒯聵を戚に納れることで衛を牽制したのである。

●哀三（前 492）六十歳

是歲魯哀公三年、而孔子年六十矣 [1]。齊助衛圍戚、以衛太子蒯聵在故也 [2]。夏、魯桓釐廟燔、南宮敬叔救火。孔子在陳、聞之、曰、「災必於桓釐廟乎。」已而果然 [3]。秋、季桓子病、輦而見魯城、喟然歎曰、「昔此國幾興矣、以吾獲罪於孔子、故不興也。」顧謂其嗣康子曰、「我即死、若必相魯。相魯、必召仲尼。」後數日、桓子卒、康子代立。已葬、欲召仲尼。公之魚曰、「昔吾先君用之不終、終爲諸侯笑。今又用之、不能終、是再爲諸侯笑。」康子曰、「則誰召而可。」曰、「必召冉求。」於是使使召冉求。冉求將行、孔子曰、「魯人召求、非小用之、將大用之也。」 [4] 是日、孔子曰、「歸乎歸乎。吾黨之小子狂簡、斐然成章、吾不知所以裁之。」 [5] 子贛知孔子思歸、送冉求、因誡曰「即用、以孔子爲招」云。冉求既去 [6]。

[1] 是歲魯哀公三年而孔子年六十矣 挿入箇所を誤り、年末に置くべきものを年頭に置いている。上文「是歲、魯定公卒」ともども「是歲」の書き出しをもつ一節が二次的に挿入されたものであることを確認させる。

[2] 齊助衛圍戚 『左傳』哀三「三年春、齊・衛圍戚、求援于中山」。

[3] 魯桓釐廟燔 『左傳』哀三

夏五月辛卯、司鐸火。火踰公宮、桓・僖災、救火者皆曰、「顧府。」南宮敬叔至、命周人出御書、俟於宮、曰、「庀女、而不在、死。」子服景伯至、命宰人出禮書、以待命。命不共、有常刑。校人乘馬、巾車脂轄、百官官備、府庫慎守、官人肅給。濟濡帷幕、鬱攸從之。蒙葺公屋、自大廟始、外內以梭。助所不給。有不用命、則有常刑、無赦。公父文伯至、命校人駕乘車。季桓子至、御公立于象魏之外、命救火者傷人則止、財可爲也。命藏象魏、曰、「舊章不可亡也。」富父槐至、曰、「無備而官辦者、猶拾瀋也。」於是乎去表之稟、道還公宮。孔子在陳、聞火、曰、「其桓・僖乎。」

に據る。南宮敬叔が特筆されるのは、孔子の弟子だったからである。

[4] 季桓子病 季桓子卒・季康子嗣立は、『左傳』哀三

秋、季孫有疾、命正常曰、「無死。南孺子之子、男也、則以告而立之。女也、則肥

也可。」季孫卒、康子即位。

に見えるが、孔子世家の記述は全く独自である。

[5] 歸乎歸乎 『論語』公冶長「子在陳曰、「歸與。歸與。吾黨之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之。」」。

に據る。

[6] 冉求既去 冉有は『左傳』では、哀十一「季孫謂其宰冉求曰」に季康子の宰として初見する。そのため、季康子嗣立の直後にその歸國を置いているのであろうが、後文に指摘するように、冉求は第三回適衛の時點でなお孔子に隨行していた模様である。

●哀四（前 491）六十一歳

明年、孔子自陳遷于蔡。蔡昭公將如吳、吳召之也。前昭公欺其臣遷州來、後將往、大夫懼復遷、公孫翩射殺昭公。楚侵蔡 [1]。

[1] 孔子自陳遷于蔡 『左傳』哀四

四年春、蔡昭侯將如吳、諸大夫恐其又遷也、承公孫翩逐而射之、入於家人而卒。
…夏、楚人既克夷虎、乃謀北方。左司馬販・申公壽餘・葉公諸梁致蔡於負函、致方城之外於繪關、…

を踏まえ、適蔡を哀四に繋げる。昭侯弑殺の混亂によって孔子と蔡人の交渉が見えないことを説明したものである。

●哀五（前 490）六十二歳

秋、齊景公卒 [1]。

[1] 齊景公卒 『左傳』哀五「秋、齊景公卒」に據る。直前に「明年」を置くべきである。

●哀六（前 489）六十三歳

明年、孔子自蔡如葉。葉公問政、孔子曰、「政在來遠附邇。」 [1] 他日、葉公問孔子於子路、子路不對。孔子聞之、曰、「由、爾何不對曰、其爲人也、學道不倦、誨人不厭、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾。」 [2] 去葉、反于蔡。

[1] 葉公問政 『論語』子路「葉公問政。子曰、「近者說、遠者來。」」。

[2] 葉公問孔子於子路 『論語』述而

葉公問孔子於子路、子路不對。子曰、「女奚不曰、其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾。」

子曰、「默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉。」

に據る。

葉は『左傳』昭十八に「葉在楚國、方城外之蔽也」と特記されるように、楚の中原進出の要衝であり、葉公沈諸梁は、定五（前 505）に初見する。哀四（前 491）に

夏、楚人既克夷虎、乃謀北方。左司馬販、申公壽餘、葉公諸梁致蔡於負函、（注「此蔡之故地人民、楚因以爲邑。」）

とあるように、蔡が州來に遷徙したのち、下蔡に残った蔡人を負函に徙した。『春秋傳說彙纂』卷三十六は負函につき「當在今信陽州」とする。哀十六（前 479）「葉公在蔡」によれば、葉公はその後、この負函にあった模様である*127。

長沮・桀溺耦而耕、孔子以爲隱者、使子路問津焉。長沮曰、「彼執輿者爲誰。」子路曰、「爲孔丘。」曰、「是魯孔丘與。」曰、「然。」曰、「是知津矣。」桀溺謂子路曰、「子爲誰。」曰、「爲仲由。」曰、「子、孔丘之徒與。」曰、「然。」桀溺曰、「悠悠者天下皆是也、而誰以易之。且與其從辟人之士、豈若從辟世之士哉。」耨而不輟。子路以告孔子、孔子憮然曰、「鳥獸不可與同群。天下有道、丘不與易也。」[3] 他日、子路行、遇荷蓀丈人、曰、「子見夫子乎。」丈人曰、「四體不勤、五穀不分、孰爲夫子。」植其杖而藝。子路以告、孔子曰、「隱者也。」復往、則亡 [4]。

[3] 長沮桀溺耦而耕 『論語』微子「長沮・桀溺耦而耕、孔子過之、使子路問津焉。長沮曰、「夫執輿者爲誰。」子路曰、「爲孔丘。」曰、「是魯孔丘與。」曰、「是也。」曰、「是知津矣。」問於桀溺、桀溺曰、「子爲誰。」曰、「爲仲由。」曰、「是魯孔丘之徒與。」對曰、「然。」曰、「滔滔者天下皆是也、而誰以易之。且而與其從辟人之士也、豈若從辟世之士哉。」耨而不輟。子路行以告。夫子憮然曰、「鳥獸不可與同群、吾非斯人之徒與而誰與。天下有道、丘不與易也。』」。

[4] 子路行 『論語』微子「子路從而後、遇丈人、以杖荷蓀。子路問曰、「子見夫子乎。」丈人曰、「四體不勤、五穀不分。孰爲夫子。」植其杖而藝。子路拱而立。止子路宿、殺雞爲黍而食之、見其二子焉。明日、子路行以告。子曰、「隱者也。」使子路反見之。至

*127 錢穆『先秦諸子繫年』23 孔子至蔡之負函之蔡非州來之蔡考。

則行矣。子路曰、「不仕無義。長幼之節、不可廢也。君臣之義、如之何其廢之。欲潔其身、而亂大倫。君子之仕也、行其義也。道之不行、已知之矣。」。

孔子遷于蔡三歲 [5]、吳伐陳。楚救陳、軍于城父 [6]。聞孔子在陳蔡之間、楚使人聘孔子。孔子將往拜禮、陳蔡大夫謀曰、「孔子賢者、所刺譏皆中諸侯之疾。今者久留陳蔡之間、諸大夫所設行皆非仲尼之意。今楚、大國也、來聘孔子。孔子用於楚、則陳蔡用事大夫危矣。」於是乃相與發徒役圍孔子於野。不得行、絕糧。從者病、莫能興。孔子講誦弦歌不衰。子路慍見曰、「君子亦有窮乎。」孔子曰、「君子固窮、小人窮斯濫矣。」子貢色作。孔子曰、「賜、爾以予爲多學而識之者與。」曰、「然。非與。」孔子曰、「非也。予一以貫之。」孔子知弟子有慍心、乃召子路而問曰、「詩云、匪兕匪虎、率彼曠野。吾道非邪。吾何爲於此。」子路曰、「意者吾未仁邪。人之不我信也。意者吾未知邪。人之不我行也。」孔子曰、「有是乎。由、譬使仁者而必信、安有伯夷、叔齊。使知者而必行、安有王子比干。」子路出、子貢入見。孔子曰、「賜、詩云、匪兕匪虎、率彼曠野。吾道非邪。吾何爲於此。」子貢曰、「夫子之道至大也、故天下莫能容夫子。夫子蓋少貶焉。」孔子曰、「賜、良農能稼而不能爲穡、良工能巧而不能爲順。君子能脩其道、綱而紀之、統而理之、而不能爲容。今爾不脩爾道而求爲容。賜、而志不遠矣。」子貢出、顏回入見。孔子曰、「回、詩云、匪兕匪虎、率彼曠野。吾道非邪。吾何爲於此。」顏回曰、「夫子之道至大、故天下莫能容。雖然、夫子推而行之、不容何病、不容然後見君子。夫道之不脩也、是吾醜也。夫道既已大脩而不用、是有國者之醜也。不容何病、不容然後見君子。」孔子欣然而笑曰、「有是哉顏氏之子。使爾多財、吾爲爾宰。」 [7]

[5] 孔子遷于蔡三歲 「三歲」は哀四～哀六を數える。これも『論語』子路・『孟子』萬章下の「三年」を適用したものであろう。

[6] 吳伐陳 『左傳』哀六「吳伐陳、復脩舊怨也。楚子曰、「吾先君與陳有盟、不可以不救。」乃救陳、師于城父」。

[7] 聞孔子在陳蔡之間 孔子世家は、楚昭王の招聘に應えて「楚」に適こうとした孔子を陳・蔡が包圍したとする。楚昭王の孔子招聘は、他の文獻はもとより、『史記』の他の部分にも見えない。そもそも、

(潁公)十三年、吳復來伐陳、陳告急楚、楚昭王來救、軍於城父、吳師去。是年、楚昭王卒於城父。時孔子在陳。(陳世家)

二十七年春、吳伐陳、楚昭王救之、軍城父。十月、昭王病於軍中、有赤雲如鳥、夾日而蜚。昭王問周太史、太史曰、「是害於楚王、然可移於將相。」將相聞是言、乃請自以身禱於神。昭王曰、「將相、孤之股肱也、今移禍、庸去是身乎。」弗聽。卜而河爲祟、大夫請禱河。昭王曰、「自吾先王受封、望不過江・漢、而河非所獲罪也。」止不許。孔子在陳、聞是言、曰、「楚昭王通大道矣。其不失國、宜哉。」(楚世家)

は、『左傳』哀六

吳伐陳、復脩舊怨也。楚子曰、「吾先君與陳有盟、不可以不救。」乃救陳、師于城父。…秋七月、楚子在城父、將救陳。卜戰、不吉。卜退、不吉。王曰、「然則死也。再敗楚師、不如死。棄盟、逃讎、亦不如死。死一也、其死讎乎。」命公子申爲王、不可。則命公子結、亦不可。則命公子啟、五辭而後許。將戰、王有疾。庚寅、昭王攻大冥、卒于城父。子閻退、曰、「君王舍其子而讓、群臣敢忘君乎。從君之命、順也。立君之子、亦順也。二順不可失也。」與子西・子期謀、潛師、閉塗、逆越女之子章立之、而後還。是歲也、有雲如眾赤鳥、夾日以飛三日。楚子使問諸周大史。周大史曰、「其當王身乎。若禱之、可移於令尹・司馬。」王曰、「除腹心之疾、而實諸股肱、何益。不穀不有大過、天其夭諸。有罪受罰、又焉移之。」遂弗禱。初、昭王有疾、卜曰、「河爲祟。」王弗祭。大夫請祭諸郊、王曰、「三代命祀、祭不越望。江・漢・雎・漳、楚之望也。禍福之至、不是過也。不穀雖不德、河非所獲罪也。」遂弗祭。孔子曰、「楚昭王知大道矣。其不失國也、宜哉。夏書曰、惟彼陶唐、帥彼天常、有此冀方。今失其行、亂其紀綱、乃滅而亡。又曰、允出茲在茲。由己率常、可矣。」

に據り、これらは哀六の楚昭王出兵の際の「孔子在陳」を記す。哀三に孔子が陳にあったことは『左傳』哀三「孔子在陳」に明文があるので、哀六の「孔子曰」も引き續き「孔子在陳」と判断したものであろう。孔子世家は陳世家・楚世家の段階の判断を全く放棄しているのである。やはり劇的な場面を選好したためである。

「絶糧」の出典である『論語』衛靈公

在陳絶糧、從者病、莫能興。子路愠見曰、「君子亦有窮乎。」子曰、「君子固窮、小人窮斯濫矣。」

に「在陳絶糧」とあり、『孟子』盡心下「君子之厄於陳蔡之間、無上下之交也」にはさ

らに「陳蔡之間」という表現が見えるが、陳・蔡による包圍は読み取れない。「圍」という表現は上掲の『莊子』外篇/天運「圍於陳蔡之間」によようやく初見するのである。

「賜爾以予爲多學而識之者與」は、『論語』衛靈公

子曰、「賜也、女以予爲多學而識之者與。」對曰、「然、非與。」曰、「非也、予一以貫之。」

に據る。『論語』衛靈公で「在陳絕糧」章の次に置かれていることから、ここに置かれたものであろう。

「孔子知弟子有愠心」以下は、『荀子』宥坐

孔子南適楚、厄於陳蔡之間、七日不火食、藜羹不糝、弟子皆有飢色。子路進而問之曰、「由聞之、爲善者天報之以福、爲不善者天報之以禍、今夫子累德積義懷美、行之日久矣、奚居之隱也。」孔子曰、「由不識、吾語女。女以知者爲必用邪。王子比干不見剖心乎。女以忠者爲必用邪。關龍逢不見刑乎。女以諫者爲必用邪。吳子胥不磔姑蘇東門外乎。夫遇不遇者、時也。賢不肖者、材也。君子博學深謀、不遇時者多矣。由是觀之、不遇世者眾矣、何獨丘也哉。且夫芷蘭生於深林、非以無人而不芳。君子之學、非爲通也、爲窮而不困、憂而意不衰也、知禍福終始而心不惑也。夫賢不肖者、材也。爲不爲者、人也。遇不遇者、時也。死生者、命也。今有其人、不遇其時、雖賢、其能行乎。苟遇其時、何難之有。故君子博學深謀、修身端行、以俟其時。」

に比干が見え、あるいは『莊子』雜篇/讓王

孔子窮於陳蔡之間、七日不火食、藜羹不糝、顏色甚憊、而弦歌於室。顏回擇菜、子路、子貢相與言曰、…

に子路・子貢・顔回が登場するが*128、直接對應する記述は他の文献には見えない。

於是使子貢至楚。楚昭王興師迎孔子、然後得免。昭王將以書社地七百里封孔子。楚令尹子西曰、「王之使使諸侯有如子貢者乎。」曰、「無有。」「王之輔相有如顔回者乎。」曰、「無有。」「王之將率有如子路者乎。」曰、「無有。」「王之官尹有如宰予者乎。」曰、「無有。」

*128 『荀子』子道「子路入、子曰、「由。知者若何。仁者若何。」…」・『韓詩外傳』卷七「孔子遊於景山之上、子路・子貢・顔淵從。…」・卷九「子路曰、「人善我、我亦善之。人不善我、我不善之。」…」は孔子世家と同様に子路・子貢・顔回が孔子の同じ質問に答える、あるいは類似の發言を反復するという形式を採る。

「且楚之祖封於周、號爲子男五十里。今孔丘述三五之法、明周召之業、王若用之、則楚安得世世堂堂方數千里乎。夫文王在豐、武王在鎬、百里之君卒王天下。今孔丘得據土壤、賢弟子爲佐、非楚之福也。」昭王乃止 [8]。其秋、楚昭王卒于城父 [9]。

[8] 於是使子貢至楚 「至楚」とあるが、孔子世家自身が明記するように、楚昭王は城父にあった。城父は『左傳』

二月庚申、楚公子棄疾遷許于夷、實城父。取州來、淮北之田以益之、伍舉授許男田。然丹遷城父人於陳、以夷濮西田益之。遷方城外於許。(昭九)

費無極言於楚子曰、「晉之伯也、邇於諸夏、而楚辟陋、故弗能與爭。若大城城父、而實大子焉、以通北方、王收南方、是得天下也。」王說、從之。故太子建居于城父。(昭十九)

費無極言於楚子曰、「建與伍奢將以方城之外叛、自以爲猶宋・鄭也、齊・晉又交輔之、將以害楚。其事集矣。」王信之、…使城父司馬奮揚殺大子、未至、而使遣之。

三月、大子建奔宋。王召奮揚、奮揚使城父人執己以至。(昭二十)

に楚の邑として見える。陳・蔡（州來）の中間、正に「陳蔡之間」にある。楚世家*129は昭二十を、伍子胥列傳*130は昭十九・昭二十を引用し、そこには城父が見え、『史記』は城父の位置を認知していたものと思われる。楚昭王の城父進出に示唆を得て、孔子世家は哀六に陳蔡の「圍」を置いたのであろう。

「書社」は『左傳』哀十五

昔晉人伐衛、齊爲衛故、伐晉冠氏、喪車五百。因與衛地、自濟以西、漵・媚・杏以南、書社五百。

に初見し、昭二十五「自莒疆以西、請致千社（注「二十家爲社。千社、二萬五千家、欲以給公。）」」では「社」と稱する。ついで戦國後期の文献に散見する*131。『史記索隱』は、

*129 『史記』楚世家「(六) [七] 年、使太子建居城父、守邊」。

*130 『史記』伍子胥列傳「頃之、無忌又日夜言太子短於王曰、「太子以秦女之故、不能無怨望、願王少自備也。自太子居城父、將兵、外交諸侯、且欲入爲亂矣。」平王乃召其太傅伍奢考問之。伍奢知無忌讒太子於平王、因曰、「王獨奈何以讒賊小臣疏骨肉之親乎。」無忌曰、「王今不制、其事成矣。王且見禽。」於是平王怒、囚伍奢、而使城父司馬奮揚往殺太子。行未至、奮揚使人先告太子、「太子急去、不然將誅。」太子建亡奔宋」。

*131 『管子』小稱「公子開方以書社七百下衛矣」・版法解「武王伐紂、士卒往者、人有書社」・『晏子春秋』內篇雜下「以書社五百封管仲」（二見）・『商君書』賞刑「武王與紂戰於牧野之中、大

古者二十五家爲里、里則各立社、則書社者、書其社之人名於籍。蓋以七百里書社之人封孔子也、

と説明する。「二十五家爲里」は『周禮』地官/遂人「五家爲鄰、五鄰爲里」に、「里則各立社」は『禮記』祭法「大夫以下成群立社、曰置社」注「群、眾也。大夫以下、謂下至庶人也。大夫不得特立社、與民族居。百家以上則共立一社、今時里社是也。郊特牲曰、唯爲社事單出里」に據るものであり、訓詁學的説明であるに過ぎない。

令尹子西は、昭王の庶兄、『左傳』では昭二十六に初見し^{*132}、定四の令尹子常の逃亡ののち、定六に令尹として見える。哀十六の白公勝の亂で殺害されている。『論語』憲問

或問子産。子曰、「惠人也。」問子西。曰、「彼哉。彼哉。」問管仲。曰、「人也。奪伯氏駢邑三百、飯疏食、沒齒、無怨言。」

の子西につき『論語集解』に

馬曰、「子西、鄭大夫。彼哉彼哉、言無足稱。」或曰、「楚令尹子西。」

とあるが、劉寶楠『論語正義』

實則鄭子西無行事可稱、楚子西有遜國之美德、昭王復國、改紀其政、亦有大功、故或人問也。

に従うべきであろう。

子西の發言は、『韓詩外傳』卷四の春申君・荀子の説話を換骨奪胎したもののようにある。

破九軍、卒裂土封諸侯、士卒坐陳者里有書社、…自士卒坐陳者、里有書社・『呂氏春秋』慎大「三日之内、與謀之士封爲諸侯、諸大夫賞以書社、庶士施政去賦」・知接「衛公子啟方以書社四十下衛」・高義「子之師苟肯至越、請以故吳之地、陰江之浦、書社三百、以封夫子」・『大戴禮』千乘「千乘之國、受命於天子、通其四疆、教其書社、循其灌廟、建其宗主、設其四佐、列其五官、處其朝市、爲仁如何」

*132 『左傳』昭二十六「九月、楚平王卒。令尹子常欲立子西、曰、「大子壬弱、其母非適也、王子建實聘之。子西長而好善。立長則順、建善則治。王順、國治、可不務乎。」子西怒曰、「是亂國而惡君王也。國有外援、不可瀆也。王有適嗣、不可亂也。敗親、速讎、亂嗣、不祥。我受其名。賂吾以天下、吾滋不從也。楚國何爲。必殺令尹。」令尹懼、乃立昭王」。

『韓非子』 姦劫弑臣	『韓詩外傳』 卷四	『戰國策』 楚策四
<p>諺曰、厲憐王。此不恭之言也。雖然、古無虛諺、不可不察也。此謂劫殺死亡之主言也。人主無法術以御其臣、雖長年而美材、大臣猶將得勢擅事主斷、而各爲其私急。而恐父兄豪傑之士、借人主之力、以禁誅於己也、故弑賢長而立幼弱、廢正的而立不義。</p> <p>故春秋記之曰、楚王子圍將聘於鄭、未出境、聞王病而反、因入問病、以其冠纓絞王而殺之、遂自立也。齊崔杼、其妻美、而莊公通之、數如崔氏之室、及公往、崔子之徒賈舉率崔子之徒而攻公、公入室、請與之分國、崔子不許、公請自刃於廟、崔子又不聽、公乃走踰於北牆、賈舉射公、中其股、公墜、崔子之徒以戈斫公而死之、而立其弟景公。</p>	<p>客有說春申君者曰、「湯以七十里、文王百里、皆兼天下、一海內。今夫孫子者、天下之賢人也、君藉之百里之勢、臣竊以爲不便於君。若何。」春申君曰、「善。」於是使人謝孫子、去而之趙、趙以爲上卿。客又說春申君曰、「昔伊尹去夏之殷、殷王而夏亡。管仲去魯而入齊、魯弱而齊強。由是觀之、夫賢者之所在、其君未嘗不善、其國未嘗不安也。今孫子天下之賢人、何謂辭而去。」春申君又云、「善。」於是使使請孫子。孫子爲書謝之曰、「鄙語曰、厲憐王。此不恭之語也、雖然、不可不審也、比爲劫殺死亡之主言者也、夫人主年少而放、無術以知奸、即大臣以專斷圖私、以禁誅於己也、故捨賢長而立幼弱、廢正適而立不義。</p> <p>故春秋志之、曰、楚王之子圍聘於鄭、未出境、聞王疾、返問疾、遂以冠纓絞王而殺之、因自立。齊崔杼之妻美、莊公通之。崔杼帥其黨而攻莊公、公請與分國、崔杼不許。欲自刃於廟、崔杼又不許。莊公走出、踰於外牆、射中其股、遂殺之、而立其弟景公。</p>	<p>客說春申君曰、「湯以亳、武王以鄙、皆不過百里以有天下。今孫子、天下賢人也、君籍之以百里勢、臣竊以爲不便於君。何如。」春申君曰、「善。」於是使人謝孫子。孫子去之趙、趙以爲上卿。客又說春申君曰、「昔伊尹去夏入殷、殷王而夏亡。管仲去魯入齊、魯弱而齊強。夫賢者之所在、其君未嘗不尊、國未嘗不榮也。今孫子、天下賢人也。君何辭之。」春申君又曰、「善。」於是使人請孫子於趙。孫子爲書謝曰、「厲人憐王、此不恭之語也。雖然、不可不審察也。此爲劫弑死亡之主言也。夫人主年少而矜材、無法術以知奸、則大臣主斷國私以禁誅於己也、故弑賢長而立幼弱、廢正適而立不義。</p> <p>春秋戒之曰、楚王子圍聘於鄭、未出竟、聞王病、反問疾、遂以冠纓絞王、殺之、因自立也。齊崔杼之妻美、莊公通之。崔杼帥其君黨而攻。莊公請與分國、崔杼不許。欲自刃於廟、崔杼不許。莊公走出、踰於外牆、射中其股、遂殺之、而立其弟景公。</p>

<p>近之所見、李兌之用趙也、餓主父百日而死。卓齒之用齊也、擢潛王之筋、懸之廟梁、宿昔而死。故厲雖癰腫疔瘍、上比於春秋、未至於絞頸射股也。下比於近世、未至餓死擢筋也。故劫殺死亡之君、此其心之憂懼、形之苦痛也、必甚於厲矣。由此觀之、雖厲憐王可也。</p>	<p>近世所見、李兌用趙、餓主父於沙丘、百日而殺之。卓齒用齊、擢閔王之筋而懸之於廟、宿昔而殺之。夫厲雖癰腫疔瘍、上比遠世、未至於絞頸射股也、下比近世、未至擢筋餓死也。夫劫殺死亡之主、心之憂勞、形之苦痛、必甚於厲矣。由此觀之、厲雖憐王、可也。」 因為賦曰、「璇玉瑤珠不知珮、雜布與錦不知異、閭姬子都莫之媒、嫫母力父是之喜。以盲爲明、以聾爲聰。以是爲非、以吉爲凶。嗚呼。上天。曷爲其同。」詩曰、「上帝甚蹈、無自療焉。」</p>	<p>近代所見、李兌用趙、餓主父於沙丘、百日而殺之。卓齒用齊、擢閔王之筋、懸於其廟梁、宿夕而死。夫厲雖癰腫疔疾、上比前世、未至於絞頸射股。下比近代、未至擢筋而餓死也。夫劫殺死亡之主也、心之憂勞、形之困苦、必甚於厲矣。由此觀之、厲雖憐王可也。」 因為賦曰、「寶珍隋珠、不知佩兮。禕布與絲、不知異兮。閭姝子奢、莫知媒兮。嫫母求之、又甚喜之兮。以瞽爲明、以聾爲聰、以是爲非、以吉爲凶。嗚呼上天、曷惟其同。」詩曰、「上天甚神、無自療也。」</p>
--	--	--

子貢・顔回・子路・宰予を並べることは、『呂氏春秋』慎人に見えるが、その原資料と思われる『莊子』雜篇／讓王は、「宰予備矣」を「顔色甚憊」に作る^{*133}。あるいは「顔色」を「顔回」に誤寫した上で、重複を嫌って「宰予」に改めたものかも知れない。

『莊子』雜篇／讓王	『呂氏春秋』慎人
孔子窮於陳蔡之間、七日不火食、藜羹不糝、顔色甚憊、而弦歌於室。顔回擇菜、子路、子貢相與言曰、	孔子窮於陳、蔡之間、七日不嘗食、藜羹不糝。宰予備矣、孔子弦歌於室、顔回擇菜於外。子路與子貢相與而言曰、

『孟子』萬章下に

天子之制、地方千里、公侯皆方百里、伯七十里、子男五十里、凡四等。不能五十里、不達於天子、附於諸侯、曰附庸。

とあり、『春秋經』が楚王を「楚子」と稱することから、楚の初封を「子男五十里」とする言説が発生する。孔子世家を除けば、『史記』楚世家

*133 錢穆『先秦諸子繫年』27 宰我死齊考。

熊繹當周成王之時、舉文・武勤勞之後嗣、而封熊繹於楚蠻、封以子男之田、姓
聿氏、居丹陽。

楚熊通怒曰、「吾先鬻熊、文王之師也、蚤終。成王舉我先公、乃以子男田令居楚、
蠻夷皆率服、而王不加位、我自尊耳。」

に「子男之田」が見える。孔子世家の原資料に「子男」がすでに用いられていたのか、
孔子世家の段階で潤色されたのか、確言できない。

三皇五帝は『莊子』外篇 / 天運

孔子西遊於衛、顔淵問師金曰、…故夫三皇五帝之禮義法度、不矜於同而矜於治。
故譬三皇五帝之禮義法度、其猶狙梨橘柚邪。

が最も早い事例の一つであるが、「今孔丘述三五之法」の如く、三皇五帝を「三五」と
略稱することは、『尚書大傳』略説下「天地人之道備、而三五之運興矣」に初見する。「明
周召之業」の如く、孔子を「周召」と關聯附けることは、『莊子』外篇 / 天運

孔子謂老聃曰、「丘治詩・書・禮・樂・易・春秋六經、自以爲久矣、孰知其故矣。
以奸者七十二君、論先王之道而明周・召之跡、一君無所鈎用。甚矣夫。人之難説也、
道之難明邪。」

に見える。

文王・武王を方百里より興ったとすることは、『孟子』公孫丑上「然而文王猶方百里
起、是以難也」「以德行仁者王、王不待大、湯以七十里、文王以百里」に初見する。

楚の領域を方數千里とすることは、『墨子』公輸「荆之地、方五千里」に初見する。

[9] 楚昭王卒于城父 『左傳』哀六「秋七月、楚子在城父、…庚寅、昭王攻大冥、卒
于城父」。

楚狂接輿歌而過孔子、曰、「鳳兮鳳兮、何德之衰。往者不可諫兮、來者猶可追也。已而
已而、今之從政者殆而。」孔子下、欲與之言。趨而去、弗得與之言 [10]。於是孔子自
楚反乎衛。是歲也、孔子年六十三、而魯哀公六年也 [11]。

[10] 楚狂接輿歌而過孔子 『論語』微子「楚狂接輿歌而過孔子曰、「鳳兮。鳳兮。何
德之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而、已而。今之從政者殆而。」孔子下、欲與之言。
趨而辟之、不得與之言」。

[11] 於是孔子自楚反乎衛 第三回目の適衛を、衛世家「(出公) 八年、齊鮑子弒其

君悼公。孔子自陳入衛・衛表「八 孔子自陳來」が衛出公八年（哀十・前 485）に繋げ、陳から衛に適ったとするのに對し、孔子世家が哀六に「楚」から衛に適ったとするのは、まずは陳・蔡による包圍ののち、「楚」から陳に戻るといったシナリオが成り立ちがなくなったためである。

一方で、『論語』述而

冉有曰、「夫子爲衛君乎。」子貢曰、「諾。吾將問之。」入、曰、「伯夷・叔齊何人也。」曰、「古之賢人也。」曰、「怨乎。」曰、「求仁而得仁、又何怨。」出、曰、「夫子不爲也。」（注「鄭曰、爲猶助也。衛君者、謂輒也。衛靈公逐太子蒯聩、公薨而立孫輒。後晉趙鞅納蒯聩於戚、城衛石曼姑帥師圍之、故問其意助輒不乎。」）

には、孔子が衛出公（前 492～前 480）のもとにあった時に、子貢・冉有が同行していたことが見える。後述の如く子貢は、哀七（前 488）にすでに魯に戻っているので、この記述は、孔子の第三回適衛を哀六とすることに適合する。

また、仲尼弟子列傳

子路爲蒲大夫、辭孔子。孔子曰、「蒲多壯士、又難治。然吾語汝、恭以敬、可以執勇。寬以正、可以比眾。恭正以靜、可以報上。」

に子路が蒲大夫をつとめたことが見え、『韓詩外傳』卷六には「子路治蒲三年」とある*134。孔子・子路が衛に三年以上滞在したことを前提とする記述であり、やはり第三回適衛を哀六～哀十一とする孔子世家の記述に適合的である。

●哀七（前 488）六十四歳

其明年、吳與魯會繪、徵百牢。太宰嚭召季康子。康子使子貢往、然後得已 [1]。

[1] 吳與魯會繪 『左傳』哀七

夏、公會吳于鄆。吳來徵百牢、子服景伯對曰、「先王未之有也。」吳人曰、「宋百牢我、魯不可以後宋。且魯牢晉大夫過十、吳王百牢、不亦可乎。」景伯曰、「晉范鞅貪而棄禮、以大國懼敝邑、故敝邑十一牢之。君若以禮命於諸侯、則有數矣。若亦棄禮、

*134 『韓詩外傳』卷六「子路治蒲三年、孔子過之。入境而善之、曰、「善哉。由恭敬以信矣。」入邑、曰、「善哉。由忠信以寬矣。」至其庭、曰、「善哉。由明察以斷矣。」子貢執轡而問曰、「夫子未見由、而三稱善、可得聞乎。」孔子曰、「我入其境、田疇甚易、草萊甚辟、此恭敬以信、故民盡力。入其邑、墉屋甚尊、樹木甚茂、此忠信以寬、故其民不偷。入其庭、甚閑、故其民不擾也。」詩曰、「夙興夜寐、灑掃庭內。」」。

則有淫者矣。周之王也、制禮、上物不過十二、以爲天之大數也。今棄周禮、而曰必百牢、亦唯執事。」吳人弗聽。景伯曰、「吳將亡矣。棄天而背本。不與、必棄疾於我。」乃與之。大宰嚭召季康子、康子使子貢辭。大宰嚭曰、「國君道長、而大夫不出門、此何禮也。」對曰、「豈以爲禮。畏大國也。大國不以禮命於諸侯、苟不以禮、豈可量也。寡君既共命焉、其老豈敢棄其國。大伯端委以治周禮、仲雍嗣之、斷髮文身、贏以爲飾、豈禮也哉。有由然也。」反自郟、以吳爲無能爲也。

に據る。

吳が北上を開始し、哀六（前489）、桓で魯と會する。哀七（前488）の郟の會で、魯は吳に従屬した。子貢は吳の大宰嚭との交渉に当たっており、この時點で大夫に復歸している。

同年、魯が邾を併合する。晉の霸權が解體し、同盟内平和が消失した結果、上述の鄭による許の併合（定六・前504）のほか、衛の曹侵攻（定十二・前498～定十三・前497）、宋の曹侵攻・併合（哀三・前492～哀八・前487）など有力諸侯による小國への侵略が相次いだ。魯の邾侵攻も哀元（前494）に始まり、この年に至ってついに併合したのである。ところが、これを吳が問責し、『左傳』哀八（前487）に、

吳爲邾故、將伐魯、問於叔孫輒。叔孫輒對曰、「魯有名而無情、伐之、必得志焉。」退而告公山不狃。公山不狃曰、「非禮也。君子違、不適讎國。未臣而有伐之、奔命焉、死之可也。所託也則隱。且夫人之行也、不以所惡廢鄉。今子以小惡而欲覆宗國、不亦難乎。若使子率、子必辭。王將使我。」子張疾之。王問於子洩、對曰、「魯雖無與立、必有與斃。諸侯將救之、未可以得志焉。晉與齊・楚輔之、是四讎也。夫魯、齊・晉之脣、脣亡齒寒、君所知也。不救何爲。」三月、吳伐我、子洩率、故道險、從武城。初、武城人或有因於吳竟田焉、拘郟謁之漚菅者、曰、「何故使吾水滋。」及吳師至、拘者道之以伐武城、克之。王犯嘗爲之宰、澹臺子羽之父好焉、國人懼。懿子謂景伯、「若之何。」對曰、「吳師來、斯與之戰、何患焉。且召之而至、又何求焉。」吳師克東陽而進、舍於五梧。明日、舍於蠶室。公賓庚、公甲叔子與戰于夷、獲叔子與析朱鉏、獻於王、王曰、「此同車、必使能、國未可望也。」明日、舍于庚宗、遂次於泗上。微虎欲宵攻王舍、私屬徒七百人三踊於幕庭、卒三百人、有若與焉。及稷門之內、或謂季孫曰、「不足以害吳、而多殺國士、不如已也。」乃止之。吳子

聞之、一夕三遷。吳人行成、將盟、景伯曰、「楚人圍宋、易子而食、析骸而爨、猶無城下之盟。我未及虧、而有城下之盟、是棄國也。吳輕而遠、不能久、將歸矣、請少待之。」弗從。景伯負載、造於萊門。乃請釋子服何於吳、吳人許之、以王子姑曹當之、而後止。吳人盟而還。

と見えるように、呉は魯を伐ち、邾を再建している。この時點で、定十二（前 498）に齊に亡命した公山不狃・叔孫輒が呉に仕えており、對するに魯の側には、孔子の關係者として澹臺子羽の父と有若が見える。仲尼弟子列傳「有若少孔子四十三歲」によれば、有若は定二（前 508）生、この年二十一歳である。孔子歸國後の入門であろう。

●哀十（前 485）六十七歳

孔子曰、「魯衛之政、兄弟也。」[1] 是時、衛君輒父不得立、在外、諸侯數以爲讓。而孔子弟子多仕於衛、衛君欲得孔子爲政。子路曰、「衛君待子而爲政、子將奚先。」孔子曰、「必也正名乎。」子路曰、「有是哉、子之迂也。何其正也。」孔子曰、「野哉由也。夫名不正則言不順、言不順則事不成、事不成則禮樂不興、禮樂不興則刑罰不中、刑罰不中則民無所錯手足矣。夫君子爲之必可名、言之必可行。君子於其言、無所苟而已矣。」[2]

[1] 魯衛之政 『論語』子路「子曰、「魯衛之政、兄弟也。』」。

[2] 子路曰 『論語』子路「子路曰、「衛君待子而爲政、子將奚先。」子曰、「必也正名乎。」子路曰、「有是哉、子之迂也。奚其正。」子曰、「野哉由也。君子於其所不知、蓋闕如也。名不正、則言不順。言不順、則事不成。事不成、則禮樂不興。禮樂不興、則刑罰不中。刑罰不中、則民無所措手足。故君子名之必可言也、言之必可行也。君子於其言、無所苟而已矣。』」。

下文冒頭に「其明年」を置き、哀十一の事件を記すので、この部分は哀十に屬することになる。年次が脱落しているのである。上述の如く、孔子世家は哀六に「楚」から衛に適ったことになっているが、それ以降、哀十まで空白なのである。孔子世家が第三回適衛の事跡を哀十から始めることは、哀十に適衛を置く衛世家・衛表の認識を踏襲したものといえる。

●哀十一（前 484）六十八歳

其明年、冉有爲季氏將師、與齊戰於郎、克之。季康子曰、「子之於軍旅、學之乎。性之乎。」冉有曰、「學之於孔子。」季康子曰、「孔子何如人哉。」對曰、「用之有名。播之百姓、

質諸鬼神而無憾。求之至於此道、雖累千社、夫子不利也。」康子曰、「我欲召之、可乎。」對曰、「欲召之、則毋以小人固之、則可矣。」[1] 而衛孔文子將攻太叔、問策於仲尼。仲尼辭不知、退而命載而行、曰、「烏能擇木、木豈能擇烏乎。」文子固止。會季康子（逐）[使] 公華・公寶・公林、以幣迎孔子、孔子歸魯。孔子之去魯凡十四歲而反乎魯 [2]。

[1] 冉有爲季氏將師 『左傳』 哀十一

十一年春、齊爲郟故、國書・高無丕帥師伐我、及清。季孫謂其宰冉求（注「冉求、魯人、孔子弟子。」）、曰、「齊師在清、必魯故也、若之何。」求曰、「一子守、二子從公禦諸竟。」季孫曰、「不能。」求曰、「居封疆之間。」季孫告二子、二子不可。求曰、「若不可、則君無出。一子帥師、背城而戰、不屬者、非魯人也。魯之群室眾於齊之兵車、一室敵車優矣、子何患焉。二子之不欲戰也宜、政在季氏。當子之身、齊人伐魯而不能戰、子之恥也大、不列於諸侯矣。」季孫使從於朝、俟於黨氏之溝。武叔呼而問戰焉、對曰、「君子有遠慮、小人何知。」懿子強問之、對曰、「小人慮材而言、量力而共者也。」武叔曰、「是謂我不成丈夫也。」退而蒐乘。孟孺子洩帥右師、顏羽御、邴洩爲右（注「二子、孟氏臣。」）。冉求帥左師、管周父御、樊遲爲右（注「樊遲、魯人、孔子弟子樊須。」）。季孫曰、「須也弱。」有子*135 曰、「就用命焉（注「有子、冉求也。」）。」季氏之甲七千、冉有以武城人三百爲己徒卒、老幼守宮、次于雩門之外。五日、右師從之。公叔務人（注「務人、公爲、昭公子。」）見保者而泣、曰、「事充、政重、上不能謀、士不能死、何以治民。吾既言之矣、敢不勉乎。」師及齊師戰于郊*136。齊師自稷曲、師不踰溝。樊遲曰、「非不能也、不信子也、請三刻而踰之。」如之、眾從之。師入齊軍。右師奔、齊人從之。陳瓘・陳莊涉泗。孟之側後入以爲

*135 劉廙『春秋權衡』卷七「按、有子當爲子有。子有者、冉求字也。仲尼門人字多云子某者、不得云有子也。傳寫誤之矣」に對し、『會箋』は「然古人於字下加子字、如匡章稱章子、田盼稱盼子、田嬰稱嬰子、田文稱文子、魏冉稱冉子、此類甚多。冉有稱有子、不必倒轉也」と反駁するが當らない。「章子」などは「諱+子」であり、「字+子」ではない。吉本「墨子兵技巧諸篇小考」（『東洋史研究』62-2、2003）に指摘したように、「諱+子」は田氏（陳氏）宗室の大臣が多く、「田子」（陳子）では區別がつかないため用いられるようになった戰國齊に出自する稱謂である。『左傳』には妥當しない。

*136 『禮記』檀弓下「戰于郎」注「郎、魯近邑也。哀十一年「齊國書帥師伐我」是也」疏「正義曰、案桓十年「齊侯・衛侯・鄭伯來戰於郎」、公羊傳云、「郎者何。吾近邑也。」哀十一年齊國書帥師伐我、戰於郊。是郊頭郎邑、故知近也。案春秋直云「戰於郊」、知與此戰於郎爲一事者、以其俱有童汪錡之事、故爲一也」。

殿（注「之側、孟氏族也、字反。」）、抽矢策其馬、曰、「馬不進也。」^{*137} 林不狃之伍曰、「走乎（注「不狃、魯士。」）。」不狃曰、「誰不如。」曰、「然則止乎。」不狃曰、「惡賢。」徐步而死。師獲甲首八十、齊人不能師。宵諜曰、「齊人遁。」冉有請從之三、季孫弗許。孟孺子語人曰、「我不如顏羽、而賢於邴洩。子羽銳敏、我不欲戰而能默、洩曰、驅之。」公爲與其嬖僮汪錡乘、皆死、皆殞。孔子曰、「能執干戈以衛社稷、可無殤也。」冉有用矛於齊師、故能入其軍。孔子曰、「義也。」^{*138}

に據る。「季康子曰」以下は他の文獻に見えない。

哀五（前 490）、齊では景公（前 547～前 490）の卒を契機に公位繼承紛争が勃發し、哀六（前 489）の悼公擁立に至った。悼公が魯に亡命していた際に、季康子は妹を嫁がせていた。悼公が歸國即位ののち、すでに季魴侯（杜注「魴侯、康子叔父」）に通じていた妹を送ることを拒んだため、哀八（前 487）、齊は魯を伐ち、さらに呉と提携した。ついで齊魯講和が成立したため、哀九（前 486 年）、齊は呉との提携を解消した。哀十（前 485）、呉は魯とともに齊に侵攻したが、このとき、齊悼公が弑殺されている。哀十一（前 484）、郎の戦で魯は齊を撃退した。

ここでは冉有が季氏の宰をつとめ、樊遲が見える。上述の如く、冉有は昭二十（前 522）生で三十九歳となる。樊遲は仲尼弟子列傳「樊須字子遲。少孔子三十六歳」によれば、昭二十七（前 515）生、三十二歳となり、「弱」とはいえない。『孔子家語』七十二弟子解「樊須、魯人、字子遲、少孔子四十六歳、弱仕於季氏」に従い、定五（前 505）生、二十二歳とすべきであろう^{*139}。これも孔子歸國後の入門であろう。

ついで艾陵の戦において、呉・魯は齊を大破した。『左傳』哀十一

將戰、吳子呼叔孫、曰、「而事何也。」對曰、「從司馬。」王賜之甲・劍・鉞、曰、「奉爾君事、敬無廢命。」叔孫未能對、衛賜進、曰、「州仇奉甲從君。」而拜。

には、子貢が叔孫武叔を補佐して呉王夫差に對えたことが見える。子貢・叔孫武叔の關係は、『論語』子張

*137 『論語』雍也「子曰、「孟之反不伐、奔而殿。將入門、策其馬、曰、非敢後也、馬不進也。」

*138 『禮記』檀弓下「戰于郎、公叔禺人遇負杖入保者息、曰、「使之雖病也、任之雖重也、君子不能爲謀也、士弗能死也。不可。我則既言矣。」與其鄰重汪錡往、皆死焉。魯人欲勿殤童汪錡、問於仲尼。仲尼曰、「能執干戈以衛社稷、雖欲勿殤也、不亦可乎。」

*139 錢穆『先秦諸子繫年』29 孔子弟子通考。

叔孫武叔語大夫於朝、曰、「子貢賢於仲尼。」子服景伯以告子貢。子貢曰、「譬之宮牆、賜之牆也及肩、窺見室家之好。夫子之牆數仞、不得其門而入、不見宗廟之美、百官之富。得其門者或寡矣。夫子之云、不亦宜乎。」

叔孫武叔毀仲尼。子貢曰、「無以爲也、仲尼不可毀也。他人之賢者、丘陵也、猶可踰也。仲尼、日月也、無得而踰焉。人雖欲自絕、其何傷於日月乎。多見其不知量也。」

にも見える*140。

[2] 而衛孔文子將攻太叔 衛世家「(出公)九年、孔文子問兵於仲尼、仲尼不對。其後魯迎仲尼、仲尼反魯」・衛表「九 孔子歸魯」・魯世家「(哀公)十一年、齊伐魯。季氏用冉有有功、思孔子、孔子自衛歸魯」・魯表「十一 齊伐我。冉有言、故迎孔子、孔子歸」にも見える。『左傳』哀十一

冬、衛大叔疾出奔宋。初、疾娶于宋子朝、其娣嬖。子朝出、孔文子使疾出其妻、而妻之。疾使侍人誘其初妻之娣寘於犁、而爲之一宮、如二妻。文子怒、欲攻之、仲尼止之。遂奪其妻。或淫于外州、外州人奪之軒以獻。恥是二者、故出。衛人立遺、使室孔姑。疾臣向魋、納美珠焉、與之城鉏。宋公求珠、魋不與、由是得罪。及桓氏出、城鉏人攻大叔疾、衛莊公復之、使處巢、死焉。殯於鄆、葬於少禘。

初、晉悼公子慙亡在衛、使其女僕而田、大叔懿子止而飲之酒、遂聘之、生悼子。悼子即位、故夏戊爲大夫。悼子亡、衛人翦夏戊。孔文子之將攻大叔也、訪於仲尼。仲尼曰、「胡簋之事、則嘗學之矣。甲兵之事、未之聞也。」退、命駕而行、曰、「鳥則擇木、木豈能擇鳥。」文子遽止之、曰、「圉豈敢度其私、訪衛國之難也。」將止、魯人以幣召之、乃歸。

に據る。『左傳』の孔文子との問答は、『論語』衛靈公

*140 ちなみに仲尼弟子列傳の子貢の部分には、子貢を主人公とする縦横家風の説話が見える。田常の魯侵略を憂慮した孔子の命で子貢が田常・吳王・越王・晉君に遊説し、その結果、「吳王果與齊人戰於艾陵、大破齊師、獲七將軍之兵而不歸、果以兵臨晉、與晉人相遇黃池之上。吳晉爭疆。晉人擊之、大敗吳師。越王聞之、涉江襲吳、去城七里而軍。吳王聞之、去晉而歸、與越戰於五湖。三戰不勝、城門不守、越遂圍王宮、殺夫差而戮其相。破吳三年、東向而霸越。故子貢一出、存魯、亂齊、破吳、彊晉而霸越。子貢一使、使勢相破、十年之中、五國各有變。」となったというものである。嘉瀬達男「『史記』子貢遊説説話の成立について」(『學林』27、1997)。

衛靈公問陳於孔子。孔子對曰、「俎豆之事、則嘗聞之矣。軍旅之事、未之學也。」

の異傳であろう*141。

「公華・公賓・公林」は孔子世家にしか見えない。「十四歳」は定十三～哀十一を数えたものである。

魯哀公問政、對曰、「政在選臣。」[3] 季康子問政、曰、「舉直錯諸枉、則枉者直。」[4] 康子患盜、孔子曰、「苟子之不欲、雖賞之不竊。」[5] 然魯終不能用孔子、孔子亦不求仕[6]。

[3] 魯哀公問政 『韓非子』難三「葉公子高問政於仲尼、仲尼曰、「政在悅近而來遠。」哀公問政於仲尼、仲尼曰、「政在選賢。」齊景公問政於仲尼、仲尼曰、「政在節財。」。

[4] 季康子問政 「季康子問政」は『論語』顏淵

季康子問政於孔子。孔子對曰、「政者、正也。子帥以正、孰敢不正。」

季康子問政於孔子曰、「如殺無道、以就有道、何如。」孔子對曰、「子爲政、焉用殺。

子欲善、而民善矣。君子之德風、小人之德草。草上之風、必偃。」

に二見し、「舉直錯諸枉、則枉者直」は同じく『論語』顏淵

樊遲問仁。子曰、「愛人。」問知。子曰、「知人。」樊遲未達。子曰、「舉直錯諸枉、能使枉者直。」樊遲退、見子夏。曰、「鄉也吾見於夫子而問知、子曰、「舉直錯諸枉、能使枉者直、何謂也。」子夏曰、「富哉言乎。舜有天下、選於眾、舉皋陶、不仁者遠矣。湯有天下、選於眾、舉伊尹、不仁者遠矣。」

に據る。

[5] 康子患盜 『論語』顏淵「季康子患盜、問於孔子。孔子對曰、「苟子之不欲、雖賞之不竊。」。

[6] 然魯終不能用孔子孔子亦不求仕 『左傳』には哀十一以降にも孔子の政治的活動が散見するが、孔子世家はこれらを一切採らず、孔子が「仕」えなかったとする。「孔子布衣」という前3世紀、『呂氏春秋』に初見する固定觀念を優先したものであり、孔子世家における意識的な資料の選別に留意すべきである。遡って前4世紀の『孟子』には、むしろ孔子の「仕」が頻見する*142。

*141 錢穆『先秦諸子繫年』20 孔子去衛適陳在衛靈公卒後非卒前辨。

*142 『孟子』滕文公上「周霄問曰、「古之君子仕乎。」孟子曰、「仕。傳曰、孔子三月無君、則皇

前3世紀の専制國家形成過程において、統治機構の官僚制化が急速に進行し、政治的權能が官職と不可分のものとなった結果、「仕」が官職の保有と等置され、司寇の如き官職が明示されない孔子は「仕」えていないという理解が生じたものと思われる。上述の如く、春秋期の統治機構はなお官僚制的編成が貫徹しておらず、官職ではなく身分が政治的權能を決定する。孔子がその晩年においても大夫身分を保持したことは上述の如くである。その限りにおいて孔子は一定の政治的權能を保持していたのであり、「仕」えなかったとすることは当たらない。

そもそも『左傳』哀十一（前484）に

季孫欲以田賦、使冉有訪諸仲尼。仲尼曰、「丘不識也。」三發、卒曰、「子爲國老、待子而行、若之何子之不言也。」仲尼不對、而私於冉有曰、「君子之行也、度於禮。施取其厚、事舉其中、斂從其薄。如是、則以丘亦足矣。若不度於禮、而貪冒無厭、則雖以田賦、將又不足。且子季孫若欲行而法、則周公之典在。若欲苟而行、又何訪焉。」弗聽。

とあり、孔子は「國老」として田賦につき答申を求められている。「國老」は、僖二十七

楚子將圍宋、使子文治兵於睥、終朝而畢、不戮一人。子玉復治兵於蔞、終日而畢、鞭七人、貫三人耳。國老皆賀子文、子文飲之酒。

にも見え、こちらでは「治兵」を「賀」することで令尹子文を翼賛している。孔穎達疏に「國之卿・大夫・士之致仕者也」とあるように、「國老」は、老齡をもって官職を辭したものに對する尊稱でもあり、特定の職掌を排他的に保有する官職ではない。『論語』子路

冉子退朝。子曰、「何晏也。」對曰、「有政。」（注「馬曰、政者、有所改更匡正。」）

子曰、「其事也」（注「馬曰、事者、凡行常事。」）。如有政、雖不吾以、吾其與聞之（注

皇如也。出疆必載質」・萬章下 / 公孫丑上「可以速而速、可以久而久、可以處而處、可以仕而仕、孔子也」・萬章下「（孟子）曰、「…孔子之仕於魯也、魯人獵較、孔子亦獵較。獵較猶可、而況受其賜乎。」（萬章）曰、「然則孔子之仕也、非事道與。」曰、「事道也。」「事道奚獵較也。」曰、「孔子先簿正祭器、不以四方之食供簿正。」曰、「奚不去也。」曰、「爲之兆也。兆足以行矣、而不行、而後去、是以未嘗有所終三年淹也。孔子有見行可之仕、有際可之仕、有公養之仕也。於季桓子、見行可之仕也。於衛靈公、際可之仕也。於衛孝公、公養之仕也。」・「孔子當仕有官職、而以其官召之也」。

「馬曰、如有政、非常之事、我爲大夫、雖不見任用、必當與聞之。』。』

の「事」は官職に基づく日常的な政務、對するに「政」は非常事態における政策決定であり、孔子は大夫身分の「國老」として、魯哀公・三桓の諮問に答申することで、「政」への参加を一貫して希望したのである。

「國老」としての孔子晩年の生活は經濟的には決して裕福ではなかったようである。ここで想起されるのは、『左傳』昭二十（前522）「衛公孟縶狎齊豹、奪之司寇與鄆、有役則反之、無則取之」である。齊豹は衛の卿であったが、「役」がある時に限って司寇の官職と鄆邑を與えられたというものである。卿の身分に相應の収入は一貫して保有したはずだが、それとは別に官職に隨伴する邑が存在したのである。春秋後期には卿・大夫の収入が身分ではなく官職に伴うものに轉換しつつあったのである。『論語』

顏淵死、顏路請子之車以爲之槨。子曰、「才不才、亦各言其子也。鯉也死、有棺而無槨^{*143}。吾不徒行以爲之槨。以吾從大夫之後、不可徒行也。」（先進）

子疾病、子路使門人爲臣。病間、曰、「久矣哉。由之行許也、無臣而爲有臣。吾誰欺。欺天乎。且予與其死於臣之手也、無寧死於二三子之手乎。且予縱不得大葬、予死於道路乎。」（子罕）

などは、官職をもたない孔子晩年の經濟的制約を伝えるものとなろう。

他方、孔子晩年の哀十一～十六において、孔門の登用が散見する。『左傳』には、子路・子貢・冉有・子羔が見え、『論語』には、

季康子問、「仲由可使從政也與。」子曰、「由也果、於從政乎何有。」曰、「賜也、可使從政也與。」曰、「賜也達、於從政乎何有。」曰、「求也、可使從政也與。」曰、「求也藝、於從政乎何有。」（雍也）

と、子路・子貢・冉有の「從政」能力が確認され、また

孟武伯問、「子路仁乎。」子曰、「不知也。」又問。子曰、「由也、千乘之國、可使

*143 孔鯉・顏回は士身分であり、戰國中期の『禮記』檀弓上「天子之棺四重」鄭注「諸公三重、諸侯再重、大夫一重、士不重」孔疏「士不重、又去屬唯單用大棺也」では單棺（「有棺而無槨」）と規定されている。一方で、袁勝文「棺槨制度的產生和演變述論」（『南開大學學報（哲學社會科學版）』2014-3）が指摘するように、春秋戰國の交より多重棺槨制度が展開し、戰國後期の『荀子』禮論「故天子棺槨七重、諸侯五重、大夫三重、士再重」は士を一槨一棺と規定するに至っている。顏回に槨が求められたのは、士に對する一槨一棺の最初期の事例となる。

治其賦也、不知其仁也。」(孔曰、「賦、兵賦。」「求也何如。」子曰、「求也、千室之邑、百乘之家、可使爲之宰也、不知其仁也。」「赤也何如。」子曰、「赤也、束帶立於朝、可使與賓客言也、不知其仁也。」「(公冶長)

では、子路・冉有・公西華の政治的適性が具體的に示されている。また、

子游爲武城宰。子曰、「女得人焉爾乎。」曰、「有澹臺滅明者、行不由徑。非公事、未嘗至於偃之室也。」(雍也)

子之武城、聞弦歌之聲。夫子莞爾而笑、曰、「割雞焉用牛刀。」子游對曰、「昔者偃也聞諸夫子曰、「君子學道則愛人、小人學道則易使也。」「子曰、「二三子。偃之言是也。前言戲之耳。」(陽貨)

では子游が武城宰をつとめ、澹臺滅明と知り合ったことが見える。仲尼弟子列傳「言偃、吳人、字子游。少孔子四十五歳」によれば子游は定四(前506)生、哀十一に二十三歳である。澹臺滅明は、仲尼弟子列傳「澹臺滅明、武城人、字子羽。少孔子三十九歳」によれば昭三十(前512)生、哀十一に二十九歳であり、こののち、子游の紹介で入門したものであろう。上掲『左傳』哀七(前488)に、澹臺滅明の父が見え、呉からの亡命者でもと武城宰であった王犯と親しかったため、呉が侵攻した際に、かれの内應を國人が憂慮したことが見える。父子ともに邑宰と親しかったのであり、武城の有力者であったと思われる。

ついで、

子夏爲莒父宰、問政。子曰、「無欲速、無見小利。欲速、則不達。見小利、則大事不成。」(子路)

には、子夏が莒父宰をつとめたことが見える。仲尼弟子列傳「卜商字子夏。少孔子四十四歳」によれば、子夏は定三(前507)生、哀十一には二十四歳である。

『左傳』哀十一にもうかがわれるように、孔子は季氏の宰としての冉有のあり方に批判的であった。『論語』の次の記述はそのことを示している。

季氏旅於泰山。子謂冉有曰、「女弗能救與。」對曰、「不能。」子曰、「嗚呼。曾謂泰山、不如林放乎。」(八佾)

冉求曰、「非不說子之道、力不足也。」子曰、「力不足者、中道而廢。今女畫。」(雍也)

季氏將伐顓臾。冉有・季路見於孔子曰、「季氏將有事於顓臾。」孔子曰、「求。無

乃爾是過與。夫顛與、昔者先王以爲東蒙主、且在邦域之中矣、是社稷之臣也。何以伐爲。」冉有曰、「夫子欲之、吾二臣者皆不欲也。」孔子曰、「求。周任有言曰、「陳力就列、不能者止。」危而不持、顛而不扶、則將焉用彼相矣。且爾言過矣。虎兕出於柙、龜玉毀於櫝中、是誰之過與。」冉有曰、「今夫顛與、固而近於費。今不取、後世必爲子孫憂。」孔子曰、「求。君子疾夫舍曰欲之、而必爲之辭。丘也聞有國有家者、不患寡而患不均、不患貧而患不安。蓋均無貧、和無寡、安無傾。夫如是、故遠人不服、則修文德以來之。既來之、則安之。今由與求也、相夫子、遠人不服而不能來也。邦分崩離析而不能守也。而謀動干戈於邦內。吾恐季孫之憂、不在顛與、而在蕭牆之內也。」(季氏)

ついに、

季氏富於周公、而求也爲之聚斂而附益之。子曰、「非吾徒也。小子鳴鼓而攻之、可也。」(『論語』先進)

求也爲季氏宰、無能改於其德、而賦粟倍他日。孔子曰、「求非我徒也、小子鳴鼓而攻之可也。」(『孟子』離婁上)

とあるように、孔子は冉有を破門してしまうのである。

『左傳』哀二十三(前472)

二十三年春、宋景曹卒。季康子使冉有弔、且送葬、曰、「敝邑有社稷之事、使肥與有職競焉、是以不得助執紼、使求從與人、曰、「以肥之得備彌甥也、有不腆先人之產馬、使求薦諸夫人之宰、其可以稱旌繁乎。」」

には、孔子の死後も冉有が引き續き季氏の宰をつとめたことが見える。

冉有は優れた「具臣」ではあったが「大臣」にはなりえなかったといったところであろう。

孔子之時、周室微而禮樂廢、詩書缺 [7]。追跡三代之禮、序書傳、上紀唐虞之際、下至秦繆、編次其事。曰、「夏禮吾能言之、杞不足徵也。殷禮吾能言之、宋不足徵也。足、則吾能徵之矣。」 [8] 觀殷夏所損益、曰、「後雖百世可知也、以一文一質。周監二代、郁郁乎文哉。吾從周。」 [9] 故書傳、禮記自孔氏。孔子語魯大師、「樂其可知也。始作翕如、縱之純如、噉如、繹如也、以成。」 [10] 「吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所。」 [11] 古者詩三千餘篇、及至孔子、去其重、取可施於禮義、上采契后稷、中述殷周之盛、

至幽厲之缺、始於衽席、故曰「關雎之亂 [12] 以爲風始、鹿鳴爲小雅始、文王爲大雅始、清廟爲頌始」。三百五篇孔子皆弦歌之、以求合韶武雅頌之音。禮樂自此可得而述、以備王道、成六藝。孔子晚而喜易 [13]、序彖・繫・象・說卦・文言。讀易、韋編三絕。曰、「假我數年、若是、我於易則彬彬矣。」 [14] 孔子以詩書禮樂教 [15]、弟子蓋三千焉、身通六藝者七十有二人 [16]。如顏濁鄒之徒、頗受業者甚眾。孔子以四教、文、行、忠、信 [17]。絕四、毋意、毋必、毋固、毋我 [18]。所慎、齊、戰、疾 [19]。子罕言利與命與仁 [20]。不憤不啟、舉一隅不以三隅反、則弗復也 [21]。

[7] 孔子之時 「周室微而禮樂廢、詩書缺」に類似の言説は、

孟子曰、「王者之跡熄、而詩亡、詩亡然後春秋作。晉之乘・楚之檮杌・魯之春秋、一也。其事則齊桓・晉文、其文則史。孔子曰、其義則丘竊取之矣。」(『孟子』離婁下) 王道缺而詩作、周室廢、禮義壞而春秋作。(『淮南子』汜論訓)

周室衰、禮義廢、孔子以三代之道教導於世、其後繼嗣至今不絕者、有隱行也。(人間訓)

に見え、また『史記』にも

太史公曰、余讀功令、至於廣厲學官之路、未嘗不廢書而歎也。曰、嗟乎。夫周室衰而關雎作、幽厲微而禮樂壞、諸侯恣行、政由疆國。故孔子閱王路廢而邪道興、於是論次詩書、修起禮樂。(儒林列傳)

幽厲之後、王道缺、禮樂衰、孔子脩舊起廢、論詩書、作春秋、則學者至今則之。(太史公自序)

周室既衰、諸侯恣行。仲尼悼禮廢樂崩、追脩經術、以達王道、匡亂世反之於正、見其文辭、爲天下制儀法、垂六藝之統紀於後世。作孔子世家第十七。(同)

が見える。

孔門が六經を教材としたことは、まず、『論語』に『詩』『書』『禮』『樂』『易』*144が、ついで『禮記』坊記に『魯春秋』*145が言及されるが、孔子がその編纂に携わったとすることは、『孟子』に『春秋』編纂が見えるのみである。孔子の六經編纂についての言説は、實は孔子世家が最も早い。建元五年(前136)の五經博士設置に至って、經の

*144 錢玄同「答顧頡剛先生書」(1923。『古史辨』2、樸社、1930)。

*145 吉本「曲禮考」(『中國古代禮制研究』、京都大學人文科學研究所、1995)。

傳授をいうことが一般化し、六經がすべて孔子に出自するという言説が発生したということであろう。

[8] 夏禮吾能言之 『論語』八佾「子曰、「夏禮、吾能言之、杞不足徵也。殷禮、吾能言之、宋不足徵也。文獻不足故也、足則吾能徵之矣。」」。

[9] 後雖百世可知也 『論語』爲政「子張問、「十世可知也。」子曰、「殷因於夏禮、所損益、可知也。周因於殷禮、所損益、可知也。其或繼周者、雖百世可知也。」」。

[10] 孔子語魯大師 『論語』八佾「子語魯大師樂。曰、「樂其可知也、始作、翕如也。從之、純如也、皦如也、繹如也、以成。」」。

[11] 吾自衛反魯 『論語』子罕「子曰、「吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所。」」に據る。儒林列傳にも「自衛返魯、然後樂正、雅頌各得其所」と見える。

[12] 關雎之亂 『論語』泰伯「子曰、「師摯之始、關雎之亂、洋洋乎。盈耳哉。」」。

[13] 孔子晚而喜易 『史記』田世家「太史公曰、蓋孔子晚而喜易」。

[14] 假我數年 『論語』述而「子曰、「加我數年、五十以學易、可以無大過矣。」」。

[15] 孔子以詩書禮樂教 『論語』述而「子所雅言、詩、書、執禮、皆雅言也」。

[16] 弟子蓋三千焉身通六藝者七十有二人 孔子の高弟を「七十」とすることは、『孟子』公孫丑上「以德服人者、中心悅而誠服也、如七十子之服孔子也」に、さらに「三千」は『呂氏春秋』遇合

孔子周流海内、再干世主、如齊至衛、所見八十餘君、委質爲弟子者三千人、達徒七十人、七十人者、萬乘之主得一人用可爲師、不爲無人、以此游僅至於魯司寇、此天子之所以時絕也、諸侯之所以大亂也。

に初見する。「七十有二」は、孔子世家に先立ち景帝末～武帝期の蜀郡守文翁の孔廟圖が「七十二人」としているが*146、仲尼弟子列傳「孔子曰、「受業身通者七十有七人」、皆異能之士也」は「七十有七」とする。

ちなみに「七十」は、『史記』十二諸侯年表「是以孔子明王道、干七十餘君、莫能用」・儒林列傳「是以仲尼干七十餘君無所遇」に孔子が「七十餘君」に遊説したとあり*147、遡っ

*146 『史記索隱』仲尼弟子列傳「唯文翁孔廟圖作七十二人。」。なお、文翁孔廟圖については、胡蘭江「文翁禮殿圖小考」（『中國典籍與文化』2002-3）参照。また「七十二」については聞一多「七十二」（1943。『聞一多全集』10、湖北人民出版社、1993）参照。

*147 『呂氏春秋』遇合「八十餘君」はあるいは「七」を「八」に誤寫したものであろう。

て、『莊子』外篇/天運

孔子謂老聃曰、「丘治詩・書・禮・樂・易・春秋六經、自以爲久矣、孰知其故矣。以奸者七十二君、論先王之道而明周・召之跡、一君無所鈎用。甚矣夫。人之難說也、道之難明邪。」

はこれを「七十二君」とする。過大な數字といわざるを得ないが^{s*148}、あるいは儒林列傳自孔子卒後、七十子之徒散游諸侯、大者爲師傅卿相、小者友教士大夫、或隱而不見。の「七十子之徒散游諸侯」から派生した言説かもしれない。

「三千」は

昔趙文王喜劍、劍士夾門而客三千餘人、日夜相擊於前、死傷者歲百餘人、好之不厭。（『莊子』雜篇/說劍）

當是時、魏有信陵君、楚有春申君、趙有平原君、齊有孟嘗君、皆下士喜賓客以相傾。呂不韋以秦之彊、羞不如、亦招致士、厚遇之、至食客三千人。（『史記』呂不韋列傳）

など戰國後期以降の王侯の門客に關聯して用いられる。

[17] 孔子以四教 『論語』述而「子以四教、文、行、忠、信」。

[18] 絕四 『論語』子罕「子絕四、毋意、毋必、毋固、毋我」。

[19] 所慎 『論語』述而「子之所慎、齊、戰、疾」。

[20] 子罕言利與命與仁 『論語』子罕に據る。『史記』外戚世家にも「孔子罕稱命、蓋難言之也」とある。

[21] 不憤不啟 『論語』述而「子曰、「不憤不啟、不悱不發、舉一隅不以三隅反、則不復也。」」。

其於鄉黨、恂恂似不能言者。其於宗廟朝廷、辯辯言、唯謹爾。朝、與上大夫言、闐闐如也。與下大夫言、侃侃如也 [22]。入公門、鞠躬如也 [23]。趨進、翼如也。君召使僕、色勃如也 [24]。君命召、不俟駕行矣 [25]。魚餒、肉敗、割不正、不食 [26]。席不正、不坐 [27]。食於有喪者之側、未嘗飽也 [28]。是日哭、則不歌 [29]。見齊衰、瞽者、雖童子必變 [30]。「三人行、必得我師。」 [31]「德之不脩、學之不講、聞義不能徙、不

*148 『史記索隱』儒林列傳「案、後之記者失辭也。案家語等說、云孔子歷聘諸國、莫能用、謂周・鄭・齊・宋・曹・衛・陳・楚・杞・莒・匡等。縱歷小國、亦無七十餘國也」。

善不能改、是吾憂也。」[32] 使人歌、善、則使復之、然后和之 [33]。子不語、怪、力、亂、神 [34]。子貢曰、「夫子之文章、可得聞也。夫子言天道與性命、弗可得聞也已。」[35] 顏淵喟然歎曰、「仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮、欲罷不能。既竭我才、如有所立、卓爾。雖欲從之、蔑由也已。」[36] 達巷黨人（童子）曰、「大哉孔子、博學而無所成名。」子聞之曰、「我何執。執御乎。執射乎。我執御矣。」[37] 牢曰、「子云、不試、故藝。」[38]

[22] 其於鄉黨 『論語』鄉黨「孔子於鄉黨、恂恂如也、似不能言者。其在宗廟朝廷、便便言、唯謹爾。朝、與下大夫言、侃侃如也。與上大夫言、誾誾如也。君在、蹏蹏如也。與與如也」。

[23] 入公門 『論語』鄉黨「入公門、鞠躬如也、如不容。立不中門、行不履闕。過位、色勃如也、足躩如也、其言似不足者。攝齊升堂、鞠躬如也、屏氣似不息者。出、降一等、逞顏色、怡怡如也。沒階趨、翼如也。復其位、蹏蹏如也」。

[24] 趨進 『論語』鄉黨「君召使擯、色勃如也、足躩如也。揖所與立、左右手。衣前後、襜如也。趨進、翼如也。賓退、必復命曰、「賓不顧矣。」」。

[25] 君命召 『論語』鄉黨「君命召、不俟駕行矣」。

[26] 魚餒 『論語』鄉黨「齊、必變食、居必遷坐。食不厭精、膾不厭細。食饁而餽、魚餒而肉敗、不食。色惡、不食。臭惡、不食。失飪、不食。不時、不食。割不正、不食。不得其醬、不食。肉雖多、不使勝食氣。惟酒無量、不及亂。沽酒市脯不食。不撤薑食。不多食。祭於公、不宿肉。祭肉不出三日。出三日、不食之矣。食不語、寢不言。雖疏食菜羹、瓜祭、必齊如也」。

[27] 席不正 『論語』鄉黨「席不正、不坐。鄉人飲酒、杖者出、斯出矣」。

[28] 食於有喪者之側 『論語』述而「子食於有喪者之側、未嘗飽也」。

[29] 是日哭 『論語』述而「子於是日哭、則不歌」。

[30] 見齊衰 『論語』子罕「子見齊衰者、冕衣裳者與瞽者、見之、雖少必作。過之、必趨」。

[31] 三人行 『論語』述而「子曰、「三人行、必有我師焉。擇其善者而從之、其不善者而改之。」」。

[32] 德之不脩 『論語』述而「子曰、「德之不脩、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、

是吾憂也。』。

[33] 使人歌 『論語』述而「子與人歌而善、必使反之、而後和之」。

[34] 子不語 『論語』述而「子不語怪、力、亂、神」。

[35] 子貢曰 『論語』公冶長「子貢曰、「夫子之文章、可得而聞也。夫子之言性與天道、不可得而聞也。』」。

[36] 顏淵喟然歎曰 『論語』子罕「顏淵喟然歎曰、「仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮。欲罷不能、既竭吾才、如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已。』」。

[37] 達巷黨人曰 『論語』子罕「達巷黨人曰、「大哉孔子。博學而無所成名。」子聞之、謂門弟子曰、「吾何執。執御乎。執射乎。吾執御矣。』」。

[38] 牢曰 『論語』子罕「牢曰、「子云、吾不試、故藝。』」。

■哀十二（前 483）六十九歲

『左傳』哀十二

夏五月、昭夫人孟子卒。昭公娶于吳、故不書姓。死不赴、故不稱夫人。不反哭、故言不葬小君。孔子與弔、適季氏。季氏不綽、放絰而拜。…冬十二月、螽、季孫問諸仲尼、仲尼曰、「丘聞之、火伏而後蟄者畢。今火猶西流、司曆過也。」

昭夫人孟子は、

陳司敗問昭公知禮乎。孔子曰、「知禮。」孔子退、揖巫馬期而進之、曰、「吾聞君子不黨、君子亦黨乎。君取於吳爲同姓、謂之吳孟子。君而知禮、孰不知禮。」巫馬期以告。子曰、「丘也幸、苟有過、人必知之。」（『論語』述而）

子云、取妻不取同姓、以厚別也、故買妾不知其姓、則卜之、以此坊民、魯春秋猶去夫人之姓曰吳、其死曰孟子卒、（『禮記』坊記）

にも見える。

泗水以東を制壓した呉は、哀十二（前 483）には橐皋で魯と、郟で魯・衛・宋と會し、哀十三（前 482）にはついに晉・魯と黄池で會盟した。ところが、越の侵攻が始まったため呉は撤退を餘儀なくされた。呉は敗戦を重ね、哀二十二（前 473）の滅亡に至る。

『左傳』哀十二

公會吳于橐皋、吳子使大宰嚭請尋盟。公不欲、使子貢對曰、「盟、所以周信也、故

心以制之、玉帛以奉之、言以結之、明神以要之。寡君以爲苟有盟焉、弗可改也已。若猶可改、日盟何益。今吾子曰、必尋盟、若可尋也、亦可寒也。」乃不尋盟。秋、衛侯會吳于郟。公及衛侯、宋皇瑗盟、而卒辭吳盟。吳人藩衛侯之舍。子服景伯謂子貢曰、「夫諸侯之會、事既畢矣、侯伯致禮、地主歸餼、以相辭也。今吳不行禮於衛、而藩其君舍以難之、子盍見大宰。」乃請束錦以行。語及衛故、大宰誥曰、「寡君願事衛君、衛君之來也緩、寡君懼、故將止之。」子貢曰、「衛君之來、必謀於其眾、其眾或欲或否、是以緩來。其欲來者、子之黨也。其不欲來者、子之讎也。若執衛君、是墮黨而崇讎也。夫墮子者得其志矣。且合諸侯而執衛君、誰敢不懼。墮黨、崇讎、而懼諸侯、或者難以霸乎。」大宰誥說、乃舍衛侯。

には哀七に引き續き、子貢の大宰誥との交渉が見える。

『論語』子罕

大宰問於子貢曰、「夫子聖者與。何其多能也。」子貢曰、「固天縱之將聖、又多能也。」

子聞之、曰、「大宰知我乎。吾少也賤、故多能鄙事。君子多乎哉。不多也。」^{*149}

にも大宰誥と子貢の對話が見える。

●哀十四（前 481）七十一歳

魯哀公十四年春、狩大野。叔孫氏車子鉏商獲獸、以爲不祥。仲尼視之、曰、「麟也。」取之 [1]。曰、「河不出圖、雒不出書、吾已矣夫。」 [2] 顏淵死、孔子曰、「天喪予。」及西狩見麟、曰、「吾道窮矣。」 [3] 喟然歎曰、「莫知我夫。」子貢曰、「何爲莫知子。」子曰、「不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎。」 [4] 「不降其志、不辱其身、伯夷・叔齊乎。」謂「柳下惠・少連降志辱身矣」。謂「虞仲・夷逸隱居放言、行中清、廢中權」。「我則異於是、無可無不可。」 [5] 子曰、「弗乎弗乎、君子病沒世而名不稱焉 [6]。吾道不行矣 [7]、吾何以自見於後世哉。 [8]」乃因史記作春秋、上至隱公、下訖哀公十四年、十二公。據魯、親周、故殷、運之三代。約其文辭而指博 [9]。故吳楚之君自稱王、而春秋貶之曰「子」 [10]。踐土之會實召周天子、而春秋諱之曰「天王狩於河陽」

*149 注「孔曰、大宰、大夫官名、或吳或宋、未可分也。疑孔子多能於小藝」・疏「正義曰、云「大宰、大夫官名」者、案周禮、大宰六卿之長、卿即上大夫也、故云大夫官名也。云「或吳或宋、未可分也」者、以當時惟吳・宋二國上大夫稱大宰、諸國雖有大宰、非上大夫、故云「或吳或宋、未可分也」。鄭云「是吳大宰誥也」。以左傳哀十二年、「公會吳于橐臯、吳子使大宰誥請尋盟。公不欲、使子貢對」、又子貢嘗適吳、故鄭以爲是吳大宰誥也」。

[11]、推此類以繩當世。貶損之義、後有王者舉而開之。春秋之義行 [12]、則天下亂臣賊子懼焉 [13]。孔子在位聽訟、文辭有可與人共者、弗獨有也 [14]。至於爲春秋、筆則筆、削則削、子夏之徒不能贊一辭 [15]。弟子受春秋、孔子曰、「後世知丘者以春秋、而罪丘者亦以春秋。」 [16]

[1] 魯哀公十四年春 『春秋經』 哀十四「十有四年春、西狩獲麟」に對する『左傳』 哀十四

十四年春、西狩於大野、叔孫氏之車子鉏商獲麟、以爲不祥、以賜虞人。仲尼觀之、曰、「麟也。」然後取之。

に據る。『公羊』『穀梁』の經は「獲麟」で終わるが、『左傳』の經は哀十六「孔丘卒」まで續く。『經典釋文』

孔子作春秋、終于獲麟之一句、公羊・穀梁經是也。弟子欲記聖師之卒、故採魯史記以續夫子之經、而終于此。

は、「獲麟」までは孔子の筆で、それ以降は弟子の續經であるとするが、洪業^{*150}が論ずるように、齊地で『公羊』が編纂された際に哀十四「夏四月、齊陳恆執其君、寘于舒州。…齊人弑其君壬于舒州」を嫌って「獲麟」以後の經を削除したものであろう。「獲麟」で終わるのは、それが瑞祥として經傳の掉尾にふさわしく潤色しうる材料であったためである。「獲麟」についての『左傳』の記述が孔子の博識を示すだけのごく簡単なものであることは、「獲麟」で經を終わることが、『左傳』以後に發生したことを明示する。

[2] 河不出圖 『論語』 子罕「子曰、「鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫。」」・『易』 繫辭上「河出圖、洛出書、聖人則之」。

[3] 顔淵死 『公羊』 哀十四

十有四年春、西狩獲麟。何以書。記異也。何異爾。非中國之獸也。然則孰狩之。薪采者也。薪采者、則微者也。曷爲以狩言之。大之也。曷爲大之。爲獲麟大之也。曷爲爲獲麟大之。麟者、仁獸也。有王者則至、無王者則不至。有以告者曰、「有麋而角者。」孔子曰、「孰爲來哉。孰爲來哉。」反袂拭面、涕沾袍。顔淵死、子曰、「噫。天喪予。」子路死。子曰、「噫。天祝予。」西狩獲麟、孔子曰、「吾道窮矣。」

に據る。「顔淵死、子曰、「噫。天喪予。」」は、『論語』 先進「顔淵死。子曰、「噫。天

*150 洪業「春秋經傳引得序」(1937。『洪業論學集』、中華書局、1981)。

喪予。天喪予。』」の引用である。

顔回の生卒については、錢穆*151を追認することになるが、仲尼弟子列傳「少孔子三十歳」より昭二十一（前521）生。同じく仲尼弟子列傳「回年二十九、髮盡白、蚤死」を『孔子家語』七十二弟子解が「年二十九而髮白、三十一早死」に作ることから、「三十一」の脱落、および「四（三）」→「三」の誤寫を想定し、四十一歳卒とすると卒年は正に哀十四（前481）となる。

[4] 喟然歎曰 『論語』 憲問

子曰、「莫我知也夫。」子貢曰、「何爲其莫知子也。」子曰、「不怨天、不尤人。下學而上達。知我者、其天乎。」

に據る。「喟然歎曰」は、上文「孔子喟然歎曰、「苟有用我者、期月而已、三年有成。」と同様、『論語』に見えず、孔子世家の段階で補われたものである。

[5] 不降其志 『論語』 微子「子曰、「不降其志、不辱其身、伯夷・叔齊與。」謂、「柳下惠・少連、降志辱身矣。言中倫、行中慮、其斯而已矣。」謂、「虞仲・夷逸、隱居放言。身中清、廢中權。」「我則異於是、無可無不可。」」。

[6] 君子病沒世而名不稱焉 『論語』 衛靈公「子曰、「君子疾沒世而名不稱焉。」」。

[7] 吾道不行矣 『論語』 公冶長「子曰、「道不行、乘桴浮于海。從我者其由與。」子路聞之喜。子曰、「由也好勇過我、無所取材。」」。

[8] 吾何以自見於後世哉 「自見於後世」は、『史記』平原君列傳「太史公曰、…然虞卿非窮愁、亦不能著書以自見於後世云」に見える。

[9] 乃因史記作春秋 『史記』十二諸侯年表「是以孔子明王道、干七十餘君、莫能用、故西觀周室、論史記舊聞、興於魯而次春秋、上記隱、下至哀之獲麟、約其辭文、去其煩重、以制義法、王道備、人事浹・『春秋繁露』三代改制質文「故春秋應天作新王之事、時正黑統、王魯、尚黑、緇夏、親周、故宋、樂宜親招武、故以虞錄親、樂制宜商、合伯子男爲一等」。

孔子の『春秋』制作は、『孟子』

世衰道微、邪說暴行有作、臣弑其君者有之、子弑其父者有之。孔子懼、作春秋。

春秋、天子之事也、是故孔子曰、「知我者、其惟春秋乎。罪我者、其惟春秋乎。」

*151 錢穆『先秦諸子繫年』26 孔鯉顔回卒年考。

…孔子成春秋、而亂臣賊子懼。(滕文公下)

王者之跡熄、而詩亡、詩亡然後春秋作。晉之乘・楚之檮杌・魯之春秋、一也。

其事則齊桓・晉文、其文則史。孔子曰、「其義則丘竊取之矣。」(離婁下)

に初見する。『左傳』には、孔子の春秋制作が示されない。杜預・春秋左氏傳序に對する孔穎達疏が、成十四

九月、僑如以夫人婦姜氏至自齊。舍族、尊夫人也。故君子曰、「春秋之稱、微而顯、志而晦、婉而成章、盡而不汙、懲惡而勸善、非聖人、誰能修之。」

に對し「聖人指謂孔子」とすることには躊躇を覚えざるを得ない。上文に指摘したように、そも『左傳』において「聖人」は漢代以降の孔子のような至高の存在を示唆しない。ここであらためて『春秋』に對する『左傳』の認識を整理するならば、まずは、

二年春、晉侯使韓宣子來聘、且告爲政、而來見、禮也。觀書於大史氏、見易象與魯春秋、曰、「周禮盡在魯矣、吾乃今知周公之德與周之所以王也。」(昭二)

とあるように、『春秋』は「周禮」「周公之德」「周之所以王」を示すものと總括される。ついで、

乙丑、趙穿攻靈公於桃園。宣子未出山而復。太史書曰、「趙盾弑其君。」以示於朝。宣子曰、「不然。」對曰、「子爲正卿、亡不越竟、反不討賊、非子而誰。」宣子曰、「嗚呼。詩曰、我之懷矣、自詒伊感、其我之謂矣。」孔子曰、「董狐、古之良史也、書法不隱。趙宣子、古之良大夫也、爲法受惡。惜也、越竟乃免。」(宣二)

大史書曰、「崔杼弑其君。」崔子殺之。其弟嗣書、而死者二人。其弟又書、乃舍之。南史氏聞大史盡死、執簡以往。聞既書矣、乃還。(襄二十五)

とあるように、『春秋經』宣二「秋九月乙丑、晉趙盾弑其君夷臯」・襄二十五「夏五月乙亥、齊崔杼弑其君光」など、個々の經文は「史」の記録に由來するものとされる。「聖人」は「周禮」を奉じたこれら「史」を指すものとなろう。

[10] 故吳楚之君自稱王 『禮記』坊記「春秋不稱楚越之王喪」。

[11] 踐土之會實召周天子 『春秋』僖二十八「天王狩于河陽」に對する『左傳』に、是會也、晉侯召王、以諸侯見、且使王狩。仲尼曰、「以臣召君、不可以訓。」故書曰、「天王狩于河陽。」言非其地也、且明德也。

と見える。踐土の會はこれに先立つ別の事件であり、孔子世家の誤認である。

晉世家にも「孔子讀史記至文公、曰「諸侯無召王」。「王狩河陽」者、春秋諱之也。」とある。

[12] 春秋之義行 「春秋之義」は『公羊』哀十四

春秋何以始乎隱。祖之所逮聞也。所見異辭、所聞異辭、所傳聞異辭。何以終乎哀十四年。曰、備矣。君子曷爲爲春秋。撥亂世、反諸正、莫近諸春秋、則未知其爲是與。其諸君子樂道堯舜之道與。末不亦樂乎、堯舜之知君子也。制春秋之義以俟後聖、以君子之爲、亦有樂乎此也。

に初見する。

[13] 則天下亂臣賊子懼焉 『孟子』滕文公下「孔子成春秋、而亂臣賊子懼」。

[14] 孔子在位聽訟 『春秋繁露』五行相生「據法聽訟、無有所阿、孔子是也。爲魯司寇、斷獄屯屯、與眾共之、不敢自專」。

[15] 子夏之徒不能贊一辭 『公羊疏』昭十二「春秋說云、孔子作春秋、一萬八千字、九月而書成、以授游・夏之徒、游・夏之徒不能改一字」・哀十四「故孝經說云、春秋屬商、孝經屬參是也」。

[16] 後世知丘者以春秋 『孟子』滕文公下「孔子懼、作春秋。春秋、天子之事也、是故孔子曰、「知我者、其惟春秋乎。罪我者、其惟春秋乎。」」。

この年、陳恆が齊簡公を弑した。孔子が出兵を求めたことが、『論語』憲問に見え、『左傳』がこれを引くが、『史記』は何ら言及していない。

『論語』憲問	『左傳』哀十四
陳成子弑簡公。 孔子沐浴而朝、告於哀公曰、「陳恆弑其君、請討之。」 公曰、「告夫三子。」孔子曰、「以吾從大夫之後、不敢不告也。君曰告夫三子者。」之三子告、不可。孔子曰、「以吾從大夫之後、不敢不告也。」	甲午、齊陳恆弑其君壬于舒州。 孔丘三日齊、而請伐齊三、公曰、「魯爲齊弱久矣、子之伐之、將若之何。」對曰、「陳恆弑其君、民之不與者半。以魯之眾加齊之半、可克也。」 公曰、「子告季孫。」孔子辭、退而告人曰、「吾以從大夫之後也、故不敢不言。」

なお、陳恆の桓公弑殺の發端を、『左傳』哀十四

齊簡公之在魯也、闕止有寵焉。(注「簡公、悼公陽生子壬也。闕止、子我也。)」及即位、使爲政。陳成子憚之、驟顧諸朝。諸御鞅言於公曰、「陳、闕不可竝也、君其擇焉。」弗聽。

は、陳恆と闕止(字子我)の對立に求める。仲尼弟子列傳

宰我爲臨菑大夫、與田常作亂、以夷其族、孔子恥之。

は、宰予(字子我)を誤って闕止と同一人物としたものである*152。この錯誤は、『呂氏春秋』慎勢

齊簡公有臣曰諸御鞅、諫於簡公曰、「陳成常與宰予、之二臣者甚相憎也、臣恐其相攻也。相攻唯固則危上矣。願君之去一人也。」簡公曰、「非而細人所能識也。」居無幾何、陳成常果攻宰予於庭、即簡公於廟。簡公喟焉太息曰、「余不能用鞅之言、以至此患也。」

にすでに見える。

●哀十五(前480)七十二歳

明歳、子路死於衛 [1]。

[1] 子路死於衛 上掲『論語』季氏「季氏將伐顛臾。冉有・季路見於孔子曰」にうかがわれるように、子路は孔子に従って魯に戻り、冉有の次席として季康子に仕えたが*153、『左傳』哀十四

小邾射以句繹來奔、曰、「使季路要我、吾無盟矣。」使子路、子路辭。季康子使冉有謂之曰、「千乘之國、不信其盟、而信子之言、子何辱焉。」對曰、「魯有事于小邾、不敢問故、死其城下可也。彼不臣、而濟其言、是義之也、由弗能。」

には季康子の命令を拒んだことが、ついで哀十五

秋、齊陳瓘如楚、過衛、仲由見之、曰、「天或者以陳氏爲斧斤、既斲喪公室、而他人有之、不可知也。其使終饗之、亦不可知也。若善魯以待時、不亦可乎。何必惡焉。」子玉曰、「然、吾受命矣、子使告我弟。」

*152 崔述『洙泗考信餘錄』卷二/宰我。

*153 『論語』雍也「季康子問、「仲由可使從政也與。」子曰、「由也果、於從政乎何有。」曰、「賜也、可使從政也與。」曰、「賜也達、於從政乎何有。」曰、「求也、可使從政也與。」曰、「求也藝、於從政乎何有。」」。

には衛にあったことが見え、季康子より致仕して衛の世族孔悝に邑宰として仕えたものである。檀弓下に

子路去魯、謂顔淵曰、「何以贈我。」曰、「吾聞之也、去國、則哭於墓而後行。反其國、不哭、展墓而入。」謂子路曰、「何以處我。」子路曰、「吾聞之也、過墓則式、過祀則下。」

とある。顔回は哀十四に卒しているの、子路は哀十四のうちに魯を退去したことがわかる。子路は大子蒯聵の篡奪に際して鬪死した。衛世家・仲尼弟子列傳は『左傳』哀十五を引く*154。

『左傳』 哀十五	『史記』 衛世家	『史記』 仲尼弟子列傳
<p>衛孔圉取太子蒯聵之姊、生悝。孔氏之豎渾良夫長而美、孔文子卒、通於內。大子在戚、孔姬使之焉。太子與之言曰、「苟使我入獲國、服冕乘軒、三死無與。」與之盟、爲請於伯姬。</p> <p>閏月、良夫與太子入、舍於孔氏之外圃。昏、二人蒙衣而乘、寺人羅御、如孔氏。孔氏之老嬖甯問之、稱姻妾以告。遂入、適伯姬氏。既食、孔伯姬杖戈而先、太子與五人介、輿豶從之。迫孔悝於廁、強盟之、遂劫以登臺。嬖甯將飲酒、炙未熟、聞亂、使告季子。召獲駕乘車、行爵食炙、奉衛侯輒來奔。</p>	<p>十二年、初、孔圉文子取太子蒯聵之姊、生悝。孔氏之豎渾良夫美好、孔文子卒、良夫通於悝母。太子在宿、悝母使良夫於太子。太子與良夫言曰、「苟能入我國、報子以乘軒、免子三死、毋所與。」與之盟、許以悝母爲妻。</p> <p>閏月、良夫與太子入、舍孔氏之外圃。昏、二人蒙衣而乘、宦者羅御、如孔氏。孔氏之老嬖甯問之、稱姻妾以告。遂入、適伯姬氏。既食、悝母杖戈而先、太子與五人介、輿豶從之。伯姬劫悝於廁、彊盟之、遂劫以登臺。嬖甯將飲酒、炙未熟、聞亂、使告仲由。召護駕乘車、行爵食炙、奉出公輒奔魯。</p>	<p>出公立十二年、其父蕢聵居外、不得入。子路爲衛大夫孔悝之邑宰。蕢聵乃與孔悝作亂、謀入孔悝家、遂與其徒襲攻出公。出公奔魯、而蕢聵入立、是爲莊公。方孔悝作亂、子路在外、聞之而馳往。</p>

*154 『禮記』檀弓上「孔子哭子路於中庭。有人弔者、而夫子拜之。既哭、進使者而問故。使者曰、醢之矣。遂命覆醢」。

<p>季子將入、遇子羔將出、曰、「門已閉矣。」季子曰、「吾姑至焉。」子羔曰、「弗及、不踐其難。」</p> <p>季子曰、「食焉、不辟其難。」子羔遂出、</p> <p>子路入、及門、公孫敢門焉、曰、「無入爲也。」季子曰、「是公孫也、求利焉、而逃其難。由不然、利其祿、必救其患。」有使者出、乃入、</p> <p>曰、「太子焉用孔悝。雖殺之、必或繼之。」且曰、「太子無勇、若燔臺、半、必舍孔叔。」太子聞之、懼、下石乞、孟獻敵子路、以戈擊之、斷纓。子路曰、「君子死、冠不免。」結纓而死。</p> <p>孔子聞衛亂、曰、「柴也其來、由也死矣。」孔悝立莊公。</p>	<p>仲由將入、遇子羔將出、曰、「門已閉矣。」子路曰、「吾姑至矣。」子羔曰、「不及、莫踐其難。」</p> <p>子路曰、「食焉不辟其難。」子羔遂出。</p> <p>子路入、及門、公孫敢闔門、曰、「毋入爲也。」子路曰、「是公孫也。求利而逃其難。由不然、利其祿、必救其患。」有使者出、子路乃得入。</p> <p>曰、「太子焉用孔悝。雖殺之、必或繼之。」且曰、「太子無勇。若燔臺、必舍孔叔。」太子聞之、懼、下石乞、孟獻敵子路、以戈擊之、割纓。子路曰、「君子死、冠不免。」結纓而死。</p> <p>孔子聞衛亂、曰、「嗟乎。柴也其來乎。由也其死矣。」孔悝竟立太子蒯聵、是爲莊公。</p>	<p>遇子羔出衛城門、謂子路曰、「出公去矣、而門已閉、子可還矣、</p> <p>毋空受其禍。」</p> <p>子路曰、「食其食者不避其難。」子羔卒去。</p> <p>有使者入城、城門開、子路隨而入。造蕢、蕢與孔悝登臺。</p> <p>子路曰、「君焉用孔悝。請得而殺之。」蕢弗聽。於是子路欲燔臺、</p> <p>蕢懼、乃下石乞、壺廩攻子路、擊斷子路之纓。子路曰、「君子死而冠不免。」遂結纓而死。</p> <p>孔子聞衛亂、曰、「嗟乎、由死矣。」已而果死。</p>
---	--	--

哀十五には、孔門の子羔が見えるが、杜注「子羔、衛大夫高柴、孔子弟子、將出奔」は衛の大夫であったとする。仲尼弟子列傳「高柴字子羔。少孔子三十歳」によれば、子羔は四十二歳である。

仲尼弟子列傳には下文に「是時子貢爲魯使於齊」と見える。上述の如く、魯は哀十（前485）以降、呉に従って齊に對峙したが、哀十三（前482）の黄池の會を最後に呉が中原を撤退したため、哀十五（前480）、齊と講和した。『左傳』哀十五に

冬、及齊平。子服景伯如齊、子贛爲介、見公孫成、曰、「人皆臣人、而有背人之心、況齊人雖爲子役、其有不貳乎。子、周公之孫也、多饗大利、猶思不義。利不可得、而喪宗國、將焉用之。」成曰、「善哉。吾不早聞命。」陳成子館客、曰、「寡君使恆告曰、寡人願事君如事衛君。」景伯揖子贛而進之、對曰、「寡君之願也。昔晉人伐衛、

齊爲衛故、伐晉冠氏、喪車五百。因與衛地、自濟以西、禚・媚・杏以南、書社五百。吳人加敝邑以亂、齊因其病、取謹與闡。寡君是以寒心。若得視衛君之事君也、則固所願也。」成子病之、乃歸成。公孫宿以其兵甲入于嬴。

とある。

●哀十六（前 479）七十三歳

孔子病、子貢請見。孔子方負杖逍遙於門、曰、「賜、汝來何其晚也。」孔子因歎、歌曰、「太山壞乎。梁柱摧乎。哲人萎乎。」因以涕下。謂子貢曰、「天下無道久矣、莫能宗予。夏人殯於東階、周人於西階、殷人兩柱間。昨暮予夢坐奠兩柱之間、予始殷人也。」後七日卒 [1]。孔子年七十三、以魯哀公十六年四月己丑卒。哀公誄之曰、「旻天不弔、不憇遺一老、俾屏余一人以在位、瑩瑩余在疚。嗚呼哀哉。尼父、毋自律。」子貢曰、「君其不沒於魯乎。夫子之言曰、禮失則昏、名失則愆。失志爲昏、失所爲愆。生不能用、死而誄之、非禮也。稱余一人、非名也。」 [2] 孔子葬魯城北泗上、弟子皆服三年。三年心喪畢、相訣而去、則哭、各復盡哀。或復留。唯子贛廬於冢上、凡六年、然後去 [3]。弟子及魯人往從冢而家者百有餘室、因命曰孔里。魯世世相傳以歲時奉祠孔子冢、而諸儒亦講禮鄉飲大射於孔子冢。孔子冢大一頃。故所居堂弟子內、後世因廟藏孔子衣冠琴車書、至于漢二百餘年不絕。高皇帝過魯、以太牢祠焉 [4]。諸侯卿相至、常先謁然後從政。

[1] 孔子病 『禮記』檀弓上「孔子蚤作、負手曳杖、消搖於門、歌曰、「泰山其頽乎。梁木其壞乎。哲人其萎乎。」既歌而入、當戶而坐。子貢聞之曰、「泰山其頽、則吾將安仰。梁木其壞、哲人其萎、則吾將安放。夫子殆將病也。」遂趨而入。夫子曰、「賜。爾來何遲也。夏后氏殯於東階之上、則猶在阼也。殷人殯於兩楹之間、則與賓主夾之也。周人殯於西階之上、則猶賓之也。而丘也殷人也。予疇昔之夜、夢坐奠於兩楹之間。夫明王不興、而天下其孰能宗予。予殆將死也。」蓋寢疾七日而沒」。

[2] 孔子年七十三 『春秋經』哀十六「夏四月己丑、孔丘卒」に對する『左傳』

夏四月己丑、孔丘卒。公誄之曰、「旻天不弔、不憇遺一老、俾屏余一人以在位、瑩瑩余在疚。嗚呼哀哉尼父。無自律。」子贛曰、「君其不沒於魯乎。夫子之言曰、「禮失則昏、名失則愆。」失志爲昏、失所爲愆。生不能用、死而誄之、非禮也。稱一人、非名也。君兩失之。」

に據る。

『禮記』檀弓下「魯哀公誄孔丘曰、「天不遺耆老、莫相予位焉、嗚呼哀哉、尼父。」」を『詩』小雅/節南山「不弔昊天」・十月之交「不憇遺一老、俾守我王」・周頌/閔予小子「嬖嬖在疚」を用いて修飾したものである。

「四月己丑」につき、杜注「四月十八日、乙丑、無己丑。己丑、五月十二日。日月必有誤」は「四月乙丑」もしくは「五月己丑」の誤とするが、これは、『左傳』哀十五が「冬」のあとに「閏月」を置くため、十六年四月を建辰とみなしたためである。杜預は『左傳』の經傳が單一の曆法に従うものとするが^{*155}、江永^{*156}が指摘するように、『左傳』哀十五閏月の衛の内亂を『春秋經』哀十六「十有六年春王正月己卯、衛世子蒯聵自戚入于衛、衛侯輒來奔」は哀十六正月に繋げ、魯曆哀十六年正月が、衛曆では前年閏十二月であったことを示している。従って十六年四月は建卯となり、たとえば王韜によれば、四月己卯 16 朔で己丑 26 は十一日となる^{*157}。

	實朔	杜預	王韜
479			●哀公十六年
01 子	辛亥 48	閏十二月庚戌 47	正月辛亥 48
		●哀公十六年	
02 丑	辛巳 18	正月己卯 16	二月庚辰 17
03 寅	庚戌 47	二月己酉 46	三月庚戌 47
04 卯	庚辰 17	三月己卯 16	四月己卯 16
05 辰	己酉 46	四月戊申 45	五月己酉 46
06 巳	己卯 16	五月戊寅 15	六月己卯 16
07 午	戊申 45	六月丁未 44	七月戊申 45
08 未	丁丑 14	七月丁丑 14	八月戊寅 15
09 申	丁未 44	八月丙午 43	九月丁未 44
10 酉	丙子 13	九月丙子 13	十月丁丑 14
11 戌	丙午 43	十月乙巳 42	十一月丙午 43
12 亥	乙亥 12	十一月乙亥 12	十二月丙子 13
13	乙巳 42	十二月甲辰大 41	閏十二月乙巳 42

*155 吉本「經傳長曆考」(『京都大學文學部研究紀要』58、2019)。

*156 江永『鄉黨圖考』卷二/聖蹟考。

*157 表の第1列は西曆年次および冬至月を01とした場合の月次、第2列は張培瑜『中國先秦史曆表』(齊魯書社、1987)「冬至合朔時日表(公元前1500年至前105年)」の實朔干支、第3列は杜預「春秋長曆」、第4列は王韜『春秋閏至日考』の月・朔日干支を示す。

經に卒が記されるのは、原則的に卿に限られる。「孔丘卒」と、大夫身分であった孔子の卒が記されるのは、『經典釋文』が「弟子欲記聖師之卒」というように、孔門弟子が特例的に附記したものであろう。

「孔子卒」は、周本紀・秦本紀・魯世家・燕世家・陳世家・衛世家・晉世家・鄭世家および魯表にも見える。

[3] 孔子葬魯城北泗上 「弟子皆服三年」以下は、『孟子』滕文公上

昔者孔子沒、三年之外、門人治任將歸、入揖於子貢、相嚮而哭、皆失聲、然後歸。子貢反、築室於場、獨居三年、然後歸。他日、子夏・子張・子游以有若似聖人、欲以所事孔子事之、彊曾子。曾子曰、「不可。江漢以濯之、秋陽以暴之、皜皜乎不可尚已。」

に據る。「三年心喪」は、『禮記』檀弓上

事親有隱而無犯、左右就養無方、服勤至死、致喪三年。事君有犯而無隱、左右就養有方、服勤至死、方喪三年。事師無犯無隱、左右就養無方、服勤至死、心喪三年。に見える。『孟子』は、子貢が六年の喪に服したとするが、『左傳』

衛出公自城鉏使以弓問子贛、且曰、「吾其入乎。」子贛稽首受弓、對曰、「臣不識也。」私於使者曰、「昔成公孫於陳、甯武子・孫莊子爲宛濮之盟而君入。獻公孫於衛齊、子鮮・子展爲夷儀之盟而君入。今君再在孫矣、內不聞獻之親、外不聞成之卿、則賜不識所由入也。詩曰、無競惟人、四方其順之。若得其人、四方以爲主、而國於何有。」(哀二十六・前 469)

二十七年春、越子使后庸來聘、且言邾田、封于駘上。二月、盟于平陽、三子皆從。康子病之、言及子贛、曰、「若在此、吾不及此夫。」武伯曰、「然。何不召。」曰、「固將召之。」文子曰、「他日請念。」(哀二十七・前 468)

では確かに、子貢はすでに魯を致仕して衛に歸國していたようである^{*158}。

一方、『左傳』哀十七(前 478)には、

公會齊侯盟于蒙、孟武伯相。齊侯稽首、公拜。齊人怒。武伯曰、「非天子、寡君無所稽首。」武伯問於高柴曰、「諸侯盟、誰執牛耳。」季羔曰、「鄆衍之役、吳公子姑曹。發陽之役、衛石魋。」武伯曰、「然則彘也。」

*158 錢穆『先秦諸子繫年』29 孔子弟子通考。

と、孔子卒の翌年に子羔が蒙の盟において孟武伯に隨從したことが見える。『禮記』檀弓下に

成人有其兄死而不爲衰者、聞子皋將爲成宰、遂爲衰。成人曰、「蠶則績而蟹有匡、范則冠而蟬有綏、兄則死而子皋爲之衰。」

とある。哀十四（前 481）～哀十五（前 480）に成宰・公孫宿（公孫成）が叛しており、哀十五に魯に歸國した子羔が、その後に成宰となり、孟武伯に仕えたものであろう。

[4] 高皇帝過魯 『漢書』高帝紀「（十二年）十一月、行自淮南還。過魯、以大牢祠孔子」。

孔子生鯉、字伯魚。伯魚年五十、先孔子死。伯魚生伋、字子思、年六十二。嘗困於宋。子思作中庸 [5]。子思生白、字子上、年四十七。子上生求、字子家、年四十五。子家生箕、字子京、年四十六。子京生穿、字子高、年五十一。子高生子慎、年五十七、嘗爲魏相。子慎生鮒、年五十七、爲陳王涉博士、死於陳下 [6]。鮒弟子襄、年五十七。嘗爲孝惠皇帝博士、遷爲長沙太守。長九尺六寸。子襄生忠、年五十七。忠生武、武生延年及安國。安國爲今皇帝博士、至臨淮太守、蚤卒 [7]。安國生印、印生驩。

[5] 孔子生鯉 伯魚・子思の生卒については、錢穆^{*159}の考證をほぼ追認することになるが、以下の如くである。すなわち、伯魚が孔子に先立って卒しているので、子思の出生は孔子卒年以前となる。一方、『禮記』檀弓下「穆公問於子思曰」によれば、子思は魯穆公（前 409～前 377^{*160}）に仕えている。穆公元年は哀公十六年の七十年後となるので、子思の卒年齢「六十二」は「八十二」の誤となろう。伯魚の卒年は『孔子家語』本姓解

孔子三歲而叔梁紇卒、葬於防。至十九、娶于宋之亓官氏、一歲 [昭十・前 532] 而生伯魚、魚之生也、魯昭公以鯉魚賜孔子、榮君之貺、故因以名曰鯉、而字伯魚、魚年五十 [哀十二・前 483]、先孔子卒。

によれば、哀十二（前 483）となる。子思がこの年に生まれ、八十二歳で卒したとすると、その生卒は前 483～前 402 年となる。

*159 錢穆『先秦諸子繫年』26 孔鯉顏回卒年考・58 子思生卒考。

*160 戰國王侯の在位年代については、吉本「史記戰國紀年考」（『立命館文學』556、1998）を見よ。

なお『禮記』檀弓下

伯魚之母死、期而猶哭。夫子聞之曰、「誰與哭者。」門人曰、「鯉也。」夫子曰、「嘻。其甚也。」伯魚聞之、遂除之。

によれば、伯魚の母は伯魚に先立ち卒していた。『闕里誌』卷四/年譜は、孔子「六十七歳」(哀十)にこの記述を繋げる。

[6] 子慎生鮒 『史記』秦楚之際月表/(二世元年)十二月/楚「六 陳涉死」によれば陳涉の死は二世元年(前209)となる。孔鮒がこの年に卒したとするとその生卒年は前265～前209年となる。子上～子慎の生卒年は不明だが、鯉の生年前532～鮒の卒年前209の324年で8世代、1世代40.5年として生卒年を推算すると次表のようになる。

	卒年齢	推算生年	生卒
1 伯魚	50	532	532-483
2 子思	82	491.5	483-402
3 子上	47	451	(451-405)
4 子家	45	410.5	(410-365)
5 子京	46	370	(370-325)
6 子高	51	329.5	(329-279)
7 子慎	57	289	(289-233)
8 鮒	57	248.5	265-209

[7] 武生延年及安國 『漢書』孔光傳

孔光字子夏、孔子十四世之孫也。孔子生伯魚鯉、鯉生子思伋、伋生子上帛、帛生子家求、求生子真箕、箕生子高穿。穿生順、順爲魏相。順生鮒、鮒爲陳涉博士、死陳下。鮒弟子襄爲孝惠博士、長沙太傅。襄生忠、忠生武及安國、武生延年。延年生霸、字次儒。霸生光焉。

の孔氏系譜は孔子世家と文字の異同があり、加えて孔安國を孔忠の子、孔武の弟とする。

孔安國につき、『史記』儒林列傳には『詩』の申公の記述に、「弟子爲博士者十餘人、孔安國至臨淮太守」とあり、『書』の記述に

伏生教濟南張生及歐陽生、歐陽生教千乘兒寬。兒寬既通尚書、以文學應郡舉、詣博士受業、受業孔安國。… 自此之後、魯周霸・孔安國・雒陽賈嘉、頗能言尚書事。

孔氏有古文尚書、而安國以今文讀之、因以起其家。逸書得十餘篇、蓋尚書滋多於是矣。

とある。

太史公曰、詩有之、「高山仰止、景行行止。」[8] 雖不能至、然心鄉往之。余讀孔氏書、想見其爲人。適魯、觀仲尼廟堂車服禮器、諸生以時習禮其家、余祇迴留之不能去云。天下君王至于賢人歎矣、當時則榮、沒則已焉。孔子布衣 [9]、傳十餘世、學者宗之。自天子王侯、中國言六藝者折中於夫子、可謂至聖矣。

[8] 詩有之 『詩』小雅 / 車鞶「高山仰止、景行行止。四牡騑騑、六轡如琴。觀爾新昏、以慰我心」。

[9] 孔子布衣 孔子を「布衣」と稱することは、『呂氏春秋』

湯・武、千乘也、而士皆歸之。桀・紂、天子也、而士皆去之。孔・墨、布衣之士也。萬乘之主、千乘之君、不能與之爭士也。自此觀之、尊貴富大不足以來士矣、必自知之然後可。(不侵)

孔子見齊景公、景公致廩丘以爲養、孔子辭不受、入謂弟子曰、「吾聞君子當功以受祿。今說景公、景公未之行而賜之廩丘、其不知丘亦甚矣。」令弟子趣駕、辭而行。孔子布衣也、官在魯司寇、萬乘難與比行、三王之佐不顯焉、取舍不苟也夫。(高義)

孔・墨・甯越、皆布衣之士也、慮於天下、以爲無若先王之術者、故日夜學之。(博志)

に初見する。

以上、孔子世家の記述を逐次分析してきた。上文で示した個別的所見に基づき、孔子世家における孔子傳の性格を確認しておこう。

551BC	襄二十二	魯襄公二十二年而孔子生。	*
		丘生而叔梁紇死、…孔子母死、…孔子要經、季氏饗士、	*
535	昭七	孔子年十七、魯大夫孟釐子病且死、	◆『左傳』昭七
		孔子貧且賤。及長、嘗爲季氏史、…魯南宮敬叔言魯君曰、「請與孔子適周。」	*

522	昭二十	魯昭公之二十年、而孔子蓋年三十矣。齊景公與晏嬰來適魯、	『左傳』昭二十
517	昭二十五	孔子年三十五、而季平子與郈昭伯以鬪雞故得罪魯昭公、	『左傳』昭二十五
		其後頃之、魯亂。孔子適齊、	*
510	昭三十二	孔子年四十二、魯昭公卒於乾侯、	『左傳』昭三十二
505	定五	定公立五年、夏、季平子卒、	『左傳』定五
502	定八	定公八年、公山不狃不得意於季氏、	『左傳』定八
501	定九	定公九年、陽虎不勝、奔于齊。是時孔子年五十。	『左傳』定九
500	定十	定公十年春、及齊平。夏、齊大夫黎鉏言於景公曰、	◆『左傳』定十
498	定十二	定公十三年夏、孔子言於定公曰、…十二月、公圍成、	◆『左傳』定十二
		定公十四年、孔子年五十六、由大司寇行攝相事、	*
497	定十三	孔子遂適衛、…居十月、去衛。…月餘、反乎衛、…居衛月餘、…是歲、魯定公卒。	*
496	定十四	孔子遂至陳、主於司城貞子家。	*
494	哀元	歲餘、吳王夫差伐陳、…	『左傳』哀元
		孔子居陳三歲、…	*
493	哀二	於是孔子去陳。…孔子遂適衛。…孔子遂行、復如陳。	*
		夏、衛靈公卒、…六月、趙鞅內太子蒯聩于戚。…冬、蔡遷于州來。是歲魯哀公三年、而孔子年六十矣。	『左傳』哀二
492	哀三	齊助衛圍戚、…夏、魯桓釐廟燔、…秋、季桓子病、	◆『左傳』哀三
491	哀四	明年、孔子自陳遷于蔡。	*
		蔡昭公將如吳、	『左傳』哀四
490	哀五	秋、齊景公卒。	『左傳』哀五
489	哀六	明年、孔子自蔡如葉。	*
		孔子遷于蔡三歲、吳伐陳。…其秋、楚昭王卒于城父。	『左傳』哀六
		於是孔子自楚反乎衛。是歲也、孔子年六十三、而魯哀公六年也。	*
488	哀七	其明年、吳與魯會繪、	『左傳』哀七

485	哀十	孔子曰、「魯衛之政、兄弟也。」	*
484	哀十一	其明年、冉有爲季氏將師、…孔子之去魯凡十四歲而反乎魯。	◆『左傳』哀十一
481	哀十四	魯哀公十四年春、狩大野。	◆『左傳』哀十四
480	哀十五	明歲、子路死於衛。	◆『左傳』哀十五
479	哀十六	孔子年七十三、以魯哀公十六年四月己丑卒。	◆『左傳』哀十六

◆『左傳』に孔子が登場。*孔子世家独自の年次

孔子世家編年の基本的な枠組みは『左傳』によるが、孔子に關わる傳承のほとんどは、『左傳』に孔子が登場するものを除けば、明確な年代が提示されていない。孔子世家は、これらの傳承に「解釋」を施すことで、ある場合には年次を與え、あるいはこれらの傳承をそうした推定を含む年代的枠組みに挿入していったのである。

孔子世家の年次のうち、より確實なものは『左傳』と重なる定十～定十二・哀三・哀十一～哀十六に限られるとってさしつかえない。孔子傳を考える上で、とくに適齊を昭二十五～昭三十二の間に置くことは疑わしい。

今一つ強調しておきたいのは、哀十一～哀十六についての孔子世家の偏向である。孔子世家は「處士」としての孔子の「不仕」を強調し、『左傳』に見える孔子の政治的活動を一切採録しない。また、先秦文獻にはほとんど確認できない六經の編纂者としての側面が大きく強調される。

『論語』『左傳』やや降って『孟子』といった前4世紀以前の文獻から復元される春秋時代の實態、より嚴密にいえば現時点で獲得しうる實態に最も近い時代像に位置づけた場合、孔子世家の孔子は前2世紀の歴史認識でしかない部分を多く含むといわざるをえない。しかし、それにも関わらず、孔子世家の材料の新舊を吟味し、あるいはより古い材料の選擇のありかたを確認することが、現時点で獲得しうる最古の孔子の形象にたどりつくための最も有効な作業となりうるということが了解されたであろう。

襄二十七（前546）の晉楚講和の結果、覇者體制下の軍事的規制が弛緩し、世族支配體制下の矛盾が噴出した。従來の身分制的統治機構に代わり、國君もしくは世族宗主を頂点とする家臣制が擴大した。戰國期に展開する専制國家を支える官僚制的統治機構の濫觴である。一方で、家臣制の展開を一つの契機として、従來「國人」に限定

されていた「士」身分が社会的に開放されつつあった。

こうした状況は全中國的に進行したが、孔子の出現は、加えて魯の特殊性に由来する。すなわち、昭二十五（前 517）～定元（前 509）の八年間にも及ぶ國君不在の結果、統治機構の大幅な再編、それに伴う人材の供給が要請されたのである。こうした趨勢のもと、孔子は、三年で仕官に堪える人材を育成する課程を創出し、即戦力となる人材の供給源として孔門は歓迎された。孔子に限って言えば、その政治的成功は、定九（前 501）～定十二（前 498）のごく短期間に限られるが、その弟子たちは魯さらには衛など中原諸國において仕官をつづけた。先驅者であったことが、その後の儒家の優勢を決定した。

本稿では結果的にこのような政治史的側面ばかりに言及することになったが、それはもとより孔子ないし孔門の一斑であるに過ぎない。『論語』先進

德行、顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。言語、宰我・子貢。政事、冉有・季路。文學、子游・子夏。

に並ぶ高弟たちのうち、子游・子夏は哀十一以後に入門した「後進」、それ以外は定十二以前に入門した「先進」である*161。「後進」の系譜はもっぱら儒教史の文脈で語られてきた。これに對し、「先進」には子路・子貢・冉有といった政治的に活躍した人物と同時に、「隱者」ともいふべき顔回や仕官を拒否した閔子騫がいる。「士」身分の多様な職業選擇が出現しているのであり、それを可能にした春秋後期の社會史的劃期性があらためて注目される。

中國史における「樞軸時代 Achsenzeit*162」については、本稿があらためて孔子世家の分析を行わねばならなかったように、史料論的なレベルの研究さえもなお不十分であるといわざるを得ない。今後の課題はなお山積している。

*161 錢穆『先秦諸子繫年』29 孔子弟子通考。

*162 Karl Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*. München & Zürich 1949. 重田英世訳『ヤスパース選集Ⅸ 歴史の起原と目標』（理想社、1964）。